
リクセニア戦記

坂本伊能

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リクセニア戦記

【Nコード】

N4443F

【作者名】

坂本伊能

【あらすじ】

リクセニア王国という国があった。賢明なる王に統治され、平和を謳歌していた国だったが、この国には2人の王子がいた。賢明なる王が倒れた時、王太子は王の遺言を反故にして武力での王位継承を敢行する。第2王子は兄を討ち、王とならんが為に立ち上がる。

リクセニア戦記 序章（前書き）

横書き読み、PC推奨です。

やけに改行が多くて文章量も多いので。

リクセニア戦記 序章

彼は、汚い男と罵られていた。

神に見出されし証と称された程に白い肌を持つ父王ウェンツェハラウト1世と、雪の様に白く雪解け水のように澄んだ肌を持つとされた母アメーリアの間に生まれた彼。

だが生まれた時から肌は黄色く、両親ともに金色の髪を持ち主でありながら、生まれ育った彼は赤色の髪をしていた。

頬がこけ、糸目であったという父に似ず、目は丸く輪郭は丸かったという母に似ず、瞳は切れ長で輪郭は細かった。

武よりも知を高く評価された父は体格が良くなく、母もまるで人形のように細く病弱であったが、彼は体格が良く、肩幅は広い身長は16歳の時には170半ばに達していた。

まるで、彼と両親には血縁関係が無いと、言わんばかりの青年に彼は育った。

だから周りからは、どちらかの隠し子ではないかと蔑まれ、早くに王室から遠ざけられた。

緑豊かで温暖なリンカフィールドの大きな湖の近くにある、聖エフィカ修道院に預けられたのである。

彼は敬虔な修道士として有名で、1度として修道院を脱走したり、言いつけを破った事は無かった。

また勤勉で、修道院の地下にある書庫から本を借りて、その書写をする事で資金を稼いで修道院が引き取っている孤児達の世話をよく見たりと、優しい青年でもあった。

とても優れたその人柄は、修道院の長である司祭フレシアの伝によつて王室にも伝えられ、王室を離れてから後にも父王ウェンツェハラウトから寵愛されていた。

社交界の人間の中には彼の人柄を聞き及んで、わざわざ修道院に会いに来る人間も居る程である。

ここまでを見れば、彼は何とも出来た人間であつた。
だが。

「あの愚兄を未だに王太子として扱っているとはな……。

貴族の連中は、余程伝統と純血とやらに執心で、人を見る目を損なっている様だ」

王都から届いた手紙に目を通しながら、そんな事を平気で言つてのける彼は、正直人格者には見えなかった。

リクセニア戦記 第1章 Ⅱ 修道士アクセルⅡ

彼はアクセル・ウィンツ・ラザフォード。このリクセニア王国の第二王子である。

堂々と貴族批判をしてのけて、兄である王太子を邪険に扱っている様からは、正直政治状況を憶えたばかりの生意気盛りの青年にしか見えないが。

歳は今年、大陸歴1545年を以て16歳になった。誕生日は2月の14日と真冬真っ直中。それから3ヶ月近くが経って、現在は5月の8日。

春が去り、夏に向かいながらもどこか春独特の暖かさを逃すまいとしている様な、そんな日和の今日である。

そんな暖かな日に、堂々と地下の書庫に入り浸って、僅かに差し込む陽の光を鬱陶しげに手で覆い隠すのが、彼の本性だった。

そう彼女、アクセルと3歳の頃から付き合いのある少女、リシス・エレア・キュレインは思っている。

「王都からの召喚命令？」

彼女は長い黒髪をかき上げて、彼に問いかける。

流麗な少女だった。勝ち気そうな瞳は暗い書庫においても爛々と輝いており、翡翠の光を放っている。

黒の修道服に身を包んでいると言うのに、体のラインはハッキリとされていて、最早その体つきは少女と言うよりは女性のモノに近かった。非常に肉感的である。

また、リシスはアクセルの本性も、素性も知っている。だがしかし、それでも尚敬語を使う事は無かった。

それは彼女が修道院での彼の護衛を兼ねているという事情を差し引いても、彼と同年で尚かつ幼い頃より一緒に居た、という事が強く影響していた。

それに、アクセルの腹黒さを知っている彼女は、年頃の影響もあって彼を尊敬するつもりは毛頭無かった。

彼もリススの態度を改める事を数年前に諦めていて、大人しく現状に甘んじていた。

「いや、違う」

リススの問いに、彼は手紙を封筒にしまい込みつつ、否定した。手紙を読み終えたのだろう。

「ルフトヘイク公爵シュバック閣下からの近況報告だ。

陛下が危篤で、王太子であるクラウドが支持者集めに奔走し、王都は今やクラウド派で占められているそうだ。

陛下の遺言を今か今かと、待ちわびているらしい」

「遺言……」

「死ぬのを待っているのさ。

賢君と名高く、清廉潔白な人物を側に置きたがった陛下は、無能で愚鈍な貴族からは大いに疎まれていたからな」

ニヤリと不敵に微笑んで、アクセルは皮肉を言っただけだが、しかしすぐにそれは憎々しげな表情にかき消された。

「そんな貴族共は、同じ穴の貉である愚兄を望んでいる。愚かな話だ。

国が滅べば貴族など真つ先に没落する存在だと言うのに、栄華を誇る間は亡国の種しか撒かぬとは……」

心の底からそう思っているのだろう。リススにはそれが分かっていた。

彼は幼い頃から人一倍政治や歴史というモノを熱心に学んでいて、表向きは書庫にある冒険譚などを書写していたが、その裏では歴史書や回顧録などといった政治や歴史に関連した書を読みふけていた。

リススが必死の思いでアクセルを守る為の剣術を身につけている間に、彼は政治と歴史に関する知識を蓄えていった。

だからこそだろう。歴史書の中にある亡国の道が、今正に自らの前に切り開かれんとしている事に、御しがたい程の怒りを覚えているのは。

「で、どうする？　ここらで1つ、政争でも仕掛けてみる？」

王太子には自分が相応しい、って」

「フンッ、愚かな事だ。愚兄は社交界で味方を多く作っている。また、貴族共の多くは無能だ。

ヤツを慕う人間の中に私になびく者は居ないだろう」

「なら、次の代を狙う？」

「有り得ん。愚兄が1度国王となれば、王位継承の優先権はその息子に移る。

許し難い事だが、愚兄には婚約者が居る。結婚すれば、息子の1人や2人平気で生ませるだろう、許し難い」

許し難い、アクセルがわざわざ2度も口にしたその言葉を、リシスは小さく呟く。

それで気が付いた様に、掌を合わせた。

「ああ、モテないもんね。アクセル」

「モテないんじゃない！ 修道士が好色ではいけないだけだ！

クソッ！ こんな所に居なければ、このような筋肉質で無礼な女など……！」

すぐさまアクセルはリシスの言葉を否定したが、そのアクセルは言葉の途中で胸元を掴まれ、引き寄せられる。

「こんな所に居なきゃ、可愛らしい幼馴染みとこれだけ一緒に、近くに居られる事なんて無いもんねえ……？」

目は笑っていた。だが、口が笑っていない。

それが異様に恐ろしく感じられ、慌てた様にアクセルは視線をそらした。

で、小さく。

「す、すまない……」

と、謝りを入れてきたので、リシスは大人しくアクセルを解放した。それでよろしい、と上機嫌に言つてのけたが、今度は目が据わって口が笑っていたから、二重の恐怖を味わう事となった。

「そ、それよりだ、リシス。

お前の父上から、手紙は届いていないのか？」

なので急いでアクセルは話題を変えた。

そのアクセルの意図を察してか、ジト目でリシスはアクセルを見据えていたが、黙って自分の胸元から手紙を差し出した。

手紙の封は切られていて、既にリシスが目を通した形跡が有る。

差出人はオギュスト・グローク・キュレイン^{II}ノストラント、リシスの父親であり、ノストラントの侯爵を務めている男だ。

それを確認しつつ、アクセルはサツと手紙の内容を流し読んだ。

途端、顔が驚愕の色に染まる。

「馬鹿な!？」

隣国の、カールス公国がクラウドズの王位継承を支持しているだと

……!？」

「政争と戦争、どっちが良いかな？」

「あの国が、そんな馬鹿な……」。

現公王のバルトロメウ・エルトイーユは、父君に王位継承について戦争を仕掛けられた立場だぞ!？」

バルトロメウ自身も、戦傷で片腕を無くし更に隻眼となったと聞いた!

そんな男が何故、同盟国の様な口出しをしてくる……!？」

驚愕の余り、混乱しだしてきたアクセルの頭を、リシスは2度軽く叩いた。

何だ、とアクセルはリシスに向き直る。

「つまり、クラウド様がアクセルを牽制しているって事でしょ？」

自分の背後には、公国の後押しがあるんだ、って」

「ぐ、く……！」

実際その通りの事でしか無いだろう、と分かっていたが、いざリシスに指摘されて、アクセルは苦悶の表情に満ちた。

リクセニア王国はあまり大きな国家ではない。

南に同盟国であるジステイン王国があり、東に広大な領土と絶大な国力、軍事力を誇る神聖オルバドス帝国と隣っていて、西にカールス公国とアウステンⅡガリア半島に位置する国家だ。

カールス公国の敷地面積の2倍はあるが、リクセニアの領土の4分の1は豪雪地帯である。

山間部が多い為、鉄鋼資源が豊富だという事が国力に繋がっていたが、軍事力は大きく強くなく、弱小国である筈のカールス公国との間で10年前に勃発した、カールス継承戦争においては、引き分けに持ち込まれている。

「もしも王位継承でもめて、我が国が二分するとなれば、カールスは我が領土にすぐさま侵攻してくるだろう……。」

あの愚兄ならば、それすらも敵軍を討つ為の行軍と称して許可し、また戦後は条約でも締結して割譲する可能性もあり得る。

それでは幾ら陛下の遺言があろうとも、軍事力で押し切られてしま……う……！

同盟国のジステインは頼りになるまい……。

あの国は日和見主義だからな、王位継承を行った後に祝儀でも贈るつもりだろう」

冷静な打算をし、自らに万が一にも王位継承の機会が無い事を、アクセルは悟らざるを得なかった。

しかし、このままでは、と打算する。

少しでも多く、彼は見つけ出そうとしていた。

「別に、このまま修道士として暮らしても、良いと思うんだけどなあ……」

リススの、本心から来るところの呟きなど、まるで耳に入らない程に。

当然、そのリススが少し頬を赤らめていた事など、知る由も無かつただろう。

そんな風なアクセルを、リススは悩ましげに見つめる。

「アクセル様、リスス様？」

そこに、突然声が降ってきた。

驚き肩を震わせたアクセルは、すぐさま手に握りしめていた手紙をリススに突っ返しながら、その声の主を探る。

すると、本棚の陰から老齡のシスターが顔を出した。

すぐさま、アクセルとリススはホッと胸をなで下ろす。

「フレシア様、何か御用でしょうか」

頭まで法衣を纏ったその人物こそ、この修道院の長であるフレシアであった。

歳は60を既に超えており、隠す事の出来ない老いが顔に証として刻み込まれている。

しかし何とも優しげな雰囲気絶やさぬ、アクセルとは違う本当の

人格者である彼女は、アクセルすらも尊敬するシスターであった。

2人を見つけると、フレシアは軽く微笑む。

「少し、お話をしてもよろしいでしょうか？」

お二人とも、王都からの手紙はお読みになられましたね？」

「はい。」

話というのは、ここでもよろしいのでしょうか？ 上に行った方が……」

「ここでお願いします。他の人達に聞かれては困る話ですので」

柔らかく丁寧な物腰のフレシアはそう言うと、微笑んでいた顔を陰しくした。

その変化を察して、2人も表情を陰しくする。

「国王陛下、ウェンツェハラウト様からのお言葉です。」

アクセル様は、リス様を伴って、神聖オルバドス帝国の聖地クローツェンヘイムへ巡礼される様に、と」

しかし、フレシアからもたらされた言葉に、2人は驚愕の表情を浮かべた。

「お、お待ち下さい、フレシア様。」

聖地クローツェンヘイムは、聖地とは名ばかりの旧都……。

妖魔共が跋扈する廃墟と化し、最早巡礼する信徒も居ない程と聞きますが？」

「はい、そうです。」

クローツェンヘイムは、今から50年も昔の教皇猊下と皇帝の間における政争で、教皇猊下が敗れた事で神聖帝国の首都としては放棄された旧都です。

リシス様が仰る様に、悪しき者共が跋扈し蹂躪する土地です。

聖地という名は最早形骸化し、我が聖殿教会の信徒達も聖地ではなく、皇都の方へ巡礼する事が一般的となっています。

しかし、この聖地にはとある方が居られるのです」

「とある方……？」

アクセルが聞き返す。

上品な仕草でフレシアは頷き、答えた。

「我が聖殿教会の教皇、セスミレイユ1世猊下です」

瞬間、アクセルの表情が変わった。

何事かを考える様に、僅かに顔を俯けた後、リシスは見た。

これまで苦悶に歪んでいたアクセルの表情が、確かに笑みへと変わったのを。

「承知しました、フレシア様。明後日に修道院を発ち、聖地巡礼の旅に向かいます」

「それがよろしいでしょう。

リシス様、道中アクセル様の警護と、身の回りのお世話をよろしくお願いします」

「は、はい！ 分かりました！」

リシスは何が何だか分からぬまま、フレシアを見送った。
そしてアクセルに向き直るが、アクセルは不敵に微笑んで、ぶつぶ
つと呟く。

「そうか、教皇か。神聖帝国の教皇、成る程な……。」

流石は陛下、世俗や貴族には賢君だの仁君だのと言われているが、
やはりその才の本領は謀略において最もよく発揮される」

「修道士の旅路」

「我がリクセニア王国は聖殿教会を国教、即ち国が認める宗教としている。あまり熱心な宗教国ではないがな。

国民の90%が聖殿教会である我が国は、聖殿教会の総本山である神聖オルバドス帝国と古くは同盟関係にあった。

しかし、教皇が政争で皇帝に敗れ、諸侯が教皇よりも皇帝の意向を重視する様になった。これが46年前の事。

そして聖殿教会の意向で同盟していた我が国との同盟関係を解消した……。

これが今から20年ほど昔の事だ」

道すがら、アクセルはリシスに対して、父ウエンツェハラウトの言葉に込められた謀略を、説明していた。

結局教会に居る間はずっと人格者の仮面を被り続け、あれから2日して、早朝に修道院を出発するとようやくその道中で理由を話してくれたのである。

2人は僧衣の上からマントを羽織るといふ装いで、旅を行っている。幸い近くの村の村長から馬車を貸してもらつ事が出来て、平穩無事な旅となっていた。

この調子ならば神聖オルバドス帝国との国境まで、10日と掛かるまい。

更にクローツェンヘイムは国境にほど近い帝国の西北部にある為、国境を越えてからは3日程度だろう。

「つまり、今神聖オルバドス帝国じゃ、教皇陛下は権力から遠ざけられてる、っていう事？」

「その通り。だがそれも皇帝の威光が絶大な時に限る。

現在は皇帝のクセに議会を開いて、その結果で政治を取り仕切る様な愚かな皇帝が即位している。

お陰で議会に所属する貴族共は、皇帝の無能を嘆いて皇帝に代わる新たな存在を模索しているらしい」

「それが……」

「そう」

不敵に、アクセルの口端がつり上がる。

「聖殿教会の現在の教皇、セスミレイユ1世だ」

セスミレイユ、という名前を聞いて、リシスは思案する。

「でもセスミレイユって名前からして、女性だよね？」

「その通りだ。

だが聖殿教会とは元々聖女信仰が強く、教皇制度、即ち神聖帝国が成立する以前はむしろ、聖殿教会の精神的指導者とは聖女の事を指していた。

それに……」

不気味にアクセルの顔が狂気に染まった。

「女の方が、与しやすい。女は良くも悪くも感情的だッ。

無論感情的でない判断を下す事は少なくない、だがその人間のスタンスとも言うべき政治信条は、結局感情的だ！

故に至極読みやすいッ！ 制しやすい！ 御しやすい！！」

「うわー、悪役ー。女相手に利用価値しか求めてないとか、すつこい悪……」

「なんとでも言うが良い！ 私が王になる為には必要不可欠な謀略なのだ！」

誰も居ない田舎の旅路だからか、高らかに笑い声を上げるアクセル。ハ－ハツハツハツ、という高笑いが周囲にこだましたのだった。

余りに本性を隠しているから、教育を間違えたのだろうかとししすは思う。

そんなりしすの苦悩を知ってか知らずか、アクセルの高笑いは限りなく響いたのだった。

その2時間後後。

アクセルは地面に仰向けに倒れて、頭に大きなたんこぶを作っていた。

呆れてため息を吐きながら、りしすは剣を鞘の中へと納める。

「あのさー、アクセル？」

浮かれるのも良いんだけどさ、賊ぐらい1人で倒せる様になろうよ」

言いながら、りしすは鞘でアクセルの頭を突く。

それで気が付いたのか、頭をさすりながらアクセルは起きあがり、馬車の荷台に横たわった。

「それでも2人は倒したんだ……」

クソッ、神は私への剣術の才能を、お前の様な筋肉質女に……」

「なーにか言ったかしらぁ……？」

「何でもない」

鞘走らせながら笑う彼女の顔を見て、すぐさま口をつぐむ。

そして、賊に襲われ一旦停止した馬車を再び目的地へと走らせる。

後ろで完全にノックダウンしているアクセルを見て、再びリシスはため息を吐いた。

「大体才能ってさ。アクセルが努力してないだけじゃん。

あたしはアクセルが本読んでる時に剣振ってたけど、アクセルは殆ど教えてもらう時だけだったじゃない」

「……」

「勉強と一緒によ。

何の事前勉強も無しで、急に哲学書を読んだって分からないし、急に近代史を習ったって分からない。

ちゃんと事前に練習とか復習とかして、それからようやく分かるんだから。

アクセルは才能とかどうとか言う以前の問題じゃない？」

「フンッ……」

何とも無愛想に、アクセルは鼻で笑った。

「戦いは時の運だ。目に見えて成長するモノでもない。そんな不確定の結果しか出せないモノに、限られた時間を割くのは非効率的だ、不合理だ」

「命に関わる事よ？ それに、精神だつて鍛えられる」

「精神？ 笑いぐさだな。精神とは理性ではない、本能により近い場所のモノだ。」

そんなモノに頼ったところで、結局は鉛筆を転がして答えを書くのと同じ事。

運任せ、ギャンブル、確証無き答え、理屈の省略に過ぎない」

最低に卑屈な奴。

アクセルの言葉に、リシスは小さくそう呟いた。

もう少し楽に構えてたら、実の兄を愚兄と呼んだりせず、こんな風に旅をする必要も無く、修道院で平和に暮らせただろうに。

それを何故良しとしないのだろうか、とリシスは常々疑問に思っていた。

強く王位に固執する理由を尋ねたところで、絶対に教えないと言われていたから、敢えて聞くまでもなかったが。

「あと私の命は私だけのモノではない。臣下のモノであり、国のモノだ。」

私個人で守る必要は無いし、私は実力的にも忠誠心からもお前を絶対的に信頼している。

リシスが生きている限り、私が死ぬ事は無い」

人が助ける事を絶対的に確信している、という事だ。それを聞いたリシスは、カチンと来た様で、乾いた笑い声を上げた。

「はっはー、それなら今度寝首でもかいちゃおうか？」

「好きにしろ、それがお前の望む事なら」

乾いた笑い声に、冷たい声で返された。

更にアクセルが荷台に寝転がる。好きにしろ、という言葉通りの態度である。

そんなアクセルに、リシスは苦笑を浮かべ、馬車を走らせるのだった。

「雪の園と山間の町」

クローツェンヘイムは、年中雪が降る不思議な場所であつた。

その景観は首都であつた頃には、西方大陸で最も美しい景観の都市として評価され、巡礼客も観光客も他国の大使等も、この街に幾度と無く足を運んだ。

春も冬も夏も秋も、シンシンと静かに雪は降り続ける。しかし静かに降り続ける為、一定以上の積雪はしない。

ただの1度として吹雪く事は無く、それは聖殿の奇跡と言われていた。

その街は、今や廃墟でしかない。

かつて王城として栄えた城は風化し、妖魔共が力任せに暴れた被害で大部分が崩壊してしまっている。

絶える事無く各国の政府要人達が泊まりにきて、時には住み着いてしまった外人館も、最早屋根は抜け落ち壁は崩れ、クッションの利いていたソファーはバネがあちこちから飛び出していて、格式高いタンスなどは見るも無惨な木片と化していた。

宿屋は2階の床が突き抜け、商店には腐臭が立ちこめ、酒場は床を埋め尽くす程の木材が散乱し、住宅の数々は最早瓦礫の山だった。

中には道をふさぐ巨大な瓦礫も有る。

その瓦礫の前には、流麗な姿の1人の女性が佇んでいる。

銀髪、青の瞳、純白のマント、白銀の鎧を身に纏っている。

銀髪は長くストレートで、風に揺られてサラサラと髪が流れると、その光景はシンシンと降り続く雪すらも霞んでしまう程である。

彼女は、右手を軽くひねる。

右手には、長大な槍が握られていた。

スピアとランス、両方の特徴を兼ね備えた、全長3 mを超える長槍だ。

「出てこい」

そして、まるで氷をすりあわせたかの様な凜とした声を、上げた。するとだ。

目の前の瓦礫の向こうから、巨大な蛇が、姿を現した。

真っ直ぐ、天空へと体を伸ばし、その高さは4 mにも達する。まともに伸びたら、単なる蛇ですら最大で5 mを超える、が。

その蛇には異常なまでの太さであった。

両手で掴めるとか、そういう話ではない。大人が2人並んだ程の太さを持つて、重力に逆らいながらも真っ直ぐとその蛇は体を伸ばす事が出来る程の筋力を得ていた。

蛇は自らが伸ばせる体の最大限に達すると、その体を今度は地面へと突き出す。

女性に、頭が迫った。鈍重なスピードである為に、避けるのは簡単だった。一足、二足と後ろに飛び退くだけで、蛇の体当たりは軽く回避する。

蛇の頭が地面にぶつかり、石畳で覆われた地面は、見事に砕け散る。破片が、避けた女性の元まで飛び散った。

鈍重ではあるが、その巨体によって凄まじいまでの威力を発揮していた。まともに体で受ければ、女性が纏う白銀の鎧すらも簡単に押しつぶしてしまうだろう。

瓦礫を乗り越えて、蛇は体をうねらせ、女性に迫る。

「とろい」

僅かに見下した様に言っただけ、女性は地を蹴った。
一足飛びで幅4mはあろうかという通りを、左右に行き来する。
蛇は目では追っていたが、しかし体は目ほど素早くは動けないらしく、ずるずると僅かにうねるだけであつた。

「ハアッ！」

その隙を女性は見逃さない。

右に跳んだと見せかけ、上空へと舞つたのである。

蛇の目は一瞬右へと向き、体も右へと動いて、目のみがその後すぐに上を向こうとしたが、体はまるで言う事を聞かなかつた。

しかし、その目すらも女性の姿を捉えてはいなかつた。

女性が居るのは、蛇の頭の真上。

目の位置からそこは蛇にとって、完全なる死角だったのである。

故に蛇には分からなかつた。女性が、槍を突き立てようとしていた事には。

ザスッ

まるでそれは、包丁が野菜を切り落とすかの様な音であつた。

女性にとつてこの蛇は、まな板の野菜でしかなかつた。死肉ですら、もつと高級で上等だろう。

狩猟ではない、単なる殺戮、調理。それが女性と蛇との、歴然たる実力差であつた。

頭と下あごを貫かれた蛇は、ギシャア、と叫び声を僅かに上げた。が、だ。驚いた事に、頭がまるで燃え尽きたかの様に、灰となって散り散りに四散してしまつたのである。

体のみが残され、しばらくは筋肉の収縮によって頭が無いクセに体をうねらせていたが、すぐにその体も灰となって消え失せた。

「妖魔如きが、この聖槍に挑んで勝てると思うな」

女性は、空に舞い上がっていく灰となった蛇の亡骸を見やりながら、吐き捨てる様に呟いた。

だが、と思いとどまる。

「いや、妖魔如きがこの聖都に足を踏み入れた時点で、自らの領分を計り損ねていたか」

この街に妖魔の様な、汚らしい存在は似合わない、ただそれだけの事だろう。

女性はそう割り切ると、外人館が多く建ち並ぶ通りを抜け、自らの住まう場所へと戻る。

多くが廃墟と化したクローツェンヘイムで、ただ1つ崩壊を免れたその場所。

聖殿教会の総本山、サン＝エルクトベル大聖堂であった。

見上げると、最早天を突くのではないか、と思ってしまう程に高い場所に、聖殿教会の象徴である底辺と側面とが同一の長さをした五角形に、十字を刻んだエルザイムと呼ばれる紋章が輝いていた。

皮肉な事に、神聖オルバドス帝国の国旗はそのエルザイムを上下逆にひっくり返してそれを盾として扱い、更に剣と槍とを交差させたモノである。

神聖帝国国旗は元々エルザイムに則っていたのだが、今から2代前の皇帝が現在の国旗に変えたのだ。

信徒から酷く^{ひんしゅく}顰蹙を買って、その後は宗教戦争や大虐殺、肅清が数

多く行われた事も、記憶に新しい。

女性も、そんな流れの中でこのクローツェンヘイムへと流された、1人だった。

「神の大愛に背く人間に、愛の尊さを」

エルザイムによって否応もなく思い出させる記憶を退ける為に、彼女は祈った。

祈りを終えて、大聖殿の扉をゆっくりと叩いた。

すると、高さ3mはあるつかという巨大な扉が開かれる。

「お帰りなさいませ、ヘーリア様」

「ああ、変わらないか」

その扉を開けたであろう男達は4人、いずれも女性と同じ純白のマントを纏い、鎧は黒いモノを纏っていた。

その内の1人と女性、ヘーリアは言葉を交わす。

「はい、異常ありません。

ヘーリア様があのサーペントを退治しましたので、配下らしき蛇共が騒いだ様ですが。」

「いやしかし蛇酒が作れると皆喜んで捕まえてましたよ」

「アスターの奴はステーキにするんだつつつて、特に大きな奴を捕まえてましたね。」

「ついさっき、首を切り落としたのに動くー、って騒ぎながらあちこち走り回ってましたよ」

「そうか」

フツ、とヘーリアが淑やかに笑うと、男達は皆呆けた様にその笑顔に見入った。

秀麗なヘーリアは、笑うだけで男達を惹き付けた。

ヘーリアは呆けたままの男達に別れを告げると、次は聖堂へと向かった。

そこに行き着くまでに、何人かのシスター達と挨拶を交わす。さっきの男達も、そのシスター達も、クローツェンヘイムに現住する数少ない人間達だった。

最早人はこの大聖堂を除いて他に住んでいないが、しかしこの大聖堂だけはこれまで、教皇が政争で敗れてからもずっと人が絶える事は無く、また昔からの姿を保ったままであった。

偏にそれは、ヘーリアが現在率は率いていて、先程の男達が所属している、御殿騎士団の存在のお陰だろう。

元々は聖女を守護する存在だった自警団が、後に神聖なる聖殿を守護する様になり騎士団となった。

屈強で知られる帝国兵にすら、大聖堂の中への侵入を許さなかった精強な騎士達だ。

クローツェンヘイムが廃墟となり、放棄され、妖魔の巢窟と化しても尚、大聖堂を守り抜き30年以上戦い続けている。

ヘーリアはその御殿騎士団の、第13代騎士団長であり、初の女性団長でもあった。

聖堂へと、ヘーリアが足を踏み入れる。

法衣姿の神父達があちこちで料理に奮闘し、口と腹とを心地良く刺激する良い匂いが立ちこめていた。

神聖なる聖堂ではあったが、しかし人が命を食し自らの命を長らえ

る食事は聖殿教会の教義で神聖なモノとされている為、料理もまた神聖なモノであるとして、セスミレイユの指示で聖堂でも料理を行う様になった。

お陰で、聖堂では神父からシスターから騎士まで、食事時には一同に会する事が出来た。

「ヘーリア！」

その聖堂で、真っ先にヘーリアを見つけた少女が、声を上げた。鈴が鳴ったかの様なその声を聞いて、料理に勤しむ神父達が顔を上げる。

同時、ヘーリアに少女が抱きついた。

2つのお下げをした、澄み渡った青色の髪の少女だった。顔立ちは随分とあどけなく、10歳を過ぎたばかりだろう。

瞳は金色で大きい。肩を出した軽装をしており、何とも可愛い少女であった。

ヘーリアは屈んで、その少女と同じ位置に顔を持ってくると、再び少女を抱き締めた。

「大丈夫だった、ヘーリア？」

「はい、猊下」

ヘーリアが自らの身命を賭して仕える存在。

少女、第15代聖殿教会教皇、セスミレイユ1世を。

同じ頃、アクセルとリシスの2人は国境の街、ヴァーントに到着し

ていた。

ここから谷間を越えて、山を下りれば後は平原ばかりが続き、その果てにクローツェンヘイムがある。

そんな場所ながら、アクセルは頭を抱えていた。

「谷が、まさか落石で通れないとはな……」

到着する間際にアクセル達を襲った地震が、その原因であった。

全力で復旧作業に当たっているそうだが、通れる様になるまでは凡そ3日掛かるという。

限られた路銀しか持ってきていない為、3日もの間このヴァーントで足止めを食うのは、自殺行為に等しかった。

何せ、山間部の岩肌に無理矢理築いた村が、神聖帝国との国境という事で街に発展した様な場所だ。

宿屋は何処も高いし、リンカーフィールドでなら鶏が1羽買う事が出来る値段で、1人分の料理にありつけるといった有様であった。

モノが集まる所ではよりモノを売る為に、値段をつり下げるが、この様な辺境だと足を運ぶ人間が精々商人しか居ないので、観光客を狙って商人共が高めの値段でふっかけているのである。

しかも、そんな商人共を頼りにしなければ食糧を得る事も出来ず、政府は政府で鉱山の方に資金を割いている為、ハイパーインフレが起きていた。

「どーするアクセル？ 迂回する？」

教会の近くに荷馬車を止めて、リシスが荷台に座り、アクセルが運転席に腰掛けて、2人は話し合っていた。

この教会も、巡礼者という事を強調して、ようやく荷馬車を止める場所を貸してもらったただけだ。

衣食住は保証されていない。

「迂回したら日数は倍以上掛かるんだぞ、その方が路銀がかかる」

「じゃあ、どうやって3日暮らすの？ 保存食も無いし、食糧を調達しなきゃいけないし」

「ちょっと待て、今考えてるんだ」

空になった食糧袋、水筒を指してリシスは言うが、アクセルとてこの危機的状況をひっくり返す程の金策は思案中であった。

「荷馬車を売ったところで、はした金だ。

いや、むしろ商人共から排斥されたり買いたたかれるのが落ちだろう。

となれば、3日間の経費を限りなくゼロにし、尚かつ金を稼ぐ方向じゃないといけないか……」

「3食住み込みで給料付き？ 何処の貴族様に頼み込むの？

あんたが、頭下げて？」

「出来るか！ この時期に！」

リシスも馬鹿ではないから、アクセルが王子であるとは言及しなかった。

しかしそれでも、分かる人間には分かってしまう。もしも貴族の邸にでも駆け込めば、その特徴的な容姿からすぐさまアクセルである事が露呈するだろう。

となると、権力の濫用は除外だ。

「金貸屋行く?」

「で、き、る、かッ!! 修道士が金貸屋に行けば、即座に通報されるんだぞ!

同じ理由で賭場も却下だ!」

「じゃーどーすんのさー……」

リススが聞いても、アクセルは唸るだけだ。

これはどうしよもない。そう思い、リススが荷台に寝転がったが…。

ふと、上に影が差した。

何だと思いリススは見上げる。

「資金繰りにお困りの様ですわね!」

同時に声が降ってくる。

そこに立っていたのは、茶色の髪を持ちメガネを掛けた、メイド女であつた。

アクセルは首を傾げ、リススは起きあがりメイド女に向き直る。

「そこでモノは相談です、お力をお貸し頂ければ、この先の落石をすぐさまどかせる事が出来ます!

道中、クローツェンヘイムまでの食糧や路銀もこちらで負担しましょう!」

「へ……?」

リスも首を傾げたが、アクセルはとうの昔にメイド女から視線を外して、後ろに居る老紳士を見やっていた。

「貴方のお連れさんですか？」

声を掛けると、老紳士はアクセル達に歩み寄った。

灰色のコートに身を包み、マフラーを首に巻いて目深の帽子を被っている。

髪は赤かった様だが白の方が多くなっており、蓄えて整えた口髭などは既に真っ白。

しかし髪に残る赤は、未だ濁る事を知らない燃える様な赤だ。

厳格な貴族の風格を備えた、老紳士だった。

老紳士は1回、帽子を取って恭しく頭を下げた。オールバックに撫でつけた髪が少し揺れる。

「お休みのところ、失礼をお許し下さい」

「いえ、何かお困りの様子とお見受けします。私共に御用が有るのでしたら、出来得る限り協力致しましょう」

アクセルはすぐさま表の顔を貼り付ける。

久々の表の顔を見て、背筋に寒気を感じるリスだったが、しかしどうにか抑えつけて黙り込む。

交渉事を全てアクセルに任せる為だ。

「私はロードと申します。この娘、私の従者をしておりまして名はレアンヌと申します。

我々は神聖帝国の北の、クリングスから参りました大使なのです」

「ほう、北のクリングスの……」

思い、アクセルは地理を思い浮かべる。

神聖オルバドス帝国の東端、その北にクリングス大公国はある。
このヴァーントや、年中雪の降るクローツェンヘームすらも及ばない、極寒の土地だと聞く。

夏は比較的過ごしやすい気候の様だが、毎年冬になると豪雪地帯となって、豊富な鉄鋼資源で国と軍を支えている軍事国家だと、アクセルは記憶していた。

ならば、とアクセルはロードに目を光らせる。

「クリングスの大使の方が、我がリクセニアに何の御用ですか？
軍事同盟でも？」

「いやいや、軍事同盟などの用事ではありませんね。

それに用事があったのはアウステンⅡガリアの方でして、通商条約の方を。尤も、断られてしまいました。

リクセニアへは既に通商条約を締結しておりますから、陛下へのご挨拶にうかがいました。

拝見した際には、口数も少なく、よもやと思いましたが、直後危篤でお倒れになられるとは……。

いやはや、一日も早く快癒する事を願います」

「ええ、一国民である私共も同じ気持ちです」

ふむ、とアクセルは内心で納得する。

「クリングスは北方の地なので、自給率が低い。ですから食糧供給は生命線なのですが、今は神聖帝国と外交が途絶えておりましてな……。

アウステン＝ガリアに活路を見出しましたが、しかし失敗しました。

ならば旧都クローツェンヘイムに居られるという教皇猊下にお頼みして、食糧物資の取引だけでもお許し願えればと思い、クローツェンヘイムへ向かう所なのですよ」

「はあ、成る程」

「それで、この教会の方にお力添えを願ったのですが、断られてしまいました。聞けばクローツェンヘイムへの巡礼の方が居られるとの事。

お会いしてみれば、成る程魔力も膨大そうだ。1つお力添え願いたい」

「……、魔力？」

不審な言葉にリシスは声を上げるが、ロードはニヤリと自信を感じさせる笑みを浮かべるだけだ。

「何、知らなくとも結構。

ただ協力して下されば、クローツェンヘイムまでの道程を一緒にするだけです」

随分な言いぐさであった。

だからあらゆる可能性を、アクセルは打算する。

例えば、国境を封鎖している腹いせに教皇を誘拐し、連れ帰って神

聖帝国を脅迫する、だとか。

有り得ない話ではないだろうが、しかし現状は神聖帝国側も、緊張状態を十分理解している筈だ。

内情までは知らないが、もしも教皇を誘拐して奇襲したとしても特定以上の戦果を挙げる事は、どだい無理な話だろう。

となれば、内部破壊工作か。

それが最も可能性が高い、言うなればアクセルとリシスの旅の目的と、同じ事なのだから。

だとすればこちらも願ったりの増援、こちらの目的がバレていようがバレていなかろうが、上手く利用出来る。

残るは、暗殺か。

クリングスは浄火教と呼ばれる宗教を頂いている国だと聞く。

国家元首である大公の代によって厳しさは違うし、現大公アナターシャは比較的寛大である事は有名な話であるが、かと言ってそれが外交的立場か政治信条かは分からない。

もしも前者ならば、周辺国を騙す為の演技という事は十分に考えられる。

尤も、変わらず戦争になるし、そうなればむしろ聖殿教会を頂く全ての国を敵に回す事になるから、やはり政治的に考えて有り得ない。

最悪は自分達を捕らえようとするクラウド派の貴族だが、それならむしろこうやって近づく前に、秘密裏に仕留めている、か。

「良いでしょう、ご協力致します」

とりあえず不利な状態に陥る事が無いのならば、断る意味は無かった。

頷き、了承する。

しかし、ただで了承するアクセルではない。

「しかし条件が1つ……。その魔力とやらの話、詳細をお教え下さい。」

私も委細承知出来ない事を、ご協力する訳にはいきませんので」

「ふむ、そうですか……」

ロードは困った様に顔をしかめた。

チラリとレアンヌを見やったが、すぐに視線を戻して、静かに頷く。

「仕方ありませんな。」

正直な所を言いますと、母国に伝わる秘術なので、余り他国の方に詳細をお教えるのは躊躇われるのですが……。

しかし修道士様でしたら、そう容易くご他言する事はございますまい。信じますぞ」

ギリリ、とロードの眼光が鋭く光った。

思わずリシスは背筋を震え上がらせたが、アクセルは一瞬不敵に笑った後、微笑みを浮かべた。

「神の奇跡に誓いましょう」

「清浄なる火の教え」

「ご協力願いたい事とは、私共が国教として戴いております、浄火教についての秘術です」

老紳士、ロードが取っているという宿屋に、アクセルとリシスは世話になっていた。

とは言え、流石に宿泊まで世話になる訳にはいかない為、部屋まで取ってもらってはいなかった。

リシスはレアンヌと一緒に2人の後ろで、事の成り行きを見守っている。

「クリングスの浄火教、ですか。

確か我々聖殿教会の様なスピリチュアリティ（聖霊信仰）の教えとは異なると聞いています。

エレメンタル（精霊信仰）の傾向が強い、だとか」

「流石にお詳しいですな。その通りです」

浄火教……。

聖殿教会よりもその歴史は古く、過去には度々神聖帝国との諍いの理由となっていた。

尤も、教皇自身は毎度毎度反対して、皇帝が勝手に動き出す、という様な事が多かったが。

浄火教は呼んで名の如く、全てを洗い流す炎を崇める宗教だった。その本質は、万物には必ず炎が宿っており、その炎を通す事で様々なモノと心通わす事が出来る、というモノである。

八百万の神と言っても良いだろう。何せ、炎の神は勿論の事ながら、水にも炎の神が居て、氷にも炎の神が存在するというのだから、科学的な話ではない。

またそもそもとしてそれらは人間ではなく、あくまで自然なので、人を信仰する聖殿教会とも決定的に教義が違っていた。

だからと言って、それ程敬虔な信徒でもないアクセルは、浄火教を貶めるつもりは毛頭無かった。

「聖殿教会で言うところの、奇跡でしょう。」

我々はその奇跡を、れんかじゅつ廉火術と呼称しております」

「れんかじゅつ……」

「そして、その廉火術を使用するにあたり必要な力が、魔力なのです」

言つて、ロードは掌を差し出した。

何だと思ひ怪訝に顔を歪めたが、次の瞬間、アクセルは目を見開いた。

「な……」

ロードの掌に、炎が宿ったのである。

メラメラと燃え盛り、またロードが一枚の紙をその炎の中へ放り込むと、瞬く間に灰と化してしまった。

本物の、炎なのである。

グッ、とロードが拳を握りしめると、炎は消えてしまった。

ロードの手は焼けこげた様子も無い。

「これが廉火術ですな。私共の国では、この廉火術を用いて製鉄や鍛錬を行います。

時には軍事にも用いられておりまして、度々神聖帝国の侵攻を防いでおります」

「浄火教の信徒は、全員がそれを……？」

「そうですな。

軍事に役立つ程となると、流石に少数となり、国内でも10人とおらせぬが」

かんらんらと、ロードは笑う。

対して、アクセルは胸がすくむ思いだった。

「私もかつては大きな炎を使う事が出来たモノですが、流石に押し寄せる年波には勝てませぬ。

あの落石を退けるには、より大きな魔力を秘めたる御仁が必要……。

見ての通り、魔力の大小は赤髪の強さに比例しましてな」

言つて、ロードは自らの頭を指さした。

確かに若い頃には、強烈な赤髪だっただろう。

肌から見て50代も終わりに近付いている年頃だろうが、それでも尚赤が残っているぐらいなのだから。

「私の赤髪も、また魔力が強い証、という事ですか」

「如何にも、ですからご協力をお願いしたいのです。

何、難しい事は有りません。お力をお貸し頂くだけで、委細の技

術においては私が全て行います」

しばし、アクセルは考えた。

随分得体の知れない技術なのだから、与するリスクは計り知れない。しかも異教徒の秘術だ。何をしてくるか、それも分からないが……。

これは賭けだ。

もしもロードが信用できない人間ならば、ここでアクセルの命運は果てる。

信用できる人間ならば、ほぼ道程は確実と言えるだろう。

極端な賭けだが、王位を狙うのであれば、この手の賭けは常となるだろう。

いちいち逡巡する程ではない。直感に頼るべきだった。

直感が語るのは、ロードはただ者ではない、という事だった。

落ち着いた物腰から感じる確かな気迫。傑物と言っても過言ではない。

もしも裏切られたとして、アクセルがこの人物から逃げる術はあるのか。

否である。リンスしか頼る事のできる戦力がいないのに、この傑物の老人から逃げる事はできない。

ならば、答えは決まっていた。

「込み入った話をお聞かせして頂いた事を、感謝します。

協力します、ロード殿」

アクセルが右手を差し出し、握手を求めた。

ロードは満足げに頷いて、アクセルの手を取る。

「我々はこれで、クロイツェンヘイムまで一蓮托生ですな。
では急ぎましょう。行動は迅速にすべきです」

手を離すと、ロードは立ち上がって旅支度を調えた。
ものの数分の事である。そもそも長居するつもりは無かったのだろ
う。

宿屋をチェックアウトし、問題の山道へと向かった。

鬱蒼と生い茂る木々が並ぶ、崖の合間に通る山道。

その道は程良い広さで、馬車が通る事ができるギリギリの広さだっ
た。

しかし、道は途中で遮られている。高さ3mはあろうかという巨大
な石によって。

復旧作業に尽力している筈の人間は誰もいない。どうやらブラフだ
った様だ。

「地盤は固そうですね」

ロードが周囲を見やりながら言った。

植物の根は編み目という繋ぎになるから、植物の多い場所は比較的
地盤が固い。

雨等で土質が変化しない限り、相当な強靱さを誇るだろう。

「植物の根が張ってますし、新たに落石しそうな気配はありません
ね。」

多分この岩も、元々上にあっただのが転がっただけなんでしょう」

「そうですね。」

では、早速作業に入りましょう。

修道士様、前に岩石の前にお立ち下さい」

「わかりました」

言われるがままに、アクセルは岩の前に立った。

リスとレアン又は周囲を警戒している。落石に乗じた山賊、或いは妖魔の類が出ないか、見張っているのだ。

「両掌を岩に付けて下さい」

促されて、アクセルは掌を当てる。

ヒタリ、と冷たい感覚が手を伝った。

空気よりも更に冷たく、ずっと触っていたら手がかじかみそうだった。

「失礼。肩と背中に手を置いても良いですか？

それで岩を砕く作業に入ります」

「はい。お願いします」

肩と背中にロードの手が触れる。

少しくすぐつたい。だがその力強さに、確かな威圧感も感じ取る事ができた。

「ハアアアアアッ……」

ロードが気合を入れた声を上げる。

同時。アクセルの手にジリジリとした感覚が伝った。

一瞬焼けているのかと思った。しかし痛みは無い。

代わりにあるのは、炎の様な赤い光。腕を覆っていて、それがこの

ジリジリとした感覚を生んでいる様だった。

「行きますぞ、修道士様。

多少衝撃が来ることと思いますが、ご心配めされるな」

言われ、アクセルが覚悟を決める。

すると腕を纏っていた光が炸裂したかの様にうねり、螺旋を描いて、周囲に飛び散る。

だが飛び散るのは裏腹に、光は強大さを増していった。膨らみ、肥大していく。

空気が一瞬、無になった。

音も無く圧も無い。何も感じられない状態。

その次の瞬間、光の膨らみは集束した。

岩に吸い込まれたのか。思った時。

ガゴオオンッ！！

岩が、爆散した。

驚きアクセルは飛び退く。入れ替わる様にして、リシスが前に出てきた。

だが破片はこちらに飛んでくる事が無く、リシスが傷付く事も無かった。

砂煙が辺りを包み込む。しかしこれは、パチンツ、とロードが指を弾くと、霧散した。

「やれやれ、どうやら上手くいった様ですな」

ポンポン、とコートに付いた砂埃を払いながら、ロードが言う。

砂煙が晴れると、そこにあつた筈の大岩が多少の欠片を残し、碎け散っていた。

内部から爆発したかの様な飛び散り方で、土台の石が残り、辺りに破片が散乱している。

人が歩ける程度にはなっている。それをレアンヌが荷馬車が通れる様に整備し、数十分後にはヴァーントを通過したのだった。

「旧都クローツェンヘイム」

ヴァーントを抜け、平原に着いた。
この頃になると、アクセルはロードの正体について考え耽る様になった。

恐らく、ロードというのは偽名だろう。

であるから、アクセルもリシスもファーストネームではなく、洗礼名のウインツとエレアを名乗っていた。

ロードは大して気に掛けた風も無い。恐らく、洗礼名という認識が無いのだと思う。

ただ、偽名だとは薄々感じている様だった。

それと、ロードは軍人ではないか、と思い始めていた。

軽快な貴族を装っている様だが、言葉の端々で、時々軍人がよく使う喋り口になるのだ。

態度はキビキビとしているし、貴族のクセをして、野宿が続く旅路を平気そうな顔でこなしているのが何よりの証拠だった。

しかしそうになると、相当の地位にある軍人という事になる。

外交特使になり得るだけの地位となれば、それこそ一国の軍要人クラスだろう。

勿論、外交の話はブラフという可能性もある。

だが自らと従者だけという少人数で、クローツェンヘイムまで向かい教皇にお目通りすると言うのなら、やはり相当な地位の人間なのだろう。

少なくとも任務の重要度からして、一士官が隠密で、とは思えなかった。

異教徒の軍人がただ国益の為に一宗教の長と政治的交渉をする、なんて事が果たして上手く行くのか、という事だ。

「明日には、クローツェン Heim に到着しますな」

暗くなってきたので、キャンプをする事になった。

空が雲に覆われ始めている。年中雪が降り続けるクローツェン Heim が近付いた証拠だった。

まだこの辺りは雪が降っていない。クローツェン Heim も吹雪いている訳ではないのだから、当然と言えば当然か。

しかし、アツサリと日程が消化されていた。

レアンヌが想像以上の手練れなのだ。弓の使い手で、リシス程の派手さはないが、大抵の妖魔はリシスの間合いに入る前に彼女に射抜かれていた。

狩猟や趣味、或いは護衛程度の腕前ではない。敵を倒す為に仕込まれた戦術、としかアクセルには思えなかった。

ときはきと野宿の準備をする様を見ても、貴族の従者の様な中途半端な少女には見えない。

「クローツェン Heim は今、妖魔が徘徊する魔都と化していると聞きます。」

到着したとしても、気は抜けません」

「そうですね。」

しかし教皇猊下にはまだ、身辺をお守りする御殿騎士団がおります。

精強無比と聞く御殿騎士団にかかれば、妖魔など敵ではありませんまい」

「その御殿騎士団が、敵に回らなければ良いのですけれど」

レアンヌが不安そうに呟いた。

確かに、それは今アクセルも思っている事だった。

ロードはアクセル達が教徒として巡礼するのだから、とレアンヌを諭したが、アクセルはその教皇を自らの政争に利用しようとしている身なのだ。

下手をすれば、御殿騎士団に見抜かれて、その場で斬り捨てられるかも知れない。

危機感をアクセルは常に持っていた。故に、今は教皇と謁見した際に失礼の無い様、しかしどうやって利用するかを考えているところである。

そうして、度々眠れない夜を迎えて、馬車の上で死に体となっている事も少なくなかった。

その日は運良く、ゆっくりと眠る事ができた。

何度か妖魔の襲撃があったらしく、周囲には土を掘り返した跡ができていた。

見張りは、リリスとレアンヌが交代して行っていた。

軍人らしいロードであるが、どうやら戦力としては扱われていないらしい。

体面かどうかは、判断がつきづらかった。

夜明けから3時間。昼前に、アクセル達はクロイツェンヘイムへ到着した。

到着したとは言っても、本当に廃墟だ。かつて街全体を覆っていた筈の城壁は、既に機能を果たしていない。

地形が、草原から廃墟に変わったただけだった。

「とにかく、声を出しましょう。

御殿騎士団の方々が巡回しているかも知れませんが、その方々に敵だと思われたくありません」

「うむ、良いでしょう」

アクセルの提案をロードも了承し、それぞれが一定時間毎に交代交代で声を出す事になった。

だが、それは同時に妖魔を呼び寄せる危険性も孕んでいた。

周囲から、いつしか凍てつく殺気が張りつめる様になっていたのだ。

最後にアクセルが声を上げていたが、度々声が震えたのを自覚していた。

「中々、手を出して来ませんね」

剣に手を掛けながら、リススがレアンヌに意見を仰いだ。

どうやら2人の間には、既に信頼関係が生まれているらしい。

「機会をうかがっているのだと思います。

ここは妖魔の庭なんですから、より襲いやすい場所で襲ってくるでしょう」

初対面のインパクトは凄まじかったが、慣れるとレアンヌは普通に喋る様になっていた。

どうも、あの態度も貴族の従者を装った演技らしい。だとしたら酷い演技だ。

「否。それは違うな」

レアンヌの推察はロードによって否定される。

殺気に触発され、ロードはギラついた目つきを周囲へ走らせていた。その確かな威圧感が妖魔を退けている、と言われても半ば信じる程に。

「妖魔はここまで群れない。」

何故なら、群れる様な対象があるなら、駆けつけた者から襲いかかってくるからだ。

それをしないという事は、できないのだろう。」

口調もいつになく固く、厳しい。

そしてその推察は、レアンヌのソレよりも幾分鋭い。

「何故、できないのですか？」

「それはわからんが」

しかし、そのロードとて全てがわかる訳ではない様だ。

代わりにアクセルが、リシスに声出しを代わって、質問に答える。

「妖魔の頭領が部下を制していると思えませんね。」

いや、それならば頭領がすぐさま来る筈です。

既に囲まれて10分は経っている。時間が掛かり過ぎてます」

「頭領もいないのに、統率を保ってる？」

そんな事があるんですか？」

「あるにはある。頭領が倒れた時ですよ。」

頭領がいなくなった後、数日は妖魔の行動が制限されます。いなくなつた事に、妖魔が混乱しますからね」

ただ、妖魔の頭領ともなれば非常に強力だ。
それこそ軍隊が動いて、討伐するくらいである。
御殿騎士団はそんな妖魔の頭領を相手にできる程ならば、これは恐
るべき戦力だった。

アクセルは生唾を飲み込み、1度立ち止まった。
ロードに意見を仰ぐ為だった。

「私は資料で、多少この街の地理について知識があります。
今、我々は丁度、中央区に来てます。昔は1番栄えた場所でした」

「では王城は何処に？」

「王城、オルバドス風に言い直せば、皇城ですが。
皇城は中央区にほど近い行政区、北にそびえていた筈です」

2人が北を見やった。
しかし、城という城は見えない。壁や堀すらもだ。
既に倒壊していると考えた方が良さだろう。

「他には、東の大通りにサン＝エルクトベル大聖堂があります。
ここからだ、10分程歩く事になりますか」

「そちらへ向かいましょう」

そうして、一行が東へ足を向けたと同時だった。

ガチャンッ

東の通りから、甲冑を纏った軍勢が現れたのである。

先頭に立つのは、白銀の鎧を纏った流麗な騎士。女か男かの区別が付かない程だった。

白銀の騎士の後ろには、十数人の騎士が続いている。鉄板をつなぎ合わせ、それ自体が盾となる様な重厚な鎧である。

剣、槍、斧、武装はそれぞれ異なる様だった。

彼等が現れると、通りに金属音が響き渡る。

だが。その軍勢が現れると同時に、殺気走っていた妖魔達が臨界点を迎えた。

廃墟から数十の妖魔が飛び出し、一行と軍勢に襲いかかってきた。

慌てて、アクセルとリシスは剣を構えた。その時にはレアン又は既に弓を構えていて、ロードは拳に炎を宿していた。

乱戦に陥る。

リシスが奮闘していた。襲いかかってくる敵を切り伏せ、その後ろから飛び出てくる敵を、蹴り飛ばす。

倒せなかった敵をアクセルが切り伏せる。そんな戦いだった。

レアンも弓という武器ながら、3人に守られる形の中で良い支援をしていた。

驚いたのは、ロードの強さである。

ロードが炎を宿した拳で敵を殴る。すると敵は、あのヴァーントを塞いでいた大岩の様に、爆散するのだ。

軽いフットワークと鋭い拳。まるで拳闘を見ているかの様だ。

その拳闘の様な戦いぶりで、1人で数匹の妖魔を相手にしているのだから、凄まじい。

だがやはり、御殿騎士団は格が違った。

まるで雪をかき分けるかの様に、妖魔を薙ぎ払い、切り伏せ、断ち

切り、通りを進んでくる。

そうやってアクセル達に近付いてきて、1分も経つ頃には合流できた。

合流すると、アクセル達は後ろへ後ろへと追いやられ、騎士達の壁に守られる形になる。

リススだけは前線で戦い続けようとしていたが、やがて追いやられた。

5分が過ぎた。

すると、アクセル達を囲んでいた騎士達の壁が解けて、散開していく。

どうやら防御戦闘が終わって、攻勢に移った様だ。

妖魔は1度は背を向けて逃げるのだが、追いかけられると、向き直って再び襲いかかってきて、討ち取られる。

そんな事を繰り返して掃討して行く様を、アクセルは黙って見守るしかできなかった。

「三者同盟」

戦いが終わると、また甲冑を纏った騎士達に囲まれる形になった。しかし恐るべきは、この重厚な鎧を纏った騎士達が誰1人として欠けていない事だろう。

甲冑を破られた気配も無く、無傷で勝利して見せたのだ。

そこまでは、装甲の勝利と言っても良い。

だが白銀の騎士だけは違った。他の騎士達よりも随分装甲の薄い甲冑だったし、何より他がフルフェイスの兜であるのに対し、白銀の騎士だけは兜を被っていなかった。

そのクセをして、白銀の騎士の戦いぶりは凄まじかった。

白銀の騎士は壁に混ざらず、常に攻勢を続け、そして無傷で妖魔を退けたのである。

凄まじい戦闘能力を有する軍勢。

御殿騎士団であるのは、疑いようが無かった。

「失礼だが、君達は何者かな？」

訊ねてきたのは、剣を持った騎士だった。中年で、髭を蓄えている。威厳は感じられた。

兜を脱いで一応の礼儀は被っているつもりだろうが、彼は明らかに頭目ではない。

と言うより、頭目であろう人物があまりにもハッキリしていた。

ロードがチラリと横目でアクセルを見やる。

よろしく頼む、という事だろう。

「御殿騎士団の方々とお見受け致します。

私は修道士ウィンツ、こちらは修道女のエレアと申します。

リクセニア王国の聖エフィカ修道院のフレシア司祭からの使いとして参りました」

「ほう、リクセニア王国の同志だったか。

それで、こちらの方々は？」

「北のクリングスの外交特使の方々でございます。

我々が路銀に困っていました所を助けて頂き、道中を共にする事になりました」

「成る程成る程」

一応、アクセルは受けた恩を返しておく性格だった。

これで何かまずい事があるのなら、アクセルの及ぶところではない。

騎士はしばらく吟味した後、一瞬視線を泳がせた。

正確には、視線をやったのだろう。勿論、その先は白銀の騎士だった。

何かを言う訳ではなく、黙っていた。

しかしそれでも、騎士は十分と判断した様だ。

すぐに視線を戻して、アクセル達をサン＝エルクトベル大聖堂へと導いた。

流石に、御殿騎士団の人間は礼儀を知っている様だった。

だがその頭目は礼儀を知らない様だ、とアクセルは内心で毒づく。

白銀の騎士。明らかに頭目である事を誇示しながら、とうとう口を挟む事無く全てを他の人間に任せてしまった。

明らかに上からの態度。そうアクセルは受け取っていた。

「我慢する他あるまい」

すぐ後ろを歩くロードに、視線で訴えた。

返ってきたのは、大人しい内容の言葉だったが、その拳が強く握りしめられているのをアクセルは見逃さなかった。

こちらにも、思った以上に強かな様である。

ならば特に遠慮する事もあるまい。

アクセルはそう思いながら、大聖堂へ足を踏み入れたのだった。

豪華な内装。それに暖炉を絶やしていないのか、暖かい空気が冷えた肌を温めてくれた。

騎士達中は入るとすぐに散開して、甲冑を脱ぎ始めた。

しばし横目でその様子を見やっていたが、全員が甲冑を外すのを待つ前に、聖堂へ通された。

聖堂には、多くの法衣姿の人間が並んでいた。

いずれも高位の神官なのだろう。この様な土地に在る教皇の側にいるのだから、それも頷けた。

教壇に立つ男は、特に立派な法衣を纏っている。立派だが、教皇ではない。

教皇はセスミレイユ1世。女なのだ。恐らく、枢機卿だろう。

「同志ウィンツ、同志エレア」

枢機卿が、高らかに2人の洗礼名を呼ぶ。

「よくぞ聖地クローツェンヘイム、我がサン＝エルクトベル大聖堂

へ参りました。

その偉大なる信仰心、強靱な意志、鍛えられた体を、我々は歓迎致します」

「はっ」

一応はその言葉を受け取っておいた。

しかしもう演技を続けるつもりは無いのだ。

枢機卿が何かを言う前に、アクセルは喋る事にした。

「もうダメか、と思った事が1度ございました。

ですが、その時に手を差し伸べて頂いたのが、このロード様とレアン様なのです。

訊けば教皇猊下にただならぬ御用があるとの事。

どうか、私共の話の前に、ロード様のお話をお聞き下さい」

「ほう……」

枢機卿が興味深そうに、だが警戒の色を孕んだ瞳で、ロードを見据えた。

こう言えばロードが黙っている訳にもいかないのだ。

少し、ロードからは鋭い視線を投げかけられたが、気付かぬふりをしてやり過ごした。

「お二人にはロード、と名を名乗りましたが。

しかしお許し下さい。重大な任故に、名を偽っております」

やはり、と内心でアクセルは思う。

リシスもここまでは渋々といった感じで受け入れていた。

「私の名は、ゲイルハント・ロード・ジョーズベイツ。
クリングス大公国の公爵にして、クリングス大公国陸軍元帥であります」

だが次には、聖堂がざわめいた。

元帥、という大物の登場に、軍事面に良い心象を抱いていない神官達は混乱したのだろう。

これには流石のリシスも驚き、アクセルの袖を引っ張っていたが、小突いて黙らせた。

「私は浄火教を信仰する異教の徒であります。

しかし、信仰する教えは違えど、思う心は同じであると思っています。

ただ1つ、戦争はしたくない、と」

元帥がどの口をほざくのか。

アクセルは内心で失笑していて、演技をする気にもなれなかった。

それでも聖堂にいる神官達には十分な言葉だったらしく、教壇に立つ枢機卿ですら、慌てて教壇を降りて神官達と談義を始める程だった。

その隙に、アクセルも聖堂に並ぶ椅子の1つに腰を下ろした。

傲岸不遜な態度を、既に隠す必要は無くなった様だった。

慌ててリシスがそれに続く。

「げ、元帥だつて、アクセル？」

「知ってるか、リシス。

クリングスの元帥は6人いるそうだ」

リススの言葉に、アクセルはぶつきらばうに答えた。
それが何だ、と言いたげなリス。

「つまり、軍事体制がそれ程整ってないんだよ、あの国は。
公爵であれば殆ど全員が元帥の座に就く。

リクセニアの将軍と比べれば、1人1人の実権は遙かに限られている。

実際、元帥ともあるう者が特使如きの仕事をたった2人でこなしてる事から、明らかだ」

「実権無き第2太子殿が仰られてもねー？」

冷めた意見に皮肉で返され、アクセルは鼻で笑う事しかできなかった。

しかし、内心ではアクセルもクリングス陸軍元帥という男を前にして、思う所が無い訳ではなかった。

この場には3人の重要人物がいる。教皇セスミレイユに、陸軍元帥ジョーズベイツ、そしてリクセニア王国第2太子である自分なのだ。奇しくも権力的に次点にある人間が揃っている。教皇という権威を頼みにして、また利用しようとする人間達だ。

これは思った以上に何かが起きるのかも知れない、とアクセルは感じていた。

アクセルと同じ様に感じた人間が、聖堂の中にもいる様だった。白銀の騎士が動き、アクセルの座る椅子の外を通ってきたのだ。

「猊下をお呼びなされるのかな？」

その白銀の騎士を、アクセルが呼び止める。

無視するかと思っただ、騎士は立ち止まった。

「最終的には猊下が判断を下されますから」

「権力中枢から遠のいた猊下に、そこまでの判断を？」

「あの者達よりは明晰な判断を為される」

言っで、白銀の騎士は去っていく。

しかしアクセルは騎士の物言いに懐疑的だった。

この場にいる人間が何故明晰な判断ができないか、たとえば、それは政争から遠ざかり過ぎている事にある。

クローツェンヘイムの様な土地では、政策や経済、それによって生じる既得権益の政争などは生じ得ない。

これによって明晰な判断をする必要が無くなり、結果としてできなくなっているのだ。

であるなら、所詮は教皇と言えど同じ穴の貉、である筈。

そうアクセルは思っていたが、どこかで、本当にそうなのか、と思う自分もまた確かなモノだった。

自分自身もまた、そういう条件で見ると同じ。いや、兄を認める様なモノだった。

だから、アクセルは自分と似通った立場にあるセスミレイユに、優れた何かを求めている。

「お静かに」

鶴の一声で、聖堂のざわめきは収まった。

神官達が一点を見つめる。それを見て、ジョーズベイツも顔を上げ

た。

「ゲイルハント・ロード・ジョーズベイツ公爵。

私が、サライニ・コール・ホーラント・セスミレイユ1世です」

教壇の前に、セスミレイユを呼んでくると言っただけの白銀の騎士に付き添われた少女が、立っていた。

幼いその少女を見て、アクセル、リシス、ジョーズベイツ、レアンヌの目が見開かれた。

10歳程度にしか見えない少女が、現教皇であるセスミレイユ1世であると言うのか。

自分達はこんな少女を頼りにしていたのか。そういう思いが、駆けめぐったのである。

「公爵のご意志は確かに受け取りました。

しかし、私にそれを為すだけの権威が無い事もまた確かな事なのです。

例えば私が願っても、公爵が望む平和を実現する事はできないでしょう」

ジョーズベイツは、呆気にとられた間抜けな顔で立ちつくしていた。だが、アクセルはすぐに思い直していた。

10歳ばかりの少女が、これほどまでに見事な意見を言ったのけたのだ。

自分の状況を、よくわかっている。

何が足りないのかも、わかっている。

つまり、それはこの少女に、セスミレイユ1世という人物に、それだけの判断力があるという事だったのだ。

だから、アクセルは打算した。

どうすれば、彼女に無いモノを手にする事ができるのか。グルグルと回る様な感覚。だがそれは一瞬で、着陸点を見つけ出した。

そこに考えが落ち着く。逡巡して落ち着き場所が確かなモノである事を確かめた後、アクセルは席を立った。

聖堂の中央までやってくる。リシスがすぐ後ろに付いてきていた。

「お初にお目に掛かります、猊下」

聖堂によく響く様、抑揚を利かせた声色で、話しかける。呆然としていたジョーズベイツの顔がアクセルを向く。

それと同じ様に、教壇の前に立つセスミレイユも、顔を向けた。ジョーズベイツよりも確かで、ハッキリとした顔を。

「同志ウィンツ、と聞いていますが。」

貴方も公爵と同じ様に、本当の名があるのですか？」

「はい、猊下。」

私の名はアクセルと言います。アクセル・ウィンツ・ラザフォード。

リクセニア王国フォード王朝第4代国王、ウェンツェハラウト1世の次男であり、第2太子であります」

自らの身分を名乗る。

すると、また聖堂がざわつき、ジョーズベイツの目が見開かれた。対して、セスミレイユは目を細める。

何かを見極める様なその瞳に、アクセルは自分の求めている何かを見つけ出した気がした。

「リクセニア王国の第2太子様が、何の御用でしょうか」

「聞いて下さい、猊下。」

今、父上である国王陛下が、病に伏しておられます。

しかし悲しいかな。王の息子である私は、父の身を案じるよりも、国の事を思い動かねばなりません。

即ち、このまま陛下が病に打ち勝てず、次の国王の座を誰に継ぐのか、という事を考え、動かなければならぬのです」

「それで私にお祈りをお頼みにきたのですか？

兄上である王太子様の治世が、安寧の世足らん事を」

「違います」

また聖堂がざわついた。

今度はジョーズベイツも声を上げていた。

「陛下は遺言を残しておられます。これを見ない限り、誰が即位するのかはわかりません。

しかし兄上は、それを軍事力で抑え込もうとしている。

どんな遺言の内容であろうとも、私に王位を放棄させる為に」

「であるなら、私にできる事は何もありません。

どちらの太子様が即位されるのかわからない状況で、どちらかに祈りを捧げる事はできません」

「その通りであります。ですから、私は猊下に祈りを捧げて頂く事を強要しません。

ただ望むのは、神聖オルバドス帝国が、遺言の内容に沿った後継

者を支持して頂く事のみです」

「ッ」

察しの良い人間が数人いた。

セスミレイユ、ジョーズベイツ、そして白銀の騎士の3名だった。まず動き出したのはジョーズベイツだ。顔を俯け、顎に手をやり、何かを打算し始めた。

セスミレイユは、顔色を変えずに、毅然とした態度でアクセルに向き直っている。

「でしたら、皇帝陛下にお頼みされてはどうでしょう」

「今の皇帝は奇跡を信じぬ愚者であります、猯下。

猯下をこのような場所に放置しておられる。猯下を軽んじているのです。

その様な愚者に支持される程、我が国の王位は安いモノではありません」

「では何を」

「猯下に支持して頂きたいのです」

白銀の騎士が動いた。同時に、リリスも動く。

腰の剣に、手を伸ばしながらアクセルの前に立ちはだかったのだ。それを見た白銀の騎士が立ち止まる。丁度、セスミレイユとアクセルの間だった。

再び、リリスと白銀の騎士が動いた。

アクセルと、セスミレイユに、押しのけられて。

「我が国を、王位継承の争いに巻き込もうと言つのですか」

「いずれにせよ皇帝は介入するでしょう。

同じ教えを戴く我等リクセニアとの同盟を捨てた人間です。

これを機会にリクセニアの国土を併合し、大陸に覇を唱えるやも知れません」

やるだろう、とアクセルは踏んでいる。

であるならば、セスミレイユも同様の考えを抱いている筈だ、と思つた。

「ですが、これを防ぐ手だてが1つあります」

現在の皇帝が即位して24年。

その長い治世の終わりで混乱してきた現状を解決するには、軍事力を選ぶ男だ。

逆に言えば、政治的手腕が無い。付け入る隙があるとすれば、そこなのだ。

そして、その為には……。

「ジョーズベイツ閣下」

呼ぶと、ジョーズベイツは僅かに肩を跳ねさせた後、神妙な面持ちでアクセルを見やった。

何を言われても驚かない、という顔だ。良い顔である。

「我々は一蓮托生という言葉、覚えておいでですか？」

「はい、確かに……」

「あの言葉は、まだ生きているのでしょうか？」

「難しい所ですな。」

いやしかし、私が活かして見せましょう。

クリングス国内はオルバドスとの戦争を停戦する事で、一致しておりますからな」

「であれば」

アクセルはジョーズベイツに歩み寄った。

同じくして、セスミレイユも教壇から降りようと、歩いていた。一足先に、アクセルはジョーズベイツと手を組んだ。

「協力しようではありませんか。」

クリングスは、帝国議会に停戦を行う様に持ちかける」

ジョーズベイツが確かに頷いた。

セスミレイユが、やってきていた。後ろには白銀の騎士。

アクセルが手を差し出す。セスミレイユは意を決して、手を差し出した。

小さな手。ジョーズベイツと一緒に少し屈んでやり、ようやく届くその手。

「リクセニアは、猊下を保護致します。そして猊下の保護を理由に、皇帝を非難します。」

これはクリングスを間接的にですが支援する事になり、クリング

スモリクセニアを支持して頂ければ、この非難は大きな効力をもたらす様になる筈です。

猊下の保護を支持するものではありません。保護するリクセニアの人間を、支持して頂ければ良いのです。

即ち、私を」

「成る程」

「王太子は反抗し、内戦を仕掛けてくるかも知れません。しかし、この時だからこそ猊下の威光が我国内で有効に働くのです。」

内戦の中で、猊下の奇跡は兵士、引いては民の大きな心の光となる筈です。

この光を、オルバドスの国民も欲しがらる筈。そうする事で、猊下はオルバドスに戻る手筈を得るのです」

「全ては貴方次第。

そういう事ですね、アクセル様？」

セスミレイユが悪戯っぽく、アクセルを見上げた。

清純な姿を崩さない所が、アクセルと違う所だと思った。

このセスミレイユにだって、アクセルに劣らぬ、もしかしたら勝る程の野心を内に秘めている。

だがそれを、少しも周囲に感じさせない。大器であった。

「しかし、他に道はありません。

クリングスが我国を見捨てれば、我国はオルバドスに介入され、オルバドスは我国の国土を併合します。

一時はクリングスとの停戦が成るかも知れませんが、それは確実なる大戦への休憩に他ならないのです。

次には、大陸の殆どを併合したオルバドスとの決戦になるでしょう」

「うむ」

それを、確かなモノとしてジョーズベイツは受け止めている筈だ。だからこそ、一蓮托生という言葉を使ったのだ、彼は。

「猊下は聖殿教会の聖女様です。

その聖女様が、この様な土地で一生を終える事になります。

苦しむ信徒を救う事もできず、苦しむ己を助ける事だけに勤しむだけで。

それを、信徒の1人として惜しく思うのですよ、私は」

「……」

セスミレイユは頷いていたが、僅かにアクセルを見上げていた。どうせ嘘だろう、と思われているのだろう。

だから、軽く笑いかけてやった。

本当は心から、そう望んでいるのだという事を、伝えてやりたかった。

「弱者が強者にならんとする時。これこそが好機なのです。

私が皆様に好機をお届けします。そして皆様は好機を掴まれるだけで良い」

「その好機、乗らせて頂こう」

「よろしく願います」

3人の声が、ここに同盟が締結した事を、報せた。

「三者同盟」(後書き)

章の間に、省いた分の国際情勢の推移と、その章で登場した人物の設定を一覧にしたモノを挟んでいます。

推移の方は年表にしてあるので、小説ではありませんが、本編に影響してるので、読んだ方が良いでしょう。

手抜きで申し訳ありません。

登場人物設定の方は非常に簡単なモノで、読まなくても問題ありません。

第1章終了時 登場人物一覧（前書き）

一覧の見方

名・ミドルネーム・姓¹ 所領

年齢 公職、家系

備考

第1章終了時 登場人物一覧

ここまでの登場人物一覧&総括

「リクセニア王国勢力」

アクセル・ウィンツ・ラザフォード

16歳 リクセニア王国第2王子

フォード王朝第4代国王ウエンツェハラウト1世と、王妃アメージアの間にも生まれた、第2王子。

ただし父と母のいずれの特徴も持っていない為、彼を慕う貴族は少なかった。

その為、幼い頃から修道院に預けられる。修道士として暮らす傍らで教養を身につけ、密かに王位を狙う。

リシス・エレア・キュレイン

16歳 ノストラント侯爵令嬢

ノストラント侯オギュストの長女。アクセルとは幼馴染みであり、護衛を務めている。

アクセルとは違い剣術を得意としており、近衛騎士に匹敵している。

シルバー・ヘイツ・グランフォード「ウエンツェハラウト1世

52歳 リクセニア王国フォード王朝第4代国王

アクセルの父であり、現国王。ただし現在は病に倒れ、意識不明。仁君、賢君と名高く国民からの支持が篤いが、アクセル曰く謀略の王。

クラウズ・グランフォード

16歳（アクセルより1つ上） リクセニア王国王太子

ウェンツェハラウト1世とアメージアの子で、王位継承権第1位の王太子。

貴族からの信任が厚いが、アクセル曰く無能な愚兄。

オギュスト・グローク・キュレインⅡノストラント

45歳 ノストラント侯爵

リススの父であり侯爵。また、国軍の將軍である。剣聖オギュストの名で知られている。

シュバツク・セレブレアⅡルフトヘイク

62歳 ルフトヘイク公爵

アクセルの後見人を務める公爵。王国評議会議長を務めるが、これは名誉役職である。

フレシア

64歳 聖エフィカ修道院司祭

アクセルとリススを引き取り、修道士として育て上げた恩師。人格者。

アメージア

享年32歳 リクセニア王国王妃

7年前に他界している、ウェンツェハラウト1世の妻、王妃。絶世の美女だったと言う。

Ⅱ 神聖オルバドス帝国Ⅱ

セスミレイユ1世

外見年齢10歳（詳細不明） 聖殿教会第15代教皇

最年少で教皇を務める事になった少女。しかし、詳細な年齢は不明

らしい。

少女にしか見えないが、実はアクセルやジョーズベイツと渡り合える政治手腕を持つ。

ヘーリア

17歳 御殿騎士団第13代騎士団長

最年少、初の女性騎士団長。聖槍を振るい、凄まじい戦闘能力を持つ。

セスミレイユ1世に慕われているが、実際はヘーリアの方が強く慕っている。

皇帝ジュリアーズ3世

63歳 神聖オルバドス帝国第6代皇帝

神聖オルバドス帝国の皇帝。苛烈な人物で、同じ聖殿教会の勢力であるリクセニアとの同盟関係を解消する。

「クリングス大公国」

ゲイルハント・ロード・ジョーズベイツ

55歳 クリングス大公国陸軍元帥

6人いる元帥の1人。尚、ミドルネームの「ロード」は大公国での地位を現す。ロードは公爵。

浄火教の信徒で、若い頃は凄まじい廉火術の使い手だったらしい。

レアヌ

17歳 ジョーズベイツの従者

普段はメイドを装っているが、実際はクリングス大公国陸軍の中尉である。

アナターシャ・クラウン・ヴィリーギオ
62歳 クリングス大公国大公爵
クリングスの国家元首である女大公爵。

「カールトス公国」

バルトロメウ・エルトイーユ

32歳 カールトス公国第5代公王

10年前に公王位を継承した公王。その際にウェンツェハラウト1
世から継承戦争を引き起こされている。

戦争中に戦傷を負い、彼は隻眼隻腕となってしまうている。

第1章終了時 登場人物一覧（後書き）

第1章は戦記と言うより冒険、或いは政治ですから、後々まで響いてくる重要な登場人物は少ないですね。

第1章で重要な役どころだったとしても、政治的、戦力的に見て大した事の無い人は、容赦無く出番が無くなるというのがこの戦記です（苦笑）。

第1章〜第2章 年表（前書き）

できるだけ読んで頂いた方が良いです。

読み飛ばすと、時系列がわからなくなってしまうので、
申し訳ありません、物語にする事ができなくて。

第1章〜第2章 年表

大陸歴1545年5月25日

リクセニア王国フォード王朝第4代国王、ウエンツェハラウト1世崩御。

同年同月28日

宰相、バイユバーク公爵ヴィーイーノの手によって、ウエンツェハラウト1世の遺言が開示。

結果、第2太子アクセルの即位が決定された。

同年同月29日

昨日の遺言が改竄されたモノであるとして、王太子クラウズが遺言を開示したバイユバーク公の身柄を拘束する。

バイユバーク公の罪の是非について、王国評議会の開催を呼びかける。

しかし、ベシユレスタ公爵ウィルムント大將軍、ルフトヘイク公爵シュバツク議長両名の欠席により、評議会の開催は却下。

同年6月2日

王太子クラウズが王位継承を主張、即位し、リンデンステッド2世を自称する。

第2太子アクセルはリンデンステッド2世の主張を否定、王位継承は自身にあるとする声明を発表。

これに伴い、貴族達の間で支持や不支持が相次ぎ、リンデンステッド2世がリクセニア王国フォード王朝第5代国王の名の下に、軍を招集する。

対する第2太子アクセルは大將軍ウィルムントに命じ、軍を招集した。

同年同月3日

第2太子アクセルが聖殿教会第15代教皇セスミレイユ1世を保護したとする声明を発表。

神聖オルバドス帝国皇帝ジュリアーズ3世がすぐさまこれに反発。リクセニア王国への教皇奪還を主旨とする遠征軍の出征を議会へ提出する。

同年同月4日

クリングス大公国が第2王太子アクセルの王位継承を支持する事を表明する。

同年同月6日

神聖オルバドス帝国議会が遠征軍出征を否決。

皇帝命令により皇帝ジュリアーズ3世が押し切ろうとするが、軍事統帥権を持っていたクエツエンカート元帥がこれを却下。

クエツエンカート元帥が軍事クーデターを敢行し、皇帝ジュリアーズ3世の皇帝権力を停止する。

同年同月10日

カートス公国がリンデンステッド2世を支持する事を表明。

伴い、頻発する大陸の混乱を収める為の会議の場を設ける事を提案するが、各国首脳はこれを却下した。

同年同月15日

リンデンステッド2世が軍の再編を完了した事を発表。

第2太子アクセルへ最後通牒を提出する。

リクセニア戦記 世界観設定（前書き）

とりあえず置いておきます、読み飛ばして結構な部類のモノですが、
作中では紹介できない部分の設定を紹介、という事になります。

リクセニア戦記 世界観設定

世界観設定

リクセニア王国フォード王朝

国土規模 A 軍事力 B (総兵力 2 万) 商業 C

立地：西南部にカートス、西部にアウステン、ガリア、東にオルバドス、南にジステイン。

「建国 90 年を超える国家。大陸西部中央に位置し、隣国にはオルバドス、カートス、ジステイン等。

国土の大凡が山岳部で、農業と鉄工業が主な収入源となっている。軍事力ではオルバドス、クリングスに引き離された数多い中堅国の部類に入る。

国教として聖殿教会を戴いており、国民の凡そ 90% が聖殿教会の信徒である。

この事からオルバドスとは軍事同盟を締結していたが、20 年前に解消されている。

君主制の国だが、長子相続の意識が薄く、周辺諸国とは若干違った独特の伝統を持つ。」

神聖オルバドス帝国

国土規模 S 軍事力 S (総兵力 10 万) 商業 A

立地：大陸中央部。西にリクセニア、北にクリングス、南にゼクスヘル。

「建国 200 年を超え、その歴史の全てを超大国として君臨してきた大陸最強国家。

隣国にはリクセニア、クリングス、ゼクスヘルなどがある。

広大で豊饒な国土、強大な軍事力、これを活かした経済など、大陸の超大国として圧倒的な存在感を放つ。

国教は聖殿教会。また皇帝は聖殿教会の教皇から統治権力を委譲された存在である。

近年教皇の権威が失墜しており、皇帝の権力が強まっていたが、今は諸侯の権力が強い傾向にある。」

クリングス大公国

国土規模A 軍事力A（総兵力4万） 商業B

立地：大陸から北に突き出た半島。南にオルバドス。

「建国80年を超える。北方に突き出た半島で、隣国はオルバドスのみ。」

国土の殆どが豪雪地帯、中には永久凍土の地もある程だが、鉄鋼資源が豊富で商業規模は大きい。

浄火教と呼ばれる国教を戴いており、国民の100%近くが信徒である。また特殊な秘術を持つ。

オルバドスに単独で対抗できる唯一の軍事国家だが、国土の問題で自給率が非常に低い。

6つの公爵家から大公爵を選挙で選出する体制。

これはオルバドスの所領だった事によるモノで、浄火教の広がりと共にオルバドスから独立した。」

カートス公国

国土規模C 軍事力C（総兵力1万3千） 商業B

立地：東にリクセニア、北にアウステンⅡガリア。

「建国66年。フォード王朝以前のリクセニア王国の王族が建国した国で、公王を名乗る。」

隣国にはリクセニア、アウステンⅡガリアがある。

地形上、強大な軍事力を持たなければならない土地なのだが、その都度国境の面する2国から干渉を受ける。

陸路はリクセニアに負け、海路はアウステンⅡガリアに負けている。

公王バルトロメウ・エルトイーユは隻腕隻眼だが、国内では英雄視されている。」

アウステン＝ガリア都市連合

国土規模？ 軍事力B（総兵力2万1千） 商業A

立地：大陸西部から西に突き出た半島。南にカールス、東にリクセニア。

「かつてはカールス公国の辺りにまで広がる統一国家だったが、瓦解と共に都市国家となった。

大小様々な100近い都市国家があり、学園都市やら自由都市やら城塞都市やら色々。

常日頃は都市国家毎で争い、戦乱の絶えない土地だが、有事の際には連合を結んで対処する。

特に水軍力はオルバドス帝国を凌いで、大陸最強の精度を誇る。また、傭兵も強い。」

ジステイン王国

国土規模C 軍事力C（総兵力1万1千） 商業B

立地：大陸西南部の沿岸。北にリクセニア、東にゼクスヘル。

「建国30年程の新興国。隣国にはリクセニア、ゼクスヘルなど。

政治的な事情から建国された新興国という事もあり、あまり突出した能力は持っていない。

リクセニアの軍事力の庇護下に在り、これでどうにか独立を保っているという状態である。

大陸でも珍しい立憲君主制の中道国家だが、日和見主義の傾向が強い。」

ゼクスヘル共和国

国土規模C 軍事力D（総兵力8千） 商業A

立地：大陸中央部。北にオルバドス、西にジステイン。

「建国15年の新興国。隣国にはオルバドス、ジステインなど。

大陸で唯一の共和制国家。選挙で選出された統領によって政治が執り行われている。

軍力は脆弱も良い所で、とても北にオルバドスを臨んでいるとは思えない。

共和制国家なので、商業が自由に行われており、盛ん。」

リクセニア王国軍事制度

国王：人事権の長。越権行為が可能であり、大將軍の意思を問わず配置や階級の変更が可能。

大將軍：軍事統帥権を持つ。作戦立案、軍の人事権、その他諸々の一切の権力を持つ。

將軍：師団長以上に与えられる称号。ウィルムントの他に、オギュストがこの称号を持つ（ ）。

（ ）＝アクセル軍では3個旅団を最大規模にしている為、師団長であるウィルムントとオギュストは、現在空位である。

その為、旅団長を指揮したり、或いは選抜部隊を指揮する事が多い。

師団：3連隊で構成される、旅団の上位組織。本来はこれが一般的な戦略単位なのだが、国軍が二分している状態なので需要は無い。4500人規模。

旅団：2連隊で構成される、師団の下位互換単位。アクセル軍は兵力で劣る為、この単位が一般的である。3000人規模。

連隊：2つの大隊の事。1連隊辺りの構成人数は、凡そ1500人前後。

大隊：5つの中隊で1つとなる集まり。伯爵以上の貴族が指揮官になる事ができる。750人前後。

中隊：4つの小隊で1つとなる集まり。貴族の指揮官しか許されておらず、爵位を持たない人間はこの指揮官になる事ができない。150人前後

小隊：3つの分隊で1つとなる集まり。最小の戦術規模で、小隊長の指揮権限で以下の部隊に命令が出される。貴族ではない士官が小隊長を担当する。40人前後。

分隊：3つの班で1つとなる集まり。軍事行動では小隊規模で使われる。15人で構成。

班：5人を1つとする小さな集まり。軍事行動では、小隊規模で使われる。

聖殿教会

教祖：教皇 信徒：500万人 傾向：聖霊信仰

「聖殿、即ち教会という場に教えを乞う人間が集い、発生した宗教。そういう起源なので教えを説いた人間に対する、聖霊信仰の傾向が強い。

迫害や抑圧の歴史が無い為、政治に対する積極的な介入は無く、また戒律も緩い。

元々教えを授ける場が教会であって、授けた教えを強要する傾向が無かった為と思われる。

神聖オルバドス帝国、リクセニア王国が国教に戴いており、両国で圧倒的な信徒を持つ。

しかし近年、オルバドスでは皇帝と教皇の間で政争があり、この結果教皇の権威が失墜した。」

浄火教

教祖：師帥 信徒：140万人 傾向：精霊信仰

「万物に宿る火の神を信仰するという教え。宗教と言うよりも民間伝承という色合いが強い。

その為政治的な影響も薄く、クリングス国内では100%近い信徒を誇る。

廉火術と呼ばれる秘術を扱い、これによって鍛錬、製鉄などを行う。

風土の影響で戦闘に使用する事は難しい様だが、国外であればそれなりの戦闘力になる様子。」

名前について

「作中では聖殿教会勢力圏の人間と、クリングス大公国の人間とにミドルネームがある。

聖殿教会勢力圏の人間の場合、このミドルネームは聖殿教会に入信した時に与えられる洗礼名。

教会などの場では、姓名の代わりにこの洗礼名で呼ばれている。

対して、クリングス大公国の人間のミドルネームは、出自を現すモノとなっている。

大公爵はクラウン、公爵家はロードで、これには大公爵の家柄の人間も含まれる。

以下、貴族はヴィン、騎士はナイトとなる。

これ以外に、王が名乗る名前がある。

王が名乗る名前については、ファーストネーム、ミドルネーム、姓とも異なる。

貴族達の所領名に近いが、所領名は元から決まっているのに対し、王の名は後から付けられる。

歴代から名前を取る場合は、政治姿勢や思想がその人物に近い事を現す。」

リクセニア戦記 第2章「アクセル軍集結」

ルフトヘイク公爵領はリクセニア王国中央部に位置する。

広大な草原が広がる豊饒な土地を持ち、軍が集結するには打って付けの土地であった。

第2太子アクセルの名の下に集まった軍勢、総勢8千6百。諸侯は17名に上った。

この8千6百の軍勢を10年間維持するだけの兵糧を、このルフトヘイク公爵領は蓄えている。

元々リクセニア最大の兵糧基地が集中する地域であり、ここを抑えなければ、何も始まらないと言っても過言では無かった。

だからこそ、最後通牒を突きつけたリンデンステッド2世偽王軍は、この土地をまず狙うに違いない。

アクセルはそう踏んで、ウィルムントに指示を出し、この地に軍を集めさせた。

「敵軍は、1万2千を超える軍勢を整えた、と。そう発表していますな」

ルフトヘイク公シュバック・セレブレアが言った。

場はルフトヘイク公爵領の公都にある、テンゼンスト城の会議室。

普段はこの城の上座には、シュバック当人が座るのだが、今回は上座の右手に控えていた。

城主という事もあるが、上座に座る人物の後見人を務めているのが、このシュバックだからだ。

その上座には、アクセルが座していた。

後ろには近衛隊を指揮する事になったリシスが控えている。

「しかし、その数もかなり疑わしいモノですな」

シユバックの向かい、アクセルから向かって右手の席。

白髪を強引に後ろに撫でつけた、白髭の大男。鋭くつり上がった瞳を光らせる彼。

ベシユレスタ公爵、ウィルムント・クラス・ジークバウ、大將軍である。

リクセニア王国軍の軍事統帥権を掌握する人間であり、「天傑」とすら称される剛勇の持ち主でもあった。

カートス公国との公位継承戦争にも参加しており、他の將軍が敗戦を重ねる中、快進撃を続け停戦交渉を勝ち取った人物だ。

その功績から大將軍の地位に就いていて、前國王に対する忠誠心は未だ揺らぐ事が無い。

アクセルを支持しているのも、前國王の遺言があったからこそだった。

しかし、彼には優秀な息子が2人もいる。あと1人いるそうだが、今この會議に列席しているのは2人だった。

例えばこのウィルムントが扱い難かるうが、その跡を継ぐ人間には事欠かないのだから、問題は無いとアクセルは踏んでいた。

「武器が集まっていない様です。当然ですな。

我がベシユレスタ領に、国内の武器は集中していたのですから。

実際の数は8千程度、動ける兵ともなれば5千が良い所なのではないでしょうか」

「では、当面はその5千を叩く戦になる訳か」

「そういう事になりますな」

アクセルの言葉に、ウィルムントが力強く頷いた。

それを受けて、アクセルはこの会議に列席している人間を見回した。

まず目に付くのは、黒髪を後ろで束ねた中年の男。

自信満々に微笑んでいるその男は、リシスの父親であるオギュスト・グローク・キュレインⅡノストラント侯爵だ。

「剣聖オギュスト」と名高く、ウィルムントに匹敵する剛勇で知られる。カートス公国との戦争ではウィルムントに下におり、そこで戦功を挙げている。

次に、長い白髪と白髭を蓄え、眉毛も殆ど白い毛で覆われている老人。

この会議の長老である彼は、グリースブ・オーバ・フロンツⅡジェリッド侯爵。御歳76歳。

先王ウエンツェハラウト1世の下で財務大臣、宰相を歴任し、一時は要職から離れていた人物だ。

だが内政手腕は確かであり、今回シュバックは外交に回って貰う為、このグリースブが内政の長となっている。

それから、栗毛の青年貴族。顎髭を蓄えているが、まだ20代の彼。ウィルムントの息子である、ウイスケル・ゼロントⅡエセル伯爵だ。長男だが、妾の子という事で、ゼロント家に養子入りしエセル伯爵となった男だ。

父と同じ優秀な軍人で、特に電撃作戦での適性が高い。

その弟、ライレント・ズイン・ジークバウ。父親に似た銀髪を持つ優男だ。

父や兄の様な軍人氣質の男ではなく、内政で手腕を発揮するタイプだ。グリーズブと共に、重用する事になるだろう。

そして、男ばかりの会議の中で目を引く女子数人の内の1人。プロンドの髪を今は下ろしている、流麗な少女だ。

アルセイア・クリーツィベネディットという彼女は、今回偽王軍に付いた父、ベネディット侯爵を討ってアクセルの下にはせ参じた女傑だ。

軍事、事務の両方に長じていて、気が強い。男も顔負けのその指揮手腕は、演習でウイスケルに勝利している程だ。

最後。教皇セスミレイユと、白銀の騎士こと御殿騎士団騎士団長ヘーリア。

彼女達は戦力ではないし、軍事的な会議では呼ばない事が多いのだが。

彼女達を保護しているアクセルが最後通牒を受けて、この対応を論じる会議だったので、呼ぶのが筋だと思いアクセルは招集していたセスミレイユはよく自分の立場をわかっている様で、神妙な面持ちを浮かべるだけで黙って会議に列席している。

「戦になれば、国は乱れますなあ」

長老、グリーズブが囁いた声で言う。

豊かな眉毛に邪魔され、その瞳の色をうかがい知る事ができないので、アクセルは少々彼が苦手だった。

「兄が王になる方が、国が荒れると私は思っている」

「僕は軍事にはとんと疎いので、殿下の見ておられる戦略を垣間見る事はできません。」

ですから、今の状況を見て、どうすれば国が安定するのか、それを考える事ぐらいしかできませぬぞ」

「それをやってくれるのであれば、私は何も言わないつもりだ。内政を貴方に一任したい、グリーズブ殿」

「承知致しました」

僅かに頭を下げるグリーズブ。

それで、1つ問題は片づいた。どうなろうと、彼が国を安定に導いてくれるのだ。

であるなら、後は彼が整える場を用意する為に、勝ち取るだけである。

「クラウド様は、やってはいけない事をされましたな」

ニイ、と笑うオギュスト。

こちらは豪快な人柄の持ち主で、流石はリシスの父、と思える所が多々あった。

だからまあ、扱いにくい部類ではあるのだが、信頼はしているし嫌いではなかった。

「先王陛下の遺言を反故にし、尚かつ宰相閣下を軟禁しておられる。拳げ句の果てにはカートスと手を組むとは、何と最早、言う事はありません」

「ならば叩き潰すべきですな」

ウィルムントが言うと、オギュストは深く数度頷いた。

この2人は義兄弟の契りを交わした盟友だそうだ。

互いの豪快な人柄に惹かれ、そういう間柄になったのだと言う。

オギュストは、リシスをライレントの妻にしたがっていたが、リシスの強硬な反対に遭い、失敗している。

その時に口添えを頼まれたのは、辛い思い出だ。

「父上と同意見です」

「同じく」

ウイスケルとライレントは、特に主張する事無く同意する。

まだこの2人は、何かを主張するという事をしたがらない様だった。

「叩き潰したとして、その後はどうするおつもりですか、殿下」

アルセイア。彼女は何故だか知らないが、アクセルの事を慕っているらしい、とシュバックが言っていた。

であるからか、見つめられるその視線がどこか熱を帯びている様に感じられる。

会議中なのだ、と言い聞かせ、アクセルは答えてやった。

「最後まで抵抗する人間は処刑。降伏する人間は基本的に迎え入れるが、軍勢は没収し、領土の管理は一時のみ許す。

処遇は時期を見て決める。偽王については、処刑する他無い」

「承知しました」

静かに頷いて、俯いた後、チラリとアクセルを見やってくる。

そんな目をされては、後ろからの空気が随分と気まづくなるのだが、アクセルは我慢してセスミレイユを見やった。

下座だが、アクセルの正面に座っていた。ヘーリアはその後ろである。

「私は内政に干渉致しません。

ただ、保護していただいているアクセル様の言う事には、応えなければならぬと思っています」

身の振り方を良くわかった返答だった。

それで良い。オルバドスの内情が安定しない限り、セスミレイユは帰る事ができないのだ。

であるからアクセルには従わなければならない。身の安全の為にだ。同時に、彼女自身が元々オルバドスの人間である事を忘れてもならない。下手に出過ぎれば、祖国の民から見放される事だろう。

今は、悲劇の聖女を演じるべきなのだ。

国に帰りたくとも帰る事のできない状況を、民が憂える様になれば、セスミレイユの身は安泰する。

そしてそれは彼女を保護していたアクセルに、名声というモノをもたらす。

彼女という存在は、現状においては蚊帳の外かも知れないが、大きいモノである事は確かだった。

「では議決を採りましょうか。

リンデンステッド2世からの最後通牒を受諾する事を承知の方は、挙手を。」

却下する方は、起立を願います」

完全中立を保つシユバックが、議決を採った。

この場にいる人間は、議決権を譲られ委ねられて、集まった6人だ。殆どの人間はウィルムントやグリーズブに譲り、他は散らばって、

その人間がシュバックの取りなしによって他の数名に譲ったのだ
た。

シュバックとセスミレイユの2人は座ったままで、拳手もしない。
対して、他の議決権を持つ人間は全て、立ち上がっていた。

議長がシュバックなのだから、当然アクセルも議決権を有しており、
席を立っていた。

「賛成0名。却下7名によって、リンデンステッド2世からの最後
通牒を却下し、宣戦布告を行います」

応、とウィルムント、オギュスト、ウイスケルの3人が声を上げた。
会議が終わり、ざわつく場を見て、シュバックが感慨深げに呟く。

「しかし、この会議はもうしばらく開かれませんか。
これからは一刻一秒を争う、戦争になるのですから」

「そうだな。
後の事は、全て私が受け持つ事になるだろう」

自らが背負う明日を思い、アクセルは天井を見上げるのだった。

「ハイオウムの国王」

リクセニア王国王城、リクセンダム。

首都ハイオウムに佇むこの城は、難攻不落の堅城として名高い。

建造されてから既に40年を迎えるが、度々の改修も手伝い今なお力強くハイオウムの栄光を支えている。

しかし、最近はハイオウムから民が消えつつあると言う。

王城の主であるリンデンステッド2世ではなく、第2太子であるアクセルを頼り、ルフトヘイク公爵領へと逃げるのだ。

そんな事を許しては、国王の威信に関わるという事で、リンデンステッド2世の後見人を務めるブリンドビル公エイルバーが首都の出入りを制限している。

「エイルバー。貴方の言う事はわかるが、出入りを制限するのはやりすぎじゃないかな」

豪華絢爛に飾られた玉座の間。深紅の絨毯が敷かれ、即位を祝す横断幕があちこちに掛けられている。

リンデンステッド2世が、その玉座に座していた。

この玉座の間は、先王ウエンツェハラウト1世の時代には、ここまで煌びやかな場ではなかった。

リンデンステッド2世が即位してから、後見人のエイルバーが改装し、石像や花、ツボ等といったモノを持ち込んできたのだ。

座すリンデンステッド2世は、そうアクセルと歳が離れていない。

だから貴公子然とした男で、父親から受け継いだ白い肌、両親から受け継いだ金色の髪を程良く整えている。

アクセル程体格は良くなく、精々170行くか行かないかぐらいで

あり、肩幅も狭かった。

ただ顔立ちは非常に良く整っている。アクセルとは違う顔立ちだった。

バイユバーク公ヴィーイーノから、宰相の地位を篡奪した男、エイルバー。

彼は常に、リンドステッド2世の傍らに控えていた。

「何を仰りますか、陛下」

エイルバーという男は巨漢だった。

身長が高く肩幅が広い。それに見合うだけの肉もある。

焦げ茶色の髪を本来持つ彼だが、貴族としての体面の為に銀髪のカツラを着けていた。

「今王都を出ようとする人間は、いずれも陛下を裏切った人間なのです。」

これを見逃す事はできません。敵前逃亡に等しいのです」

「しかし彼等は、兵士じゃないんだ。」

兵士は戦う事を生業にしているからこそ、逃げてはいけない」

「民とは国の兵士です。国の為に働き、国の為に死ぬ。」

民もそう在るべきなのです」

「だが経済は落ち込んでいるじゃないか。」

アクセルはオルバドスからの援助も取り付けたし、領地もルフトヘイクを初めとして要衝を抑えてある」

「オルバドスの援助と言っても、公的なモノではなく私的止まりで

す。

対する我々はカートの援助を取り付けております。それも軍勢を派遣してもらう事まで、です。

領地についても農耕地の多い南西部は抑えておりますから、兵糧で悩む事はございません」

リンデンステッド2世は嘆息した。

確かに、エイルバーの言う事は正論なのだろう。

だが正しいだけで、それは効果が付いてきていない。

各所からの報告書に目を通してしているリンデンステッド2世には、それがよくわかっていた。

「クラウド」

玉座の間に、新たに人がやってくる。

リンデンステッド2世を名で呼び捨てるその人間を見て、エイルバーは顔を真っ赤にして、喚いた。

「プロスト！ 貴様、陛下を名で呼び、その上敬称を付けないとは何事か！

それでも貴様、我がリクセニア王国軍の將軍かッ！！」

「アンタに話しに来た訳じゃないんだ、エイルバーさんよ。

話の邪魔するってんならどいとけよ」

「貴様ああああッ！！」

ぶつきらばうな男、プロスト・フェル・ファリオン＝ボルクツド侯爵の物言いに、エイルバーは額に青筋を浮かべていた。

それをなだめるのはリンデンステッド2世の役目である。

どうにか諭し、下がらせる事に成功すると、一際大きなため息をついた。

「疲れてる様だな、クラウズ？」

「全くだよ、ブロスト」

ねずみ色の髪を持つブロストだが、顔立ちはリンデンステッド2世に劣らず整っている。

ただリンデンステッド2世よりも大人びている為、包容力があつた。体格だつて180を超えており、肩幅も広く、戦場では2mもある長弓を軽々使いこなす剛腕の持ち主なのだ。

リンデンステッド2世とは、幼少時からの付き合いだった。

彼にとつての、リシスの様な存在と言えるだろう。長らく護衛を務め、また家柄の良さから、今回は將軍を務める事になっていた。

実質的な最高指揮官ではあるが、諸侯が彼を認めていないので、大將軍の座は空位のみである。

「エイルバーは、確かに言っている事は正しいのかも知れない。だが出ている結果は彼の言う通りじゃないんだ」

「当然さ。あんな無能なヤツの言う事なんて、1つでも当たれば運が良い方だぜ。」

世の中はもつと複雑で単純だつて事をわからせなきゃ、どうにもならねえよ」

「でも、彼はよく諸侯を抑えてくれている。

ボクには45人の諸侯をまとめ上げる事なんて、できやしない」

「それに関しちゃあ、大したモンだと思うがな」

ばつが悪そうに肩を竦め、ブロストは顔を引き締めた。

「アクセルからの返答だ。

最後通牒は自分を支持する諸侯との協議の結果、却下する、とな」

「そうか……」

リンデンステッド2世は目頭を押さえて、頭を振った。

「アクセルは、本当に良くできた弟なんだ。

エイルバーは庶子だなんて言うけれど、ボクなんかよりもずっと頭が良くて、深い所を見る。

彼と一緒にどんな困難な状況にでも立ち向かえると思っていたのに……」

アクセルと違い、兄であるリンデンステッド2世はアクセルの能力を高く評価していた。

面識はそれ程多くないが、少ない訳でもないし、可愛い弟という思い出だって持っている。

その弟と戦うという事は、リンデンステッド2世にとって痛恨だった。

ブロストも、そのリンデンステッド2世の気持ちは十分理解していた。

「仕方ないだろうよ。先王陛下は、アクセルを指名した。

けれどエイルバーを初め、多くの諸侯はお前を支持したんだ。

国が2つに割れても仕方ない」

「本当に、何でこんな事になったんだろう。昔から王太子として恥ずかしくない様に、とエイルバーから言われて、その通りにしてきたのに」

「偏にアイツの言う事を聞き過ぎた、としか言えないがな。だがそれについて、オレも同罪だ。アイツの言う事を咎められなかった」

気持ちを切り替える為、ブロストは受け取っていた報告書を取り出した。

軍議の様なモノは開かれていなかった。ブロストがリンデンステッド2世と相談し、作戦を決める。

リンデンステッド2世がエイルバーに話を通し、そして諸侯をねじ伏せて貰う。こういう方法しか無かった。

「敵方に集まった諸侯は15人から20人って話だ。

内、主立った人間は、大將軍ベシュレスタ公、評議会議長ルフトヘイク公、元宰相ジェリッド侯」

「流石だね。ボク達が喉から手が出る程欲しい人材を、向こうは揃えてる」

「兵力は8千強。それでも実働戦力だって話だ。実際攻める時にゃ、更に5百は多く見積もらないといけないだろうな」

「こっちは市民の寄せ集めだけれども、きっと向こうは正規軍が多いんだろうね」

「攻城兵器の数も段違いだな。」

ベシユレスタ公ウィルムントが、結構な数の軍備を溜め込んでたらしい。

どうにも今回の戦を、何年か前から予想してたみたいだな」

「そうか……」

そこでプロストからの報告は終わりだった。

リンデンステッド2世には、戦略なんてモノはあまり見えない。

幽かに見える戦術眼から言えば、ルフトヘイクをなんとかしてでも奪取して、持久戦に持ち込む事ぐらいか。

「内戦を兵糧攻めとは、正直言つて戦略的に最悪なんだが……」。

勝つという事を念頭にするには、仕方のない事か。

できればあの人達とは多くを戦わない方が良い。

ただでは勝てないし、いつかは必ずぶっ潰されるからなあ」

「そうだね。ルフトヘイクの草原を、どうにかして手に入れよう。ボクとしてはノクラインを推したい所なんだけれど……」

ノクライン・ルード・リード＝シエルハット子爵の事である。

まだ24だが、プロストよりも年上だ。軍事の手腕は間違いなく今の国軍の中で、五指に数えられた。

「悪くない人選だな。」

ノクラインを向かわせるのは、オレも考えていた。

ノクラインは能力があるんだが、まだ他のヤツ等からの信頼が薄いからな。

この負けられない一戦の緒戦を任せるのは、有りだ」

「でも相手の先鋒によると思うんだ。
もしもベシユレスタ公が出てくるんなら……」

「だとしたら、尚更ノクライン以上の適任はいない。
撤退戦になるかも知れないんだ、よく軍を統率するには、ノクラ
インの様な男が必要だ」

「そうか、じゃあ任せよう」

リンデンステッド2世が深く頷き、ブロストは拝礼する。
受けて、リンデンステッド2世は軽く手を叩いた。

「さあ、これで仕事の話は終わりだ。
ブロスト、今日は久々に互いの妻と　ボクは未来の妻だが、一
緒に茶会をしないか」

「戦時中だぜ、クラウドズ？」

「向こうはボク達が動かぬ限り動けないだろう。
なら、今日ぐらいはゆるりと過ごしても構わないだろう？」

小さくブロストは息を吐いた。
言う通りだし、逆らう気も起きなかった。

リンデンステッド2世の婚約者、クレテアと、ブロストの妻、シル
リアは姉妹なのだ。

元々ブロストが先に結婚していて、後にクレテアとリンデンステッ
ド2世を引き合わせた。

だからリンデンステッド2世とブロストとは兄弟みたいなモノなの
だ。その兄弟同士、茶を飲む事等最近は無くなっていた。

今後はその機会もあるまい。次は酒になるだろう。やけ酒か、勝利の美酒か。

最後の茶を楽しむのであれば、ブロストはそれを受けるのも悪くないと思っていた。

「甘い人間」

6月19日、報告が入った。

王城に集結していた偽王軍の一部がルフトヘイクに向け進発した、というモノだった。

すぐさまアクセルは軍議を招集した。

軍議だから、今回は17人の諸侯の内10人程度が集まっている。

対して、爵位を持たないライレントや軍に無関係のセスミレイユの様なモノは出席していない。

軍の関係者のみを、招集していた。

「指揮官はノルクオーク侯ガインと聞いています。

先鋒は、シエルハット子爵ノクライン」

参謀を務めるのはウイスケルだ。

父ウィルムントやその義弟であるオギュストは、参謀の様な事よりも戦場を指揮する方に適性がある。

「ガインは役に立たんでしょなあ。

警戒するのであれば、ノクラインの方ですぞ殿下」

ウィルムントが進言する。

何故、とアクセルが問う。

「陣を固められれば、並大抵の押し合いでは負けない男です。

引き時もわかっておりますし、この軍を叩く事は難しいでしょう」

「良い策は無いのか？」

「軍学に秀でておりますから、伏兵、奇襲、火計の類で不意を突くのは難しいですな。」

陣が堅いので、真っ向から蹴散らすのも難しい。

ノクライン本人に隙と言える隙は無いでしょう」

話を聞いて、アクセルは卓の上に置かれた地形図を見回した。

偽王軍は北からやって来る。真っ直ぐ南に下れば深い森を通る事になるので、迂回して西から草原正面に入る恰好だ。

この迂回路を奇襲できれば良いのだが、森には妖魔が出る。奇襲するのは難しいだろう。

ならば、この草原で向かい合うしか無い。

偽王軍の駒を動かした。先鋒のノクライン、それから指揮官のガインと、他の諸侯達。

「周囲の諸侯から、削ぎ落としてはどうでしょうか」

その駒をウイスケルが指さす。

アクセルも同感であり、頷いた。

「伏兵を置いて、側面を挟撃しよう。」

北にウィルムント大將軍が指揮する3個中隊を、南にオギュスト將軍の指揮する2個中隊を伏せる。

これらは第3旅団から選抜され、第1旅団と第2旅団の2個旅団6千を本軍とし、私が総指揮を執る。

まずオギュスト將軍が側面前方を攻撃、後にウィルムント大將軍が側面後方を攻撃し、乱れた所を本軍が一気に押し切る」

「ノクラインを破る事はできないでしょうが、これで諸侯の軍は乱

れるでしょうね。

一旦退いて態勢を立て直さざるを得ないと思います」

「それがどこまで退くかだが……。

森の辺りまで退くか？」

「森まで退けば、それは撤退するという事です。しかし、態勢を立て直す安全な場所は他にありません。

そうなれば首都ハイオウムまで引き上げるでしょう、どうせなら。

この間に他の地域を制圧して行つてはどうでしょうか？」

「そうしよう」

アクセルが頷くと、諸侯も頷いた。

統制は取れている。遠慮無く発言する様に言つてはあるが、要らない事は言わなかった。

ただ、軍議としては物足りない。諸侯がもう少し意見を戦わせて、その後に決定を下すべきだ、とアクセルは思うのだ。

皆が皆聡明だから、要らぬ意見を言いたがらないのかも知れない。

軍議は、とりあえず終わつておいた。

まだ偽王軍が戦場に到着するには時間があり、その間も軍議を開くつもりだから、今日の軍議はそこまで重要なモノではなかった。

「汚れ役が、必要だと思う」

アクセルはこれを、オギュストに相談した。

オギュストは普段リシスに似て、あっけらかんとした好漢であり、アクセルは彼を信頼しているのだ。

また、ウィルムントよりも多少は謀略に通じてもいる。

「汚れ役と言つても、難しいーねえ。」

ただでさえ数が少ないから、真つ当な汚れ役ができる様な人間は、すぐく限られる。

そうついた人間は支柱に回したいからねえ」

オギュストは45になる筈なのだが、喋り口は軽快である。

アクセルよりも軽快なのではないか、と思う程だ。

若い頃は社交界で名を馳せた、という噂もまるきり嘘ではあるまい。それに気心が知れている仲だから、互いに敬語を使う事は無かった。

「心当たりはないかな、オギュスト？」

「オレ達の軍の中では無いねえ。」

ただそこを逸するなら、心当たりが無い訳でも無い」

「心当たりとは？」

「セスミレイユ猊下」

思わず、アクセルは吹き出した。

オギュストもそれを見て、戯けた様に肩を竦める。

だが、互いに大真面目な話である事はわかっていた。

だからこそ、こんな風な態度を取れるのだった。

「保護下に在るとは言つても、国外の要人だぞ？」

そんな人間を軍議の場に置いて、発言権を与えて、どうする」

「まーあ、それが問題だよねえ。」

ただその問題を度外視すれば、打って付けの人材だと言うのも確かな事だよ。

皆まだ彼女が子供だって事はわかってるし、でも聡明だって事もわかってる。

反発したくても、彼女相手に反発する様な人間はいない、だろう？」

「政治的に有り得ない。

教皇なんだぞ、オギュスト。その彼女が軍議に出て、命を奪う話に参加するんだ。

こういった事は彼女の政治的地位を弱める可能性がある」

「んー」

オギュストは考え込む様に、腕を組む。

考えたところで、新しい人材を捜すより他に無いという事は目に見えているのだ。

だから、アクセルはライレント辺りを参謀として起用する事を、考え始めていた。

「じゃあ、軍議の外でも良いんじゃないかな？」

しかし、オギュストは当初の考えを捨てていなかった。

軍議ではなく、その外で発言させれば良い、と言ってきた。

「殿下が、まずヘーリア団長に軍略をお話しすれば良い。

戦闘が起こるから、こうこうこういう事になる、これを理解して欲しい、と。

そして同時に、猊下にそこで感じた意見を他の諸侯に訊く様に、

と言いつけておく。

そうすれば比較的良好な関係のままで、空気を引き締める事ができるんじゃないかなあ？」

オギュストは軽く言つてのけるが、実際はそこまで簡単な話ではない。

まずは部外者であるセスミレイユに軍略を話す、という事を諸侯に納得させなければならぬ。

更にその後で、セスミレイユに役どころの重要性を説いて、これも納得してもらわなければならぬ。

その上で、有効な動きをしてもらわなければならぬのだ。

難しい話だ。

しかし、他に手が無いのも確かな事だった。

手が無い事を無理な話とするなら、難しい話はまだ可能性があるだけ、マシか。

「わかった、やってみよう。

謀略の方は私に任せて、オギュストは軍の訓練を頼まれてくれな
いかな？」

伏兵部隊には、尽力してもらわなければならぬだろうからな」

「承知しました。

では殿下、また後ほど」

で、1時間後。

アクセルはヘイリアに話を通しているのだが、厳しい目つきで睨まれている。

横で優しく微笑んでいるセスミレイユとの温度差が、凄まじい。

「猊下を軍略に利用するつもりですか、アクセル殿下」

敬語で、凜としたその声色は決して不快なモノではないのだが。しかし状況が状況なので、アクセルは息が詰まる様な思いをしていた。

いや、前方からの空気だけならば、まだ吐き出すだけの心意気が残っていただろう。

問題は、後ろからもそういった空気を感じる事だ。

近衛隊長であり、アクセルの身辺警護を務めるリリスが、ヘーリアを睨み付けているのである。

「猊下にもしもの事があつてはなりません。

それを、殿下は危惧しておられるのです」

「もしもの事が起こる様な兆候があるなら、その時は私が猊下の御身を責任を持って帝国に送り届けます。

貴方達にそこまでの事を要求するつもりはありません」

「ですが……」

「しかし」

主人の代わりに、2人の間で口論が始まる。

矛先が反れた事で、ようやくアクセルは息をつく事ができた。

であるから、手を挙げて、リリスを制する。

それを受けてセスミレイユもまた、ヘーリアを制した。

「アクセル様、少し私の昔話を聞いて頂けますか？
この様に殺伐とした雰囲気は、そう長引かせる訳にはいきませんから」

チラリ、とセスマレイユが上目遣いでヘーリアを見やった。
ヘーリアが、水を汲みに行った。
リシスが続いていく。

それで場には2人だけとなった。
どうやら、あまり人に聞かれたくない話の様だった。

「私はね。アクセル様。

元々クローツェンヘイムで生まれた人間ではないの」

2人だけであるから、無礼講という事らしい。
アクセルも深く頷く事で、それを了承した。

「巡礼でやってきた神父と、元々クローツェンヘイムに住んでいた修道女がいた。

2人はクローツェンヘイムを出て、皇都で暮らす事を選んだわ。
だって寒いし、妖魔だらけの場所で、愛する2人が住まうには余りに無粋な場所だったんだもの。

先代の教皇様も、それをお許し下さったわ」

「ふむ、成る程」

「2人は愛し合って、2人の子供を産んだわ。

1人目は男の子。それから5年程して、2人目。私ね」

兄。1人目は男の子という言葉聞いて、僅かにアクセルは片眉ひ

くつかせた。

「けれど幸せな生活は長く続かなかった。

クローツェンヘイムへ行つて帰つてきた神父と、クローツェンヘイムからやってきた修道女。

その2人が愛し合つて子供を産んだんだから。面白くない人間がいたわ」

「神聖オルバドス帝国、皇帝か」

「そう」

何とはなく、セスミレイユは微笑んでいた。

「2人を面白く思わなかった皇帝は、2人とその子供を捕らえた。適当な理由を付けて 確か、国家反逆罪と、転覆罪だったかしら 皇帝は2人を処刑した。

2人の子供の内、物心が付いていた兄の方は小姓にしたのだけだ。ど。

すぐに殴り殺してしまつて、私だけが1人残されたんですって」

アクセルは、息を呑んだ。

事も無げに話しているが、それは壮絶な人生だった。

幼い頃に政争で遠ざけられたアクセルよりも、ずっと、だ。

「それで皇帝は厄介払いしようとして、自分の娘を1人付けたの。庶子で、母親は既に死んでいるから、外交にも使えそうにないその子を。

ヘーリアという、名だけを与えられた子。

私よりも幾つか年上で、それから彼女は私の世話をずっと見てく

れた」

「……」

「私達がクローツエンヘイムに流されると、教皇様達は私達を暖かく迎えてくれた。

一緒に食事をしたり、寝てくれたり。

病気に倒れられてからは、私に説法をして下さって、それで私が教皇様の跡を継ぐ事になったわ。

今から5年程前の話」

当時、彼女は何歳だったのだろうか。

アクセルは少し考える。ヘーリアに聞いた事があったが、彼女にも詳しい歳はわからない様だ。

多分10歳から12歳という話だった。5年前となると、5歳から7歳。それで教皇の座を継いだ。

周りは、それに反論する事無く、彼女を教皇として迎えた。

教皇という権威が地に落ちた事を、何よりも示していた。

「世間的に見れば、私は幼いかも知れない。

でも、幼い私が何で教皇になれたのかとか、そういう事を考えれば。

大人達が考える事は、わかるのよ？」

「それで、君は。

一体、何をしたいんだ？」

アクセルが神妙な面持ちで訊ねた。

それまで笑っていたセスミレイユが、笑顔を消した。

深い闇の色が、そこにはあった。

「復讐なんか望んでない。

そんな事をしたら、教皇様に申し訳が立たない。

私がしたいのは、皇帝がしていた様な政治手腕の排斥よ」

「できるのか、君に。

確たる権力のある国では、権力の格差があるんだぞ」

「してみせるのよ、私が。

奇跡を扱えるのは浄火教だけじゃないって事を、世に示さなきゃ。

その為に私は貴方を利用する。効率良く貴方を利用する為には、私も手段を選ばないわ」

セスミレイユが手を差し出した。

誘っている様に、アクセルには見えた。だからアクセルはその誘いを受け取る。

手を取り、そして軽く口づける。

だが、そこで終わった。

「こちらも、君がオレを利用してくれるのを歓迎しよう。

だからこそ、互いにフェアな利害関係のみを築こうじゃないか。

どちらかがどちらかの言いなりになるなんて事じゃなく、どちらの為に成る道を」

浮かべるのは、笑い損ねたかのような表情。

手を優しく離される。その手を見て、セスミレイユは呟いた。

「 甘い人」

「甘くて結構。」

道とは誰かが歩む為の道でなければならず、誰もが歩む道というのはより大きく、より便利で、より安全で、より明瞭な道であるべきだ。

獣道。急な坂道。暗い道。狭小な道。そんな道を歩みたがる人間は少ない。

誰もが歩む道を示す事こそが、王道なんだよ」

セスミレイユが小さく息を吐いた。

しかし場が静かなので、その吐息はアクセルの耳にも確かに聞こえた。

「人として、どうやら貴方は私より純粹みたいね。」

王の素質というのが何なのか、私にはわからないけれど、貴方が見せてくれるのなら……。

それはそれで、幸いな事なのかも知れない」

「進軍する偽王軍」

首都ハイオウムを進発し、3日が過ぎた。

目的の森が見えてきて、俄に軍勢の士気も整ってきた。

この辺りになると妖魔が出没する様になり、否応無しに兵士達は気を張りつめなくてはならないからだ。

ノクラインが、この時よく動いていた。

先鋒として斥候を放ち、地形を調べさせてから進軍経路を明確に諸将に説明するのだ。

大將ガインは最初ノクラインをあまり信用していなかったが、この働きによってノクラインを信用する様になっていた。

「敵軍は伏兵を用意していると思います」

森を迂回しての進軍が完了した頃、ノクラインが進言してきた。

ここ数日警戒状態が続き、軍議が開かれていなかったので少し気を緩ませていたガインだったが、ノクラインの言葉には背筋を伸ばした。

「火計ではなく、伏兵か」

「主戦場は草原です。兵士を伏せる事はそう難しくありません。

今は軍議の場ではないので詳細な陣容については述べませんが、これを考慮すべきです」

「うむ、わかった」

ノクラインが去って行く。ノクラインには尖兵として、あらゆる事

を調べてもらっていた。
他の諸侯にはそれぞれ、輜重、兵達の損害の調査、調練等を任せている。

主戦場まであと2日、という地点で、これらの諸侯を招集し、軍議を開いた。

5人ばかりの小さな軍議である。

「しかし、我々は遠征軍ですぞ。

ハイオウムから補給を受けているとはいえ、それがこの先も確実なモノであるという保証はありません」

輜重を担当しているクリストフから、ノクラインの伏兵を警戒した布陣について反対の声が上がった。

当然出るだろう意見だった。ガインもそこが気に掛かっており、そうでなければノクラインの立案を権限によって採用していた。

しばし、諸侯とノクラインで討論させるべきだと思い、ガインは黙り込む。

「しかし敵軍は我が軍を1千も上回る多勢です。

伏兵で攪乱され、陣容が乱れれば、一気に包み込む事ができる大軍なのですよ」

「それは敵が1度の衝突で勝敗を決しようとしていれば、の話だろう。」

もしも伏兵を伏せたまま、輜重部隊を襲撃されれば、我が軍はこの草原で孤立する事になる。

敵が早期決戦を挑むという保証は？」

「斥候から、アクセル殿下を大将とした軍が2個旅団が打って出るとの報告を受けております。」

アクセル殿下の軍は3個旅団で編制されており、この軍の殆どを導入すると言うのであれば、これは早期決戦を挑むという事に他なりません」

「しかしアクセル殿下に実戦での指揮経験は無いではないか。」

ベシュレスタ公かノストラント侯が指揮するのであれば、早期決戦は考えられるが。

本軍がハツタリで、ベシュレスタ公とノストラント侯が遊撃を仕掛けてくる可能性もあるのではないか」

成る程、ガインは2人の主張の大方を把握する。

そこで1度ガインが介入し、2人の主張をまとめた。

「双方共に、ベシュレスタ公もしくはノストラント侯の奇襲があつて然るべき、と考えている。」

それをノクラインは伏兵と考え、クリストフは遊撃部隊であると考えている。

そついう訳だな」

「はっ」

「ノクライン、クリストフ。双方を警戒する布陣は無いのか？」

「ありません、閣下。」

伏兵を警戒すれば陣を堅くする必要があり、遊撃を警戒するのなら散開する必要があるからです。

2つに1つ、そして外せば敵軍が決戦を仕掛けてきましょう」

「ふむ……」

試しにノクライン、クリストフ以外の諸侯を見回した。
だがいずれも勇猛な人間ではないから、自分から意見を言おうとはしない。

そして2人には2人共に自らが絶対である、という根拠があるのだ。
であるなら、これを決めるのはガインを置いて他にいなかった。

「では、伏兵と遊撃とを警戒した散開陣形を取る」

だが、どちらかを選ぶという事は、ガインにはできなかった。

「しかし、閣下」

「歩兵部隊を前面に配置し、騎馬部隊を側面に配置しよう。
それで歩兵による奇襲は防げるだろう。まさか騎馬部隊を伏せる事はできない。」

騎馬部隊を側面に配置すれば、遊撃にも対処できる筈だ」

「お見事な布陣であります」

クリストフは、それで納得した様だった。

ノクラインは納得できないらしく、何度か再考を進言したが、最後には他の諸侯に取りなされ、黙り込んでしまった。
だが、他に話し合う事も無いだろう。

今度の戦場では、伏兵と遊撃とを警戒すれば良いのだから。

2日後。草原に偽王軍が姿を見せた。

前面に歩兵を配置し、側面後方には騎馬部隊を配置した形だ。すぐにどうこうしようという布陣には見えず、何かを警戒している様だった。

伏兵か。しかしそれにしては、おかしい配置だった。

伏兵を警戒するのであれば、もう少し密集した陣を布く筈だ。

騎馬部隊は若干散開気味で、これは遊撃を警戒している様に見える。いや、正確に言えば、伏兵を警戒して遊撃に対処した、なり損ないの布陣だった。

「こちらの軍に騎馬部隊がいる、という考慮をしていないのでしょうか。」

あれだけ散開しては、1度の騎馬部隊の突撃で歩兵が蹴散らされるのですが」

アクセルの下で旅団長を務める事になったのは、第1旅団長のウイスケルと、第2旅団長のアルセイアだった。

第3旅団長、即ち留守部隊にはダングオン侯ソリユアートを配置してあった。

昨日の夜から、ウィルムントとオギュストは伏兵として配置してある。

特に参謀としての役目を、ウイスケルは果たしている。

アルセイアでは心許ないと思った人事だったのだが、戦場に入るとアルセイアは惚けた顔をしなくなっていた。

「騎馬部隊は確かに強力な戦力ですが、助走を付けなければ十分な威力は発揮できません。」

特に密着戦では剣兵程度にしか有利に戦えない筈なのですが」

「どうやら私を軽んじている様だな。

ウィルムント大將軍とオギュスト將軍が、最終的には勝負を決すると思っている。

まあ、それ以外は大した存在と思われていないなら、貴公達も軽んじたという事だが」

アクセルがマントを翻し、2人に向き直った。

アクセルは深紅のマントに、鉄鎧を纏っている。今はまだ兜を被っていないが、フルフェイスを着用する予定だった。

ウイスケル、アルセイア。両名共に、顔を強張らせている。

「ハッハッハッハッ、何を縮こまつてる2人とも。

2人は初陣という訳ではないのだから、そこまで固くなる事はあるまい」

ウイスケルの腹をガシガシと殴り、アルセイアの背をガチャガチャと叩いた。

それで、2人は苦い笑いを浮かべる。

「ウイスケル、初陣の私に何か言う事は無いのか？

退却のタイミングを間違えるなどか、伏兵のタイミングの確認だとか、うん？」

「は、はあ……」

「アルセイアも私に告げる事は無いのか？

必ず御身をお守りします、でも、この戦の勝利を殿下に捧げます、でも」

「ええええとえとそうですねえ……」

2人が悩み始めたのを見て、両手の甲で、アクセルは2人の胸板を叩いた。

「戦局を統括するのは、私の役目だ。

貴公等は、目の前の敵を蹴散らす事を考えていれば良い。

降伏宣告の権限も停戦の権限も、私にしか無いんだ。

貴公等は、突き進め。私の言う通りに動け。聖殿の奇跡を信じている。

貴公等の責務は、それだけだ」

「はっ」

2人が朗らかな笑みを浮かべた。その後、確かな決意を秘めた顔つきに変わる。

出撃を命じる。2人は敬礼を取った後、踵を返し、それぞれの馬に騎乗して持ち場へと走り去って行った。

1人になる。だがすぐに、リリスが側にやってきた。後ろには、百数人の近衛隊を率いている。

「さあ、出陣だ」

「はい」

リリスが、フルフェイスの兜を差し出す。

受け取り、装着する。まず顔前面を覆うマスクを付けてから、頭部を完全に覆う兜を付ける。

そつする事で、通常の鉄仮面よりも若干広い視界を保てる。目の防

御が薄くなるが、アクセルは矢が届く程前線に出るつもりは無いから、問題は無かった。

次に近衛隊の人間によって、馬が引かれてきた。

重種馬で、見栄えの良い馬ではないが、甲冑を着た100kgを超える人間を半日乗せていても、潰れる事の無い馬種だ。

本来ならば王族という事もあり、中間種か軽種馬を使うのが妥当だが、ここでは撤退をする必要も無いと思い、この馬種を選んでいた。尤も、これを宛がったオギュストからしてみれば、アクセルが万が一にも戦場に出ない様にといい軈なのかも知れないが。

甲冑を着ての騎乗になるので、近衛隊に手伝ってもらう。騎乗すると、後は腰に差した剣を引き抜くだけだった。

「偽王軍5千、蹴散らすぞッ！！
全軍進めエッ！！」

「ルフトヘイクの戦い」

アクセル軍は旅団毎で布陣した。

前衛は弓兵。まずは矢雨を降り注がせ、歩兵を少しでも削る事だった。

矢を射掛けさせると、すぐに効果は出始めた。敵からの応射もあったが、数の桁が違った。

ハイオウムからの遠征軍なのだ。重装歩兵は少なく、軽装歩兵ばかりで、木製の盾を持たせてどうにか防いでいる有様だった。

そこでジツとしている訳にはいくまい、とアクセルは内心で敵軍に囁いた。

使われている弓はベシユレスタ領で作られた弓だ。硬くしなりの良い、弓に適した木を使っている。

また長弓と複合弓とを編制しており、矢が降り注ぐ範囲は極めて広い。特に複合弓の威力は凄まじく、この範囲に入ると敵はすぐさま駆け抜けなければなくなる。

故に、あまり敵は考える間も与えられず、突出する事になった。

それを見て、ウイスケルとアルセイアが鉦を打たせる。3度。

これを合図に、サツと弓兵が後ろに下がっていく。代わりに現れるのが、騎馬隊だった。

騎馬隊が突っ込む。その後に、歩兵が続いた。喚声が上がリ、本格的な戦闘が始まる。

偽王軍の歩兵はパイクを構えている人間もいたが、そんな人間は盾を構えられない為、射撃で多くが倒れており、騎馬隊を無力化する程は残っていなかった。

その隙を騎馬隊が突っ込んだのだ。瞬く間に陣が割られて、騎馬隊

は向こうへ突き抜けた。

そこで、アクセルが近衛隊を駆けさせ、前線で鳴矢を放たせた。鏃に特殊な加工を施し、甲高い音を鳴らす矢だ。これを使うと遠い所でも報せる事ができる。

鳴矢を合図に、まず南からオギユストの伏兵が現れる。草に擬態する鎧を着させていたから、騎馬隊の横に突然湧いたかの様に姿を現した。

騎馬隊を相手に、凄まじい奮闘を始める。特に、大太刀を使う男の戦いぶりは凄まじかった。馬の首を飛ばしながら、次々と騎兵を引きずり下ろしていくのである。

中央を突破した騎馬隊と伏兵の板挟みとなり、右翼の騎馬隊が潰れ始める。

慌てた様に、左翼の騎馬隊が動いて中央のアクセル軍騎馬隊を遊撃しようとする。

そこで、2つ目の鳴矢。北からウィルムントの指揮する伏兵が現れ、騎馬隊を背後から襲った。

大斧を持った男が、一薙ぎで馬3頭は薙ぎ殺す。その分隙も大きいのだが、周りの兵士がそれをカバーして、槍等で馬上の兵を貫いていた。

乱戦に陥る。しかし背後左右前面から襲われている偽王軍は、既に陣の形を成していない。

潰走すらできないまま、歩兵はじわりじわりと数を減らして行く。騎馬隊は散り散りになり、突っ切られ、潰乱し、瞬く間に潰走した。

堪らなくなり、歩兵が音を上げた。白旗を掲げて、降伏を宣言したのである。

戦が始まって1時間。騎馬1千の内7百程が潰走し、歩兵4千は1千を削ったところで、降伏。

素晴らしい戦果だった。

「射撃で主導権を握り、浮き足立った敵を叩き潰すのは、容易いな」
血が煮えたぎるのを感じながら、アクセルはリシスに声を掛けた。
リシスは少し、緊張した面持ちだった。蒼白とした顔色をしている。
30分程が経った時に、後ろで吐いているのを見た。

どうやら、リシスの初陣はあまり心地の良いモノではなかったらしい。

満足のいく応えを返してくれる訳でも無く、仕方なくアクセルはやってきた伝令の報告を聞く事にした。

「連隊長以上の敵将はいずれも逃走した模様です。

大隊長2名、中隊長12名を捕縛致しました。以下の隊長の数は不明です」

「よし。武装を解除させ、鎧を脱がせた者から捕虜として連行しろ。
大隊長、中隊長はそれぞれ1人ずつ、別々に連行するんだ」

「はっ」

事後処理に移る。事後処理は地味な作業で、その割りに戦闘以上にミスの許されない作業だった。

しかし、事前にこれらの対処はウィルムント達と話し合っている。
円滑に事は進むだろう。

それから少しして、ウィルムントとオギュストが帰還するという報告を受けた。

アクセルは2人の出迎えをするべく、本陣の入り口に向かった。

数分して、馬に乗った2人が帰ってくる。馬に乗って出撃した訳ではないから、調達したのだろう。

「殿下、お見事な采配でございました!」

2人が馬から降りると、オギュストが大袈裟に駆け寄ってきて、アケセルの肩を叩いた。

オギュストの体は、血生臭い。腰に帯びている数振りの大太刀が、その臭いの元だろう。

あの馬首を斬り飛ばしていた大太刀の男は、このオギュストだったのである。

「オギュスト將軍もよく働いてくれた。

剣聖と名高いその剣腕。このような場所からでも、すぐにそれとわかった」

「ははっ、ありがたきお言葉!」

オギュストが跪く。

それから、ウィルムントに向き直った。

「初陣での大勝、おめでとうございます殿下」

「ウィルムント大將軍の奮闘ぶり、見事だった。

アレで騎馬隊の潰走は決まった様なモノだ。

今回の戦功一位である事は、疑い無いだろう」

「勿体ないお言葉です」

ウィルムントも跪いた。

それedyouやく、2人に労すべき言葉は果たせた、とアクセルは思った。

気になる事を、聞き始める。

「伏兵部隊の被害は？」

「我が部隊では54名が死亡、負傷者は32名です」

「我が部隊は、22名が死亡。負傷者は56」

まずはオギュスト。それからウィルムントだった。

流石に、最初の伏兵となった部隊であるオギュストの部隊には、大きな被害が出ていた。

部隊の6分の1を超える死者を出している。壊滅的と言える程ではないが、中規模被害と言えるだろう。

「参加した兵士には、褒美を取らせよう。

死亡した兵士の遺族には、他よりも多くの見舞金を与える様に」

「承知致しました」

それから少し、雑務の話をした。

王族がする事では無い、と言われて、仕方なく後の事は2人に任せる事にした。

本陣の宿舎に帰り、そこで兜を外した。

「戦勝、おめでとうございます」

それedyouやく一息つけたのだが、突然宿舎に誰かが入ってきた。

誰かと思い見上げると、成る程。

宿舎に無断で入ってきてても、何の問題も無い相手だった。

「ありがとうございます、教皇猊下」

セスミレイユだった。

入ってきた時に、ヘーリアの姿も後ろに見えた。

「どうにも近衛隊長様がまいつている様でしたから、代わりにヘーリアを立てようと思ひまして。

足を運ばせて頂きました」

「リシスは猊下の元へ？」

「はい、調子が優れないので、と。

極度の緊張が血の臭いで増長されたのでしょうか。

少し横になれば、心配は無いでしょうけれど、彼女程の手練れとなると少ないですからね」

「お心遣い感謝致します」

2人きりだが、陣営の中という事もあり敬語を使っていた。

気遣いなのか計略なのかわからない態度だったが、今の内にセスミレイユと面会するのは、アクセルとしても悪い事では無かった。

どうやら長居をするつもりらしいので、彼女に椅子を出してやる。

セスミレイユは配下の神官達を率い、医療関係者として協力を願っていた。

敵味方を問わず、治療するのだそうだ。アクセル軍にも衛生部隊はあるが、神官達ほど練度の高い医療部隊ではない。

であるから提案を受け入れ、セスミレイユも軍に同行していた。
セスミレイユがここにいるとなれば、被害の詳細な状況を伝えに来る人間と話をできるだろう、と思ったのだ。

「と、言いますけれど。」

でも私は少し血が苦手です、皆さんの様にお手伝いはできませんから。

皆さんの足手まといにならない様に、お邪魔しただけなんです」

「おや。それではごゆるりと。」

貴方への軍事情報の伝達は既に許可していますし、この場が血生臭くなる事は無いでしょう」

「そうさせて頂きます」

ふむ、可愛らしい所もあるモノだった。

アクセルは思い、茶を用意する事にした。

鈴を鳴らすと、すぐに従者がやってきた。

「茶を頼めるかな？」

「はい」

入ってきたのは、シスターだった。

服装こそは従者のそれだが、首からエルザムを掛けている。

セスミレイユはそれを見て少し驚いた様で、アクセルを見やった。

「修道士時代の同士なんですよ。」

フレシア様が使わせてくれたので、従者として従えています」

彼女はトーティと言うらしい。洗礼名で、修道士ではなくなったが、そちらの名で通しているのだそうだ。

明るいクリーム色の髪をボーイッシュに切りそろえており、歳はアクセルとそう変わらない様だ。

「同志ウィンツがアクセル殿下だったなんて、驚きました。それにセスミレイユ猊下ともお会いできるなんて……」

言いながら、トーティはカップに茶を入れる。

ただし1つだけ。それもトーティが飲んでしまった。

しばし待ってから、アクセルはそのカップに茶を入れる様に命じた。セスミレイユには別のカップに注いだモノを差し出した。

「毒見ですか？」

「一応、暗殺の可能性を考慮に入れていますから。」

このような事を、修道院時代の同志にさせるのは心苦しいのですが、彼女程信頼できる人間は他にいません」

言って、アクセルはトーティにチップを渡してから下がらせた。せめてもの気持ちなのだろう。

しばらくの間、2人は茶を飲み交わしていたが、報告の伝令が入ってくる事は少なかった。

既に書類としてまとめたモノを、1度に幾つも持ってくるのだ。それらに目を通し、気になった所をアクセルは伝令に伝えていく。

「本当に、そうしていると16歳の少年とは思えませんね」

言われ、アクセルは少しむせた。

11、2歳の彼女が、何を言うのか、と思ったのである。

「リクセニア王国国王の正統後継者として、やらなければならない事です。」

怠れば、ウィルムントやグリーズブの様な人間達は、私を見限るでしょう」

「そうまでして、何故国王の座に執着するのですか？」

「民の為ですよ。」

「国が乱れれば最終的には民が傷付くのですから、それを止めたいんです」

ほぼ即答に近い返答。

上っ面の返答である、とセスミレイユは受け取った様だった。

そして、それ以上突っ込む事も無く、陣営は夜を迎えた。

第2章終了時 登場人物一覧（前書き）

見方は前回と同じです。

新たに登場した人物なので、前回登場した人物は載せてません。
また、リクセニア王国勢力が二分したので、分けてあります。

第2章終了時 登場人物一覧

新たな登場人物紹介

Ⅱアクセル軍Ⅱ

ウィルムント・クラス・ジークバウⅡベシュレスタ

62歳 リクセニア王国軍大將軍、ベシュレスタ公爵

王国軍の軍事統帥権を持つ大將軍の地位にある、公爵。天傑、斧聖等の異名を数多く持つ歴戦の雄。

カートス継承戦争にも従軍しており、この時の武功が元で大將軍の地位に就いている。

敬虔な聖殿教会信徒であり、セスミレイユを信奉している。

ウイスケル・ゼロントⅡエセル

28歳 エセル伯爵

ウィルムントの息子であり長男だが、妾の子なので家を継げず、ゼロント家に養子入りする。

軍事の才は父に匹敵し、特に電撃戦においては父をも凌ぐと言われている。

ライレント・ズイン・ジークバウ

24歳 公爵家嫡男

ウィルムントの息子であり嫡男（次期当主）。家族とは異なり、彼自身に軍事の才能は無い。

また穏やかな性格の持ち主で、周囲をなだめる事が多い。父と同じく敬虔な聖殿教会信徒。

アルセイア・クリーツⅡベネディット

19歳 ベネディット侯爵

父であるベネディット侯爵を討ち、アクセルの下に参じた女傑。

アクセルの事を密か(?)に慕っている様だが、実は部下から百人単位で慕われている。

グリーズブ・オーバ・フロンツIIジェリッド

76歳 ジェリッド侯爵

長老。宰相、財務大臣を歴任した事からもわかる様に、アクセル軍では珍しい内政の男。

アクセルは彼に苦手意識を持っており、近寄らない様にしている。

ダングオン侯ソリュアート

51歳 ダングオン侯爵

再編されるまで第3旅団を任されていた侯爵。ディフェンスに定評がある。

トーティ

20歳 聖殿教会シスター

聖エフィカ修道院の元シスター。アクセルの正体を知らなかったが、フレシアの命で従者となる。

毒見までこなしているが、アクセルや国の為ならば、と割り切っている。

IIリンデンステッド2世軍II

ブリンドビル公エイルバー

58歳 リクセニア王国宰相、ブリンドビル公爵

クラウズの後見人を務めている公爵。宰相の座を篡奪し、新たな宰相となった。

昔からクラウズにあれこれと仕込んできたのは彼である。が、そこに私利私欲は無い様だ。

ブロスト・フェル・ファリオンⅡボルクツド

21歳　ボルクツド侯爵

クラウズの親友であり、未来の義兄。侯爵であり、またリンデンス
テッド2世軍では將軍を務める。

元は社交界で有名だった貴公子で、特に弓術の腕ではリクセニアで
は比肩する人間がいない。

幼い頃からクラウズの護衛を務めた。妻帯者。

ノルクオーク侯ガイン

64歳　ノルクオーク侯爵

既に引退した元軍人。引退する前には將軍を務めており、リンデン
ステッド2世軍でもそれに準ずる。

ノクライン・ルード・リードⅡシエルハット

24歳　シエルハット子爵

ウィルムントの配下だった軍人。若いが軍学に秀で、ウィルムント
から隙無しと称される勇将。

だがそれ故に才気走った所がある。

クリストフ

37歳　ファリッツ伯爵

輜重を担当していた軍人。ある程度の軍学があるが、恐らくガイン
と同レベル。

バイユバーク公爵ヴィーイーノ

54歳　リクセニア王国元宰相

ウェンツェハラウト1世の治世の晩期に宰相を勤め上げた公爵。

遺言を発表するが、それを理由に捕らえられ、現在は王都に軟禁されている。

シルリア

20歳 プロストの妻

プロストの妻である女性。クレテアの姉で、後宮に住んでいる。

クレテア

17歳 リンデンステッド2世の婚約者

シルリアの妹。まだ婚約者ではあるが、既に後宮に住んでいる。

〓 神聖オルバドス帝国 〓

クエツツエンカート

63歳 神聖オルバドス帝国陸軍元帥

軍事統帥権を持っている陸軍の元帥。クーデターを起こし、オルバドスの実権を掌握した。

非常に優秀な軍人だが、それ以上に優秀な政治家で、同盟解消後リクセニアと戦争に陥っていなかったのは彼の手腕による。

第2章～第3章 年表（前書き）

通称物語に起こせなかった時系列。

第2章〜第3章 年表

大陸歴1545年6月23日

ルフトヘイクの戦いに勝利したアクセル軍が、テンゼンスト城下町へ凱旋した。

歩兵戦力3千を捕虜とした、この大勝の報せは城下町をにぎわせ、情勢にも少なからぬ影響を与えた。

同年同月25日

アクセルは軍を再編し、第3旅団がノストラント侯オギュスト將軍の指揮によって、ルフトヘイクを進発。

南進したこの軍は、リンデンステッド2世を支持する貴族への武力制圧を行うモノであった。

ノストラント侯の指揮する第3旅団が進軍してくる。この報せを聞いた多くの貴族は降伏した。

同年同月28日

アクセル軍第3旅団とウェッソバウテ侯マルリオの間で戦闘が生じる。ウェッソバウテの戦いである。

兵力で勝る第3旅団はウェッソバウテ侯の軍を悉く打ち破り、キシユテンストイク城を攻囲、翌月陥落。

同年7月1日

神聖オルバドス帝国とクリングス大公国の間で停戦交渉が完了。

即日発効され、長年小競り合いを続けてきた両国の緊張状態は雪解ける。

同年同月2日

神聖オルバドス帝国で軟禁されていたジュリアーズ3世が皇都を脱

出す。

クエッツエンカート元帥はジュリアーズ3世の捕縛命令を布告した。

同年同月4日

神聖帝国南のゼクスヘル共和国国境にて、ジュリアーズ3世の身柄を確保。

帝国議会が招集され、ジュリアーズ3世の処刑を求める裁判が開廷する。

同年同月8日

ジステイン王国がリンデンステッド2世の王位継承に疑問を呈する談話を発表。

リンデンステッド2世に説明を求めるが、ハイオウムから以南はアクセルの勢力下にある為、情報は封殺。

7日後にジステインは、第2太子アクセルの王位継承を支持する考えを表明した。

リクセニア戦記 第3章「隻腕隻眼と半身不随」

カートス公国は豊饒な土地を持つ、大陸屈指の農耕国家だった。

不凍港も持っている為、海軍力も有しているが、こちらは半島のアウステン^{II}ガリア諸国によって封じられている現状である。

その様な土地だから、強い軍事力を持たなければたちまち外交的立場を失ってしまうのだ。

現公王バロトロメウ・エルトイーユは、10年前に22歳という若さで公王の位を継承し、今は32になっていた。

彼が継承した時にも、リクセニアから干渉を受けた。賢君と名高かった、ウェンツェハラウト1世による継承戦争だった。

どうにかこれを退ける事はでき、失地も現在は回復した。

だが代わりに、自らの利き腕と片目を失い、”隻腕隻眼の公王”と揶揄される様になってしまった。

その状態で10年もの間、政治を取り仕切る事ができたのは、閣僚達からの心酔に近い信頼があったからである。

リクセニアとの戦争を引き分けに持ち込んだ、という事を高く評価し、国民もエルトイーユを英雄として扱っている。

長年隣国の強国とされていたリクセニアを苦しめた事は、このカートスでは英雄的所業だったのだ。

「ジステインが、アクセルを支持したらしいな」

緑髪をオールバックに撫でつけ、頬のこけた隻眼の男。

隻眼となった目を隠す為、眼帯を付けている。この男こそが、カートス公国公王バロトロメウ・エルトイーユだった。

公王たるマントにも似たコートを着用しているが、その片腕は無く、

残った左腕は杖を持っている。

「はい、閣下」

端的に答える中年の女性。彼女はエルトイーユを長年補佐する、公王補佐官のジェーンだった。

利き腕を失い、隻眼となったエルトイーユの事務能力は著しく低くなっている為、彼女が代わりに書類の目通し、代筆等を担当しているのだ。

また、彼女とは別に、公王の玉座の前に佇んでいる男がいる。

白髪を撫でつけ、立派な顎髭と口髭を蓄えた老人。カートス宰相のベルダインだった。

「我が国は外交的に孤立を深めております」

「余のミスだ。オルバドスが介入してくると踏んでいたのだが。

まさか、教皇の保護でジュリアーズ3世が皇帝権力を停止させられるとは、思っていなかった。

アクセルという男を、嘗めすぎていた」

「致し方ない事でございましょう。

クリングスまでもが、アクセルの動きと連動しようとは思ってもありませんでした。

時期が重なり過ぎたとも言えます。

クリングスが停戦したがっている時期に、アクセルという火種が、教皇という炸薬を手にしたのですから。

炸裂している間に自分達は逃げ延びる。しかし炸裂させる程度の手伝いは、して行く。

アクセルという男に、天運があつたと思えませぬ」

「天運か」

エルトイーユは、自らの眼帯を小突いた。

この目と、利き腕が無くなった事で、エルトイーユはあらゆる限界を感じる様になった。

同時にそれは、カートスの取る事ができる選択を狭めていた。

軍事的に強くならなければいけないのに、エルトイーユがこの有様なので、劇的な軍の強化は為されていない。

視察を行うにも一苦労だ。であるから当然、外交にも色々な差し障りが出ている。

エルトイーユも尽力してはいたが、その都度限界を感じさせられていた。

10年前、自分が公王位を継承する時。この時には、天運に恵まれていなかったのか。

リクセニアを退ける事ができた時には、天運に感謝した筈なのだが。

「ベルダイン。余は、公王を辞すべきだと思っている」

「閣僚は全員一致して、それを拒否するでしょうな」

「何故だ？」

「この時期に閣下が公王を辞す。

最良と言えるこの判断を下す事ができる者が、他にいないからでございます。」

もっと言わせて頂けるのならば、閣下が招いた混乱は閣下自身の手で決着して頂く、と考えてる次第でございまする」

「これは手厳しい」

コンコン、と自らの頭を杖で小突くエルトイーユ。

心酔されているのか、それとも担がれているだけなのか、皆が臆病なだけなのか。

10年公王を務めても尚、エルトイーユには閣僚達の腹の内を読む事ができなかった。

わかっているのは、カートスという国を侵される事を極端に嫌う、という事ぐらいである。

「今後10年の国家戦略。これを練る事ができるのは、やはり閣下しか居られません。」

他の年寄り共では、精々5年先が限度なのです」

「だが、余は失敗したじゃないか」

「失敗と成功等、所詮は局所でしかございません。」

局所とは通過点でございますから、これで判断するのは些か狭量に過ぎるか」と

「余をけなしているのか？」

それとも励ましているのか？」

「言葉通りに受け取っていただければ幸いです」

やはり、腹の内は読めなかった。

仕方なく、コンコン、と小刻みに2度、エルトイーユは地面を叩いた。

それでジェーンが書き取りを始める。

「リンデンステッド2世との盟約により、援軍を派遣する。

25日までに1千を出立させよ。

リクセニア国内の情勢、国軍の練度、アクセル軍の力量を確かめてくる様に」

第3旅団を指揮しているオギュストから、あと10日程でキシュテンストイク城は陥落するだろう、という報告が入った。

それと前後して、ジスティン王国からアクセルの王位継承を支持する声明が発表されている。

アクセルの謀略が実を結んだ様だった。

第3旅団の南進は、それだけを見れば偽王派の多い貴族の制圧に見えただろう。

しかし、実際はジスティンに対する圧力みたいなモノだった。

ルフトヘイクでの大勝を受け、降伏する貴族が多く出て、リンデンステッド2世が絶対的な支持を受けている訳ではない事を報せる。同時に第3旅団の軍事力を見せつけ、偽王軍が敵ではない事を知らしめた。

表ではこれらの事をしながら、裏ではシュバツクの息子オリュバークに圧力を掛ける様言いつけ、ジスティンから支持を引き出す様に仕向けた。

これも時期が上手く重なり、運が良かった。

クリングスとオルバドスの間で停戦が決定し、これによって2国間の戦争を始めさせたジュリアーズ3世は立場を無くした。

己の死を恐れたジュリアーズ3世は亡命を決意した訳だが、これが

失敗して、本格的にジュリアーズ3世は国民からの信頼を失ったのである。

こうなれば最早、オルバドス国内の支持は教皇セスマレイユ1世に傾くだろう。

この状況でクエッツエンカート元帥が皇帝即位を宣言すれば話は別だが、皇帝位の授与は教皇であるセスマレイユの支持が無ければ行いう事はできない。

まさか年端もいかない少女に皇帝を認めさせる訳にもいくまい。ジュリアーズ3世にも劣る、飾り物の皇帝位に他ならないのだから。もしも本当に権力の中枢にいたいのであれば、ここはセスマレイユを掲げて、そして実権は己で握るだろう。

時の流れで、クエッツエンカートは老いる。代わりに、セスマレイユは成熟する。

そうして結局の主導権はセスマレイユが掌握する事になり、やはりここにも問題は生じ得ない。

即ち、アクセルの名声はまた高まったという事である。

幾ら日和見のジステインと云えど、このような国際情勢の中で勝ち馬に乗り遅れる様な事はしたくあるまい。

1週間のリンデンステッド2世の沈黙を以て、ジステインはアクセルの支持を決めた。

「残るは、カートスだけだな」

オギュストからの報せを受けて、アクセルは軍議を開催した。

今日列席しているのは、ウィルムント、ウイスケル、アルセイア、ライレント、グリーズブ、そしてアクセル本人の合計6名だ。

セスマレイユは軍議で決定した事を知らされるし、シュバックとオリュバークは外交で国内を空けていた。

「カートスも、ここで国際情勢の巻き返しを狙い、軍を派遣して来るでしょう。」

これを利用して偽王軍も総力を結集し、決戦を仕掛けて来る筈です」

ウイスケルの意見。アクセルもその読みに同感だった。

問題はその決戦がいつになるかと、何処で行われるのか、という事だ。

「今の状況から言えば、また草原での決戦になるのではないでしょうか。」

我々の勢力圏と敵の勢力圏の境目で、1万以上の兵が一同に集結できる戦場は、限られています。

補給や進軍日程等も考慮しますと、他に無いかと」

アルセイアだ。果たしてそこまで言い切って良いのかどうか、アクセルは悩んでいたが、黙っていたらそうなる可能性は高かった。

また草原での戦いになる。今度は緒戦ではないから、好き勝手に戦場をいじる事ができるだろう。

陥穽（かんせい。落とし穴の事）や火計を仕掛けても良いし、わざわざ野戦に持ち込む事も無く、塹壕を作って攻城兵器で敵軍を押しつぶす事もできるだろう。

戦術的に見れば、まずい戦いではない。

「ですが内政的に見れば話は別ですじゃ。」

カートスに国内深くまで侵入されます。

もし叩き潰したとして、逃走するカートス軍に村を略奪されない可能性等、どれほどでしょうか」

「大体草原に集結するという確たる証拠もあるまい。もしも他に回られ、すれ違う様な事になれば、主導権を握られかねませんな」

危惧は、グリーズブとウィルムントが代弁してくれていた。

偽王軍が草原に来るという保証は無い。また、カートス軍が何をしでかすかもわからないのだ。

リクセニアの中央部であるルフトヘイクでの迎撃は、できるだけ避けておきたかった。

であるなら、とアクセルは戦略を巡らせる。

「ルフトヘイク西のゼフランテ領まで、軍を進めたらどうだろうか。南進している第3旅団も、フィオスト領を抜けば我々に合流できる。」

第1、第2、第3旅団を集結させ、決戦を挑む事ができる」

地図上で、草原を抜けた先、西に真っ直ぐ延びる街道。

この街道の先に、ゼフランテ領があった。

リクセニア西端まで十数kmという位置であり、南進している第3旅団の先にあるフィオスト領と面する場所もある。

この辺りは小貴族が多い土地で、ゼフランテ伯爵とフィオスト侯爵の2人を排する事ができれば、大方はこちらになびくだろう。

ここまで来れば、偽王軍も焦って南下し、急いでカートスと合流する筈だ。

そうすれば兵站の関係で、ゼフランテ北の湿地帯で交戦する可能性が高くなる。

平原はゼフランテ側にある。地形を利用すれば、勝利する事は難し

くない。

「しかしですな、殿下」

だがウィルムントは、苦い顔をしていた。
フィオストを指さし、城の駒を置いた。

「ここに、エシユタウ城と言う城があります。

難攻不落の名城として名高い城です。北は森、南は山、東は崖で
西から入るしかない場所です。

この様な城を落とすには、1ヶ月や2ヶ月の期間では不可能です
ぞ。

例えオギユストと言えど、半年は見なければ」

「半年か」

半年という時間は、長すぎた。

その間に決戦に持ち込んでくるであろう事は必至だ。
であるなら下手に動かず、ルフトヘイクで迎撃する方が現実的だっ
た。

ゼフランテの攻略にも、1ヶ月は見なければならぬのだ。

そこから南へ向かわせて、途中の小貴族を退けながら、エシユタウ
城を落としたとして、そこからまたゼフランテまで戻す期間が必要
なのだ。

3ヶ月は掛かるだろう。その間に偽王軍が決戦を仕掛けてくる可能
性は、9割近い。

だったら、ルフトヘイクで腰を据えて、とにかく軍事力を削いでか
ら、進撃するしか無さそうだった。

「しかし、完全に手が無い訳ではないでしょう、父上？」

そこで、ライレントが口を開いた。

武官ではなく、文官の男だ。頭の回りに関しては、兄のウイスケル以上と聞く。

その男が、ウイلمントを大將軍ではなく、父と呼んだ。

アクセルは何かを感じて、軍議の場で父と呼ばれ肩を怒らせたウイلمントを制し、ライレントに先を促す。

「ジムールに、グラハスがいる筈です」

「むっ」

ジムール。アクセルが地図に目を走らせた。

フィオスト領に面する小貴族領は3つあり、その内西に位置するのが、ジムール子爵領だった。

街を1つと村を3つ抱える小さな領土だ。領内に城は無い。

ウイلمントの顔色が変わり、ウイスケルもはっとした様に、アクセルに進言する。

「殿下。グラハスというのは、我々の兄弟の末弟です。

レッドロア家に養子入りしていて、先代が3年前に亡くなられてからは、ジムール子爵領の統治を行っております。

優秀な軍人でした。私よりも、その道では優れていたかも知れませんが、

ウイスケルが28で、ライレントが24だ。

その弟となると、子爵家を継いだ時は最低でも20の時。

養子入りした時の前まで遡れば、確実に10代だ。その時で、ウイスケルが自分以上に優れていたやも、と言っている。
余程優秀な人間なのか。

「しかし何故そんな人間が、子爵家に養子入りを？
末弟というだけでは、理由が弱そうだが」

「妖魔の大討伐が、4年程前にありました。
弟グラハスはこれに参加し、戦功を挙げたのですが、戦傷を負って半身不随となったのです。

我が公爵家を継ぐには弱いという事で、子爵家に養子入りする事になったのです」

半身不随。その言葉が出た時に、アクセルは少なからぬ落胆を覚えた。

その様な体では、戦場に出る事はできない筈だ。
本人が出ずして、兵士だけで堅城と言われる城を、背後を襲うとは言ってもできるのか。

それができないからこそ、アクセルの下にはせ参じる事ができなかったのではないのか。

そう、アクセルは思ったのだ。

「ですが殿下、ジムールにはスオージリオという街があります。
お耳に入った事も、1度ぐらいはあるのではないですか？」

「スオージリオ。確かに、聞いた事はあるが」

数年前に疫病が流行った土地で、教会から何人か人間を派遣された、

という話を聞いた事があった。

だが教会の人間が到着した頃には、既に疫病が落ち着いていた。最初は大被害が出た後だったかと思っただ、調べてみれば鎮圧に成功していたという街だ。

アクセルはそれを思い出し、考え直した。

もしもそれがグラハスの功績であるなら、凄まじい内政手腕の持ち主という事になる。

「スオージリオ。領主が新しくなってから、急速に治安が改善された街ですな。

まともな柵等無かった街を城壁で囲い、ジスティンとの交易の街として最近名を馳せております」

更に、グリーズブから情報が付け加えられた。

街を城壁で囲う。並大抵の労力と指揮でできる事ではなかった。

政府からの援助があれば可能だろうが、そういった話を聞いた事は無い。

という事は、独力で成し遂げたのだろう。

少なからぬ兵力があり、それを指揮する人間がいるという事だった。まさか、半身不随となった男がそうしているのか。

「北にゼフランテ、東にフィオストという土地です。

殿下の下にはせ参じる事ができなかったのは、流石に致し方無かったのでしょうか。

しかしもしも、ゼフランテを抑えて周辺の小貴族を黙らせ、フィオスト侯爵の目を第3旅団に釘付けにする事ができるのならば。

グラハスは、必ず動くと思います」

ウイスケルが言い切り、ウィルムントとライレントもそれに頷いた。軍事に明るい3人が同意している。自らの血族を頼る、と。流石のアクセルと言えど、この事態を易々と受け入れるつもりは無かった。

一旦軍議を終えて、議案は明後日に持ち越す事にした。日程を考えると、そこがこの作戦を採る事ができる境目だった。

「早過ぎて遅れた男」

作戦を持ち越したアクセルは、すぐにセスマイレユに意見を仰いだ。軍議の内容を伝える為だったが、元々この事案を他の諸侯に探らせる様な事はしないでも良い、とアクセルは思っていた。

どちらかと言うと、アクセルやセスマイレユが得意な政争にほど近い、と思っていたからだ。

「良いんじゃないかしら？」

であるからか、一言で促されてしまった。

政争の話をするという事もあって、リリスとヘーリアは部屋の外で待たせている。

陣営という訳でもないので、敬語を使う事は無かった。

「半身不随の方なんですよ？」

なら、後で理由付けなんて幾らでもできるじゃない。

ウイスケル様は他家に養子入りしてるんだし、そのウイスケル様とライレント様の気質は違う様だし。

注意するならウィルムント様だけれど、あの方も先は短そうで、貴方の方が長生きするじゃない？」

「確かに、そうかも知れないが……」

「なら心配する事じゃない。

最終的に貴方の下に残るのは、家の違うウイスケル様とライレント様だけよ」

言われて、アクセルは唸った。

確かにそうかも知れない。
少なくとも、アクセルは幾ら優秀と言えど、半身不随の男を傍らに置くつもりは無かった。

今日のカートスの迷走は、隻眼隻腕というハンデを負ったエルトイ
ーユにある、とアクセルは考えていた。

本来ならばアクセルの様に走り回って解決しなければならなかった
事を、最小限の動きで済ませてしまった為、アクセルに動きで負け
たのだ。

であるなら、どんなに優秀であつても半身不随の男に与えられる地
位は侯爵だ。

それも要職ではなく、地方長官に留まつてもらう必要があるだろう。

問題は、そこに名声を得られる事だつた。

名声というモノがどれほど権力闘争において役に立つか、セスマレ
イユを利用するアクセルには、嫌という程わかつていた。

「使いこなしてみたら？」

挑戦的な上目遣いで、セスマレイユはアクセルを見上げた。

「自分に絶対の忠誠を誓わせて、使いこなす。

そういうカリスマ性というのも、王道には必要なモノだと思うけ
れど？」

「
確かに」

それで、アクセルは納得した。

茶を飲み交わし、それから少しオルバドスへ戻る時期について話し
合った。

クエッツエンカートからの要請が無ければ、戻るつもりは無いしなかった。

先に戻って地盤作りに奔走していた枢機卿が、クエッツエンカートに取り込まれたのだと言う。

対立するよりはマシだし、取り込んですぐに要請が無い所を見るとクエッツエンカートが精力的に権力利用するつもりは無い様子、というのがその理由だった。

アクセルはリクセニアの事で手一杯なので、そちらの事はセスミレイユに任せる事になっている。

故に、彼女がそう言うのであれば、後は自分に不利益が来ない様に気をつけるだけだった。

窓の外から、青々と生い茂る木々が見えた。

夏に近付いてきたので、庭に生える木々も元気を惜しげもなく見せびらかしたいらしい。

忌々しい木共だ。内心で、グラハス・レッドロア「ジムール子爵は毒づいた。

「兄者」

呼ばれ、グラハスは窓の外から部屋の中へ視線を向けた。

グラハスは明るい金髪の持ち主だ。父と母の両方の髪の色を分け合えば、こんな色になるだろう。

鋭い眼光は父譲り。今年で21、前線を退いて4年になるが、寸分も腑抜けていない事は眼光の鋭さを見ればわかる事だった。

「アクセル軍の第3旅団がキシュテンストイク城を落としたってさ。

ウェッソバウテ侯爵は捕縛された後、すぐに処刑されたい」

報告するのは、女だった。

身長は160を超える。女にしては立派な体格で、褐色の肌、その上から僅かに纏っている布地を押し上げる豊かな肉付き。

活発そうな印象を抱かせる彼女は、イアンと言う、まだ15歳になったばかりの少女だった。

見た目は、18歳ぐらいに見えてもおかしくないのだが。

「で、第1旅団と第2旅団がルフトヘイクを進発したらしい。目的地はゼフランテ伯爵領。進軍速度は3日ってところだ」

「もうそんなに近くまで迫っているのですね……」

イアンの隣に立っている女性が呟く。

頭をベールで覆った女性だ。流麗な顔立ち、しなやかな体つき。隣のイアンよりも年上だったが、しかし身長は頭1つ低かった。

彼女はセスティアという。20歳で、グラハスの代わりに外交等を担当していた。

「さーで、兄様？ どうするつもり？」

最後に、グラハスの横に立っていた少女が声を上げた。

苛立たしげに、グラハスは彼女を見上げる。

セスティアと同じ茶髪。それをポニーテールにしていた。

セスティアと比べると若干つり目がちだが、グラハスほどではない。今は挑戦的にグラハスを見下ろしている。

体つきも貧相だ。少しはイアンを見習えば良いモノを、とグラハスは内心で毒づく。

シイキイという少女だ。グラハスの身の回りの世話、即ち雑務を手伝ってもらっている

セスティア、シイキイ、イアン。

この3人がグラハスの執務を助けている義妹達だった。

グラハス自身と血の繋がりは無く、セスティアとシイキイは先代の娘で、イアンはその落胤であった。

先代が亡くなってから、グラハスが妹であると認知し、側に置いてやっている。他2人の異母妹だ。

「ただ見て見ぬふりをしてれば、うちの領土的には安泰よね？
クラウズ殿下とアクセル殿下、どちらが勝っても大差無いんだもの」

「だが、勝ち馬というモノがある。
無能共にそれを譲り、オレ達が黙っているのは、後々の禍根になりかねん」

「じゃあどうするの？」

シイキイはグラハスの傍らから離れて、グラハスの執務卓の上に地図を広げた。

その上に、駒を置いていく。駒と言っても、チェスで使われるモノだった。

2つのキングを、ハイオウムとゼフランテに置く。
ルークを2つ、ゼフランテとフィオストに置いた。
次に、ナイトをハイオウム、ゼフランテ、フィオストの3つに置く。
最後は、ビシヨップ、ナイト、ポーンをジムールに置いた。

「ルフトヘイクをキングが空けた理由は何かな？」

「ハイオウムからルフトヘイクまでは、5日掛かるぜ。どんなに急いだとしても、3日だろうな。」

ゼフランテから返ってくるには十分じゃないか？」

「それを承知した上で、今ゼフランテを取る。」

ゼフランテはカートスとの国境にほど近いですから、腰を据えられるとクラウド殿下は孤立する事になりますね。

これを、狙ってるんじゃないでしょうか」

「ふーむ」

妹達がまず話し合い、それからグラハスを見やった。

視線が集中する。煩わしくなり、グラハスはさっさと答えをくれてやる事にした。

「国際的に孤立したカートスは、すぐにクラウドを切りたくてうずうずしてる筈だ。」

つまり、1度の援軍で終いにしたいと考えている」

シイキに新たなナイトを用意させ、それをカートスからハイオウムへと動かす。

「クラウドとしては、この援軍でどうにか情勢を覆したいと考える。」

つまり決戦を仕掛けようとしている。

1万以上の軍が集結する場所。中央ルフトヘイクの草原、西部ゼフランテ北の湿地帯、東部ベシユレスタの高原のいずれかだ。

だが、ベシユレスタへは補給路が伸び過ぎる。取ったとしても、

旨味が無い。

兵糧と武装はルフトヘイクに運び込まれているんだからな」

ルークをルフトヘイクに置かせた。

確かにそうになると、ルフトヘイクとゼフランテの2つしか無くなる。そして、ルフトヘイクでの決戦は、ゼフランテの攻勢軍が反転できるのだ。

2個旅団を率いているのも大きい。1個旅団を残して、1個旅団で敵の背後を衝く事ができるからだ。

「即ち、決戦の地はゼフランテしか無くなる。

そしてゼフランテを決戦の地にすれば、地形的にアクセル軍が有利。

尚かつ、第3旅団と合流する手も無くはない。

ゼフランテ攻勢は、ゼフランテ決戦をアクセルが目論んでいる証拠だ」

「でも、合流するって言ってもさ。

第3旅団がエシュタウを攻囲しても、落とすのに時間掛かるんじゃない？

その間に決戦になる方が確率高いよね？」

「ジムールに何の駒も無ければ、だ」

グラハスがジムールを指さした。

3つの駒がある。ビショップ、ナイト、ポーン。

「もしかして、当てにされているのですか？」

セスティアの言葉に、グラハスは浅く頷いた。

それを見て、イアンが呻いた。

「うちは3個中隊があるだけだぜー？
これでどうやって動くって言うのさ」

「エシユタウ城に、西からの援軍だと言って入り込めば良い。
イアン、お前はできる限りの男装をして、フィオスト侯爵の首を
取れ。」

部下には城門を開ける様に伝える」

「いいっ！？」

シイツ、とグラハスが声を縮める様にイアンに促す。
それで慌てて、イアンは口をつぐんだ。

代わりに、身を乗り出して机に肘を付きながら、グラハスに耳打ち
する。

「騙し討ちだろ？ そんな上手く行くのか？」

「アクセル軍の第1旅団と第2旅団が、ゼフランテを落とすには1
ヶ月前後掛かる筈だ。

その間に、どうにかアクセル軍と連絡を取る。

そしてアクセル軍の本軍と、第3旅団が連絡を取り、オレ達の動
きと連動させる」

「上手く行くのかよ、そんな事……」

「させるんだ、オレ達の手でな」

言って、グラハスはイアンにナイトを手渡した。
次にセスティアをこまねく。セスティアが机の前までやってくると、
ビショップを差し出した。

「辛い役目になる。」

だが、どうしてもアクセル軍と連携しなければならない。

この辛く重要な役目を、お前に託したい。セスティア」

グラハスの眼光に、僅かな迷いの色が見えた。

セスティアも少し悩んでいたが、最後にはビショップを受け取った。

「兄様にはこの身を助けて頂いた恩義があります。

これが必要な事だと兄様が言うのなら、私はそれを謹んでお受け
します」

「頼む」

グラハスは頭を下げた。

それを見て、姉妹は吃驚する。

グラハスという人間は、横柄で常にイライラとしている人間なのだ。
その人間が頭を下げる姿を、初めて見たのである。

「そ、そんな事されたら、もうちょっと考えなくなる様な……」

「却下だ」

「あ、あつ……」

「御殿騎士団副団長ロバルトの冒険」(前書き)

ここだけ何故か一人称です。
何ででしょうね？

「御殿騎士団副団長ロバルトの冒険」

私は剣士ロバルト。剣士と言うが、誇り高き御殿騎士団の副団長を務めている。

先代の教皇猊下の頃よりお仕えし、その時代には団長を務めていた事さえある。

が、新しい教皇猊下、セスミレイユ猊下の代になり、ヘーリア様が頭角を現してから、私は副団長の座に納まっている。

ヘーリア様の鮮やかな槍さばきを見た後では、私の様な剣士では御殿騎士団の団長たる資格は無い。

そう思い、ヘーリア様に騎士団長を譲り、副団長という職から猊下をお守りしている身であった。

しかし、最近のリクセニアの第2王子であるアクセル様にお世話になっていて、御殿騎士団としては肩身が狭い立場でして。

何せアクセル様という御仁は、凄まじい。政戦両略に通じていて、これでまだ16歳だと言うのだから、凄まじいといしか言いようが無い。

若者らしく、時折ウィルムント様やグリーズブ様に苦手意識を感じている事はある様だが、あの年頃でこの程度なら話になるまい。

猊下も猊下でそのアクセル様から、度々ご相談を持ちかけられておられる様で、なんと最早。

若い人間ばかりが凄まじい。

しかししかしですぞ。私にも、とうとう見せ場がまいりました。

アクセル様と猊下のお二方に呼ばれ、私はゼフランテ攻囲中の本陣にはせ参じた次第であります。

「この様な事を、御殿騎士団の騎士ともあろう方にお頼みするのは

気が引けるのですが……。

他にお頼みできる方がいないのです。良ければ、お話だけでもお聞き願えませんか？」

アクセル様が仰る。

私の様な者に、敬語を使われる理由がどこにあると言つのか。

「実は、ジムールという地方にいる、レッドロア子爵に書状をお渡ししたいのです。」

が、どうやら道中は幾らか検問を設けている様で、人間の出入りが厳しいですよ」

「それで薬を届ける事を理由に、アクセル様は使者を送られる様なのです。」

同士ロバルトにお願いしたいのは、その使者の護衛なんですよ」

ふむ、護衛。軍略の1つに荷担する事になるのか。

いやしかし、戦闘の最中で戦場にも出ず、ただ飯喰らいを続けている身は、既に敵の軍略に荷担している様なモノか……。

妖魔を退けているのが我々だけならば、ある程度の矜持も持てるのだが、実際はむしろ我々が妖魔から守られている様なモノであるし。

そうであるならば、多少の荷担は致し方ないのやも知れない。

私としても政治の右も左もわからぬ人間ではないのだから、駄々をこねるばかりもできないのだ。

「使者を2人。これに御殿騎士団から3人付けてもらいたいのです」

「承知致しました。何なりと命じ下さいませ、猊下」

「よろしく願います、同士ロバルト」

猊下のお言葉さえあれば、御殿騎士団はいずれも命を投げ出すまで戦う所存なのですから。

選りすぐりの騎士を3人選抜し、私は翌日の早朝に使者と共に出発した。

どうやら、医療部隊の女性が1人と近衛騎士が1人の様だ。

どちらもそれ程若くなく、私と歳が近い。私が選んだ騎士も中堅所を選んだので、医者一行にしか見えないだろう。

それに何より、偽造した通行手形を持っている。先のルフトヘイクの戦いで捕縛した隊長達が持っていたモノを、偽造したのだ。これで検問は何の問題も無く、通過する事ができた。

「気を付けて下さい。この辺りには、盗賊が多く出ます」

近衛騎士が、周囲を警戒しながら言った。

森が広がる土地だが、洞窟や穴が多いので屋外に出てくる妖魔は殆どおらず、盗賊の巣窟になっている土地なのだそうだ。

ならば、と私達御殿騎士団は剣を抜いて歩く事にした。これで盗賊共は臆して逃げる事が多い。

しばらく、何事も無く森の中を歩いた。
だが。

キン……

僅かな金属音に、皆が立ち止まった。

耳を澄ませる。続く金属音。いや、剣戟の音だ。

さてどうする？

音は遠い、そちらが引きつけてくれているのならば、私達は問題無く通過できる筈だ。

いやしかし、襲われている人間がジムールからの使者という可能性も、アクセル様から言われている。

いずれにせよ、騎士道の立場からは助けざるを得まい。

「ゴードン、付いてこい。2人で助太刀に行く。

近衛騎士殿はここでお待ち下され。決して動かぬよう」

「承知した」

荷台から、ゴードンが戟を取り出した。

それを見て、2人で駆け出す。

遠い、と思っていたが、実際は草むらを2つも抜けるとその姿が目に入った。

男達。身なりは粗末で手には剣を持っている。既に剣戟の音は絶えており、何かに向かって皆が視線を集中させている。

遅かったか……。

いや、まだだ。賊が散開せず、一点に集中しているのだから、警戒対象はまだ視線の先にあるのだ。

「賊共がアツ、そこを退けェい!!」

一喝。賊が弾けた様に視線を外し、こちらを見やる。

その隙に1人の男が立ち上がった。賊から離れようと、逃げる。

賊は男を捕らえようと、手を伸ばすが、寸での所でそれを躲す男。

ならばと斬りかかろうとするが、その時には私達が間合いに入っていた。

剣戟にすらならない。ゴードンが戟を振るう。それで首が2つ飛んだ。

私が剣を振るう。腕が飛び、斬られた賊は喚き回って仲間に助けを求め、もめている間にまとめて一刺突。それで、賊は動かなくなっていた。

「大丈夫ですか」

声を掛ける。

だがその男は、胸を覆っていた。

合間から、僅かだが膨らみのある双丘が見えた。

成る程、男装をしているのか。

思い、私は纏っていたマントをその女性に差し出した。

「我々は御殿騎士団の人間です。ご安心下され。

人道支援の為、我々はジムールへ薬を届ける道中なのですよ」

「う、御殿騎士団の……？」

つぶらな唇から紡がれる、可憐な声。

男装をしているが、これでは女である事を隠せまい。使者ではないのか。

思ったが、女性は僅かに逡巡した後、1振りの剣を差し出してきた。

「御殿騎士団の方々なら、この剣にお覚えがあるかと思ひまして。兄が、御殿騎士団の団員だった時のモノです」

「ほう、我が同士の」

これはこれは。

もしかしたら使者かも知れない。

私が御殿騎士団に加わって以降、御殿騎士団には新たにやってきた人間はいるが、抜けた人間は死んだ人間を置いて他にいないのだ。その上、専門で預けられる剣は無い。あの様な場所なのだ。外部から取り寄せるしか、武器を調達する方法は無い。

女性の言う事は方便だ。何故そんな方便を使うのか。

期待を胸に、私は剣を受け取り、鞘走らせた。

剣の腹。”賢逞の獅子”という銘がある。
成る程。

「ジムール子爵の使者様、ですな？」

我等、リクセニア王国第2太子アクセル様の願いを受けし、教皇猊下の命で参りました、御殿騎士団であります」

「ほ、本当ですか!？」

「真に」

ジムール子爵、グラハス・レッドロア「ジムール。

賢逞の獅子というのは、彼の字であるとライレント様からうかがっていた。

もしも使者であるならば、家族を置いて他に知る者がいないこの名を使う筈、と。

女性を馬車まで連れて行った。

近衛騎士が証書を渡したので、女性の方も我々を信用してくれた様だ。

となれば、後は戻るだけである。

さあて、腕が鳴るわい。

Ⅱ 地獄の電撃作戦Ⅱ（前書き）

電撃戦Ⅱ電撃的な進軍の意でお願いします。

Ⅱ 地獄の電撃作戦Ⅱ

ジムール子爵からの使者を受け、アクセルはすぐに第3旅団へ伝令を走らせた。

時は一刻を争った。何せ言いつけておいた御殿騎士団の騎士ロバルトが、たった5人で検問を突破して帰ってきたのだ。

精強無比で知られる御殿騎士団の副団長とはいえ、ここまで簡単に検問を突破するとは思わなかった。

狼煙や弓矢等、あらゆる連絡方法を近衛騎士には教えておいたのだが、どうやら無駄に終わったらしい。

すぐにでも、対処を講じる必要があった。

攻囲中だったがアクセルは本陣で軍議を開き、ウイスケル、アルセアの両名を呼びつけた。

「どうにかして、ジムール子爵を救援しなければならない。

どちらかに、明日攻城兵器部隊を連れてやってくるウィルムント大將軍に指揮を代わってもらう。

代わってもらう方には、2個小隊を率いてジムールまでを鎮圧してもらいたい」

「2個小隊、ですか」

「そうだ」

かなり小さな規模の隊だ。

幾ら小貴族の領土が続くと言っても、実働部隊は1領土辺り百数十はいる筈で、2個小隊80人前後でこれらと連戦するのは辛い。

しかし、アクセルの方にも事情はある。

ゼフランテ伯爵の籠城した城、ロード・バルテミオ城は強大なのだ。攻囲するだけでも1個旅団が必要で、その穴を埋めるにはやはり2個旅団の大半が必要だった。

野戦を1度こなしており、また攻城戦で死傷者も出ている。

これらを考慮すると、動かせる兵はやはり2個小隊が限度だった。1個中隊はあまりに痛い。

「殿下。第3旅団は今の様な状況なのですか？」

「キシュテンストイク城を陥落させ、軍を再編している。

再出撃には1週間を要するという話だが、ライレントを向かわせてあるから、3日で終わらせる。

エシユタウ城を攻囲するのは22日になるだろう」

「エシユタウ城襲撃の日程は？」

「25日、と聞いている」

その日程に2人が唸った。

今から1週間先である。この1週間の間、検問突破の連絡を混乱させる為に、小貴族領を鎮圧しなければならぬのだ。

難しい戦だが、アクセルはこれしか方法が無いと見ていた。

鎮圧に回る部隊を恐れ、グラハスが救援を見返りにフィオスト侯爵に領地奪回を依頼する。

愚鈍な判断である、と受け取ったフィオスト侯爵は激昂するだろう。この時を、襲撃に利用させる。

アクセルはここまで打算しているが、グラハスがどこまで合わせて

くるか。久々の博打だった。

「では、私が参りましょう」

2人とも熟考していたが、最後に声を上げたのは、ウイスケルだった。

「全てと交戦するのは難しいですが、突破するならば難しくはありません。」

突破し、1度グラハスと交戦して、グラハスが敗北した、とでっち上げます。

これでグラハスを捕縛し、襲撃予定の妹に軍の主力を率いさせて逃げさせます」

「できるのか、ウイスケル？」

「兄である私でなければ、できないでしょう」

確かに。そして、ウイスケルの立案した作戦は電撃戦だった。

電撃戦はウイスケルの独壇場と言っても良い。

アルセイアがウイスケルより優れた野戦指揮をするからこそ、この場には残した方が良く、とも考えられる。

アクセルはウイスケルの案を承諾し、軍議を終えた。

20日朝、ウィルムントが攻城兵器部隊3個小隊を率いて、軍に合流した。

投石機と櫓、それに破城槌である。これらが到着した事で、ようやく攻城戦に活気が出てきた。

ウィルムントが全軍の指揮を執る様になり、入れ替わる形でウイスケルが第1旅団の指揮権をウィルムントに委譲。
夜になり、ウイスケルは騎兵のみで編制された2個小隊を率い、進發した。

「3日の強行軍になる！」

馬が潰れたら己の足を信じろ、良いなア！？」

「はっ！」

地獄の進軍が始まった、とウイスケルは内心で己を奮い立たせた。
とにかく馬が潰れるまでは、検問や守備を突破し、潰れれば交戦するという戦術を徹底するしか無かったからだ。

第一の検問が見えた。先日、ロバルトが突破した検問だ。
先日突破されたばかりという事もあり、兵が多く駐屯している様だが、その分堅固さはまるで無かった。

まず弓騎兵が散開し、僅かに残った検問跡に火矢を浴びせた。
ウイスケル達騎兵が、兵の中を突破する。突破すれば反転し、再度突破。

往復を2度繰り返し返して、ようやく兵を散らす事ができ、散開していた弓騎兵と共に、検問を突破した。

「全軍止まれッ。今日はここで野営を行う」

夜が深くなった為だった。進軍を中止し、休憩を取る。蓄えに蓄えて、今後の2日で使い切るつもりだった。

僅かな睡眠だ。2時間ずつ眠り、交代で見張って、6時間が経った頃に進軍を再開する。

昼になり、第二の検問跡が見えた。

襲撃を知ってか知らずか、多くの兵が集結している。百に近い。

今度は、最初に騎兵が飛び込んだ。反転する間に、弓騎兵に火矢を射掛けさせる。

反転し再度突撃、1往復。更に突破して、40程を蹴散らす。

それで敵は散り散りになり、進軍を再開する事ができた。

「少しでも背後に兵を残せば、追撃を受ける！

必ず蹴散らせ、蹴散らすまで臆するな、逃げるな！」

言い聞かせながら、ウイスケルは隊の被害状況を確認した。

騎兵の数が64まで減っている。休憩を取った時には、1騎として欠けていなかった筈だが。

全てが全て、討ち取られたモノとは思えない。恐らくは騎馬が潰れ脱落したか、或いは臆病風に吹かれ逃げ出したのだろう。

それでも構わなかった。地獄の進軍なのだ。

この程度の所で脱落したり、死ぬのなら、まだ楽な方に違いない。

何せ、進軍している道はリクセニア国内なのだ。

迎え撃つ兵士や、彼等に守られる民は皆リクセニア国民であり、一切の略奪をしてはならないのだ。

即ちそれは、身に持つ事ができるだけの食糧と水で、休憩までを凌がなければならぬという事である。

激しい運動で呼吸が荒くなり、喉が渇く。だがあるのは、手にできるだけの量の水しか無い。

腹が減っても、僅かな干し肉があるだけだ。これを味わう事さえ、馬上では許されない。

できるだけの数を噛み、千切り、喉に詰まらぬ様に気をつけながら、走る。

夕方になり、街が見えた。

駆けながら考える。足を止めさせて、作戦を練ってから突撃するか。それとも今このまま、突撃するか。

「このまま突撃するぞ！」

それぞれ街を突っ切って、我等の正義を見せつけよ！

街の出口で会おうぞオツ！！」

出した答えは、突撃だった。

言い聞かせ、ウイスケルは手持ちの水を全て飲みきった。

そして、真っ先に街へと突っ込んでいく。

「我等はリクセニア王国正統後継者、アクセル殿下の軍ぞ！」

偽王に与する諸侯の民よ、聞け！ 我等はアクセル様の軍だ！」

力の限り、ウイスケルは喚いた。

街の方々に同じ様な喚声が上がっている。

一気に街の中へ突っ込んだ為に、通りを封鎖されるという最悪の事は起きていない。

道を歩く民は、手綱捌きでそれはどうにでもなる。だがそれよりも気になるのは、整備された石畳の床だ。

馬の足に悪く、何かの拍子で強い衝撃が足に掛かった場合、すぐに潰れてしまう。

そして投げ出されれば、頭蓋骨や肋骨を容赦なく粉碎するだろう。

「偽王を支持するな！ 偽王は道を踏み外しているのだ！」

偽王を支持する人間を許すな！ 道を踏み外せば、泥濘の道ならぬ地しか無いのだ！！」

早く突っ切りたいという思いを、必死で言葉にし、発散する。
突入して1分程、出口が見えた。幸いな事に、まだ封鎖されていない。

もう少し。ウイスケルは手綱を捌く。

門。2つの柱の様なソレ。脇には兵士が立っていたが、恐れをなして散っていく。

抜けた。思った時には、ウイスケルは宙を舞っていた。

すぐに気付いて、腰にあった剣を抱き締め、抜けない様にする。

衝撃。上手く腕から落ちた為、衝撃は最小で済んだ。受け身を取って、起きる。

馬が潰れていた。脚の関節が有り得ない方に曲がり、体を地面に叩き付けている。

数m程、勢いに任せて押されたのか、剥き出しの地面には引きずられた跡が残っていた。

ウイスケルは、構わずに走った。やがて川が見えてくる。そこが合流地点だ、と自らに言い聞かせた。

走るウイスケルの横を、騎兵が走り抜けていく。

ウイスケルの騎兵だ。街に駐屯していた騎兵ではない。

喉に血の味を感じる様になる。試しに唾を吐き出してみるが、血の赤は見えなかった。

ウイスケルは走り、走り、川にたどり着いた。既に10ばかりの騎兵がいた。

水を求め、ウイスケルは川に突っ込む。渴きを癒す為、狂う様に川の水を飲んだ。

それでようやく落ち着き、ウイスケルは脇を配下に支えられ、周囲

を見回す。

「突破したのは、これだけか」

13の騎兵と、10の兵士だった。

80いた筈の仲間が、23になっているのである。

周囲もそれについては不安に感じているらしく、顔色は優れなかった。

「待ってれば、仲間が来るかも知れません」

「待てるか。待てば来るのは、敵兵だ。」

ここを何処だと思ってる、アクセル様の懐の中では無いのだ」

臆病風に吹かれた人間が声を上げたが、叱りつけられ黙り込んだ。進軍を続ける。

夜になると、追撃しに来たらしい騎兵が後ろからやってきた。

たった5人の1班のその騎兵達。ピクニック気分なのか、或いはパトロール気分なのか。

射撃で2人を落とすと、3人は逃げ帰っていった。

追撃の手が無くなったところで、ウイスケルは野営の準備に入った。先程射落とした2人が乗っていた馬を喰うかどうかで、少しもめた。しかし、流石に軍馬と言えど同族が目の前で捌かれているのを、平気でいられるとは思えない、という理由からこれは却下された。

ウイスケルを氣遣った人間が、干し肉を差し出してきたが、ウイスケルはそれを固辞していた。

疲労のせいで、どうせ食べても吐き出すだけ、と思ったのだ。泥の様に眠る事で、飢えは凌いだ。

翌日。進軍を再開した。ウイスケルは馬に乗らず、歩く事になった。どうやら落馬した時に腕を折っていたらしく、手綱を捌く事ができなかつたのである。

ウイスケル達歩兵を挟む様に騎兵が進む。20ばかりの軍勢の、せめてもの陣形だった。

昼が近づき、スオージリオの街が見えた。ジムール領に入ってから、検問は無かった。

しかし連絡が入っているのか、城壁には百数十の兵が固めている。周囲の兵達が、絶望的とも言える顔色になった。ある者は慟哭を上げ始める。

「ええい、泣くな！」

我等はアクセル様の軍なのだ！ 正統なる国軍なのだ！
誇りを持って、喚け！ 我等の正しさを、敵軍に知らしめろ！！」

言い聞かせ、ウイスケルは折れていない方の腕で剣を掲げた。それを、城壁を固めている兵に向ける。

「我はアクセル軍、第1旅団団長、ウイスケル・ゼロント＝エセル伯爵なり！」

偽王の軍が何か！ 力のみで知らしめねばならぬ虚構に、何の意味がある！」

言い捨てると、兵達も声を上げ始める。

最初は僅か。だがやがては喚声になっていった。そして。城壁の兵達が持つ弓が、引き絞られた。

「撃ってみよ、当ててみよ！」

貴様等の誤りばかりの矢が、正道に行く我等に当たるものか！
当たってなるものか！！」

構わず、ウイスケルは喚き立てた。

配下も黙る様な事は無い。一層声を振り絞り、敵兵を牽制した。

だが、無慈悲に矢は放たれる。

最後の瞬間まで、ウイスケル達は声を上げるのをやめなかった。
目を開けていれば恐怖で声が震えるから、半ばからは目を閉じていた。

ザスッ

矢が刺さる音。何にか。

ウイスケル自身が、わからなかった。

最初は自分の胸にかと思ったが、目を開け確かめてみても、矢等何処にも刺さっていない。

後ろを見やった。遙か後方に、矢は刺さっていた。

ワアアアアッ

そして、喚声だ。敵兵のである。慌てて敵兵が逃げて行つたのだ。
城壁から誰もいなくなり、ウイスケルは呆けた様に立ちつくした。
だがやがて、街の方から2人の人影が姿を現した。

リアカーに乗せられた男と、それを操っていた少女だ。

そのリアカーに乗せられた男を見て、ウイスケルは事情を察した。

「その様な寡兵で、我が兵を打ち破るとは、流石兄上です。

ジムール子爵、グラハス・レッドロア」ジムールは、ここに降伏

を進言致します」

半身不随の弟、グラスであった。

第3章終了時 登場人物一覧（前書き）

こちらも見方はこれまでと変わらず。

第3章終了時 登場人物一覧

Ⅱ アクセル軍 Ⅱ

グラハス・レッドロア Ⅱ ジムール

21歳 ジムール子爵

元国軍中隊長。賢逞の獅子という字を持ち、剣豪グラハスの名で知られた。

3人の兄弟で最も優秀と称されるが、4年前の戦闘で戦傷を負い、これが悪化して半身不随となる。

現在はジムール子爵として領土を繁栄させ、統治において手腕を発揮している。

セスティア・レッドロア

20歳 ジムール子爵長女

アウステン Ⅱ ガリア方面に人質として差し出されていた過去を持つ、才女。

普段は兄の代わりに外交や商談をまとめている。

シィキィ・レッドロア

18歳 ジムール子爵次女

王都の貴族学院に通っていた才女。普段は兄の身の回りの世話をしており、統治も手伝っている。

ちなみに兄に対する感情はひじょーに複雑らしい。

イアン・レッドロア

15歳 ジムール子爵三女

蛮族出身の少女。ジムール子爵の死後、グラハスの代になってから認知された。

主に軍務を担当しており、才能だけならばウイスケルに引けを取らない。

オリユバーク・セレブレア

31歳 セレブレア家嫡男

シュバツクの長男。父と同じく外交の男だが、目立つタイプではない。

〓 神聖オルバドス帝国 〓

ロバルト

47歳 御殿騎士団副団長

先代の教皇の頃から仕えているという、御殿騎士団でも最古参の部類の騎士。
凄まじい剣腕を持つが、ヘイリアと比べると短絡思考。がさつという訳ではない。

ゴードン

32歳 御殿騎士団団員

ロバルトが従えていた騎士。クローツェン Heim 生まれ、クローツェン Heim 育ち。

大柄な男で、戟を容易く扱う事ができる。

〓 カートス公国 〓

ベルダイ

66歳 カートス公国宰相

宰相を務めている老人。決して口には出さないが、自身もエルトイ

―ユの熱烈な信奉者である。

第3章終了時 登場人物一覧（後書き）

新しく登場する人物が大分減りましたね。
今回のキーキャラクターはグラハスぐらいでしょうか。

第3章～第4章 年表

大陸歴1545年7月22日

ジムール子爵グラハス・レッドロア^{II}ジムールは、ウイスケル・ゼロント^{II}エセル伯爵の攻撃を受け、降伏する。

グラハスの妹イアンはこれを了承せず、子爵の私兵3個中隊を率いて出奔、逃走。

また、同日にアクセル軍第3旅団がフィオスト侯爵の籠城するエシユタウ城を攻囲する。

が、両軍共に攻め手が無く長期間に及ぶ攻城戦の様相を呈する。

同年同月24日

カートス公国陸軍中将ボロソウ・ヴォウ・ホルファークが1千を率いて、リクセニア王国に向け進軍。

事前に声明が発表され、リンデンステッド2世がこれを受け入れる。カートス軍は翌月になって首都ハイオウムへ到着し、合流する。

同年同月25日

イアン・レッドロアが早朝にエシユタウ城に入城。

しかしフィオスト侯爵に軽んじられ、激昂しフィオスト侯爵を殺害。イアン配下の兵士が開城し、攻囲していたアクセル軍第3旅団に降伏を申し入れ、第3旅団はこれを了承した。

同年8月1日

7月14日よりアクセル軍第1旅団、第2旅団に攻囲されていた、ゼフランテ伯爵領ロード・バルテミオ城が陥落。

伯爵は捕縛され、即日の内に処刑される。

同年同月4日

7月4日より開催されていた神聖オルバドス帝国議会の裁判にて、
皇帝ジュリアーズ3世に終身刑が言い渡される。
当初は処刑が求められていたが、諸侯の妥協に伴い、終身刑、執行
猶予1ヶ月の判決が下された。

第3章～第4章 年表（後書き）

次で本編も終わります。

リクセニア戦記 第4章Ⅱ 帰る教皇、出発の前夜Ⅱ

とうとう、神聖オルバドス帝国元帥クエッツエンカートから、セスミレイユの帰還を願う書状が届けられた。

どうやらクエッツエンカートという男は、そこその頭を持つらしい。

世情に流されず、ジュリアーズ3世に執行猶予を付けたのは、セスミレイユの帰還を待ってから執行した方が良いと判断したからだろう。

尤も、処刑にまで持って行けなかったのは、クエッツエンカートの手ばかりだ。処刑まで持っていけば、何時処刑しようが理由付けができるモノを。

だがしかし、皇帝処刑という君主制に関わる事が起きなかったのも、またアクセルとしては安堵した所ではあった。

そうするとこれまで、アクセルの計略を大きく外れたのは、先日のウイスケルの大進撃を置いて他に無いだろう。

既にその功績は全軍に知れ渡る所となっており、腕を骨折しての戦線離脱という事も、大した損害にはならなくなっていた。

軍議での代わりも、グラハスが合流した事で大きな損失とはならなかった。

「随分と長くお世話になっちゃったかな。

もう2ヶ月以上だったっけ」

「そうだな」

セスミレイユの帰還は、軍議の場で知らされた。

そして今は、2人だけだった。

最後に2人だけで会いたい、とセスミレイユから頼まれ、受けたモノだった。

周囲はこの時期に2人だけ、というのを嫌った様だったが、しかしセスミレイユの歳の事を言い合いに出すと、すぐに納得した様だった。

聡明で腹の内の知れない娘と言っても、やはり子供は子供、と皆思っているらしい。

「君の様な相談相手がなくなると、少し寂しいな。
どうだ、うちの国で宰相でもして行かないか？」

「うーん、貴方がうちの国で皇帝をしてくれるなら、考えても良いかしら」

「笑えねえよ」

素で突っ込んだ。

皇帝というのは王家と違い、血筋ではなく教皇の意思なのだ。
もし本当にセスミレイユがアクセルを皇帝にする、と言ったのなら、なってしまうのである。

そのアクセルを見て、クスクス、とセスミレイユは笑った。

「民が望むなら、私も逆らえないわ。

精々、民に嫌われる様な政治を心がけたら？

それとも、今の内に破門しておく？」

「勘弁してくれ。そんな事されたら、今まで手に入れたモノが全部無くなる」

ぞつとしない提案に、アクセルは肩を竦めた。

何気ない談笑、その様にしか見えないのは、きっとアクセルとセスミレイユの力量を見誤っている人間だ。

こんな何気ない談笑は、自分達がする様な話ではない。

アクセルはそう思っていた。

思っているだけで口に出さないのは、せめても空気を読んだ結果である。

もしもこのまま、何も言わずにセスミレイユが出て行くのなら、それはそれで大した教皇だろう。

「あのね、アクセル様」

何かを切り出すにしても、大した娘だ、とアクセルは思っていた。だから答えてやる。

「何だ、セスミレイユ？」

「私、貴方が好きよ」

「そうかい」

「愛しているという意味でね」

アクセルは苦笑し、手をこすり合わせた。

彼女の身の上は知っている。知っているから、彼女が愛を求めているのならば、それを与えてやりたいとも思っていた。

だがそれは、難しい事だろうとも思った。アクセルは国の王で、セスミレイユは教皇なのだ。聖殿教会は不淫を定めていないし、教皇が子持ちだったという事例も沢山あるのだが、問題はそういう事ではない。

政治的な立場が、違い過ぎる。

アクセルは国王として、あらゆる問題を解決しなければならない責務を負っている。

その為には、死ぬと命じる他無い場合もある。今が丁度その時だった。

対して、セスミレイユは何があっても生きろと命じなければならぬ。

問題を解決するのではなく、解決して欲しいと願う、その気持ちこそが信仰なのだから。

「でもどうかしら？」

単なる憧れかも知れない。

私以上に聡明な人に会ったのは、初めてだから」

「愛というのは、欲する心さ。

オレの何が欲しいかを考えてみれば、君自身の中で答えは出る」

言うと、セスミレイユは考えを巡らせる様に上を向いた。

それから視線を泳がせ、最後にはうん、と頷く。

そして、腰掛けていたアクセルの胸に抱きついた。

「欲しいわ、アクセル様。

貴方が側にいるという時間が、貴方がくれるであろう愛が」

「そうかい」

廊下で剣戟の音が聞こえた気がした。

まさかとは思うが、あの2人が聞き耳を立てているのか。立てていたとして、どうなっているのか。

少しかりアクセルに冷や汗が流れたが、現実逃避に過ぎない事を悟り、胸に顔を埋めている少女に向き直った。

「セスミレイユ。どうしてもオレが欲しいのなら、君が教皇をやめるんだ」

「できないわ、アクセル様。

教皇は聖殿の象徴だもの。滅しなければ象徴は消えない、代わらない」

「なら5年待つてくれ。5年の間に国を整える。

そうしたら、皇帝になってやつても良い」

「5年なんて長すぎる。長すぎて狂ってしまいそうで、怖い」

「君は難しい事を言う」

「だってアクセル様。貴方ができるって言うてくれるから」

それは、どうしよもない事だった。

自分の側に彼女がいる。そういう考えを持っていれば、できない事等無い気がした。

ウィルムントとクエッツェンカートとを前にしても、負ける気がしないのだ。

彼女を奪いにリシスとヘーリアがやってきたとしても、どうにか

なるだろう気さえした。

自分とセスミレイユには、それだけの価値があると思っている。

「君も、言わないんだな」

ただ、アクセルには気に掛かっている事があった。

セスミレイユはこう言っても顔を上げなかったから、きっとわかっているのだと思う。

「何故、オレが王になろうとするのか」

何でアクセルがこれを公言しないのか。

それを理解してくれているのは、多分リシスとセスミレイユぐらいだろう。

王にならなければ良いのに。

それを言ってしまうば、きっとセスミレイユは楽になっただろう。

「言ったら、怒ると思って」

「いや、怒らないさ。

オレだって下らない事だと思ってるぐらいだからな。

むしろ言われまくったら、それはそれでやる気を無くすかも知れない。

有り得ない事だが」

途中まで言って、有り得ない事だと自分でもわかった。

反語になってしまったのが可笑しくて、苦笑を浮かべる。

「人間は結局、自分の信じる事と反する事は絶対にできない。神を信じる時にも、そうした方が良いと信じているから、そうする。」

悪を為す時にだって、理由は様々だろうが、それで何かが変わると信じてやるんだろう。

そうであるなら、オレもまたその行動原理に反する事はできない」

「アクセル様の信じる事って？」

「オレが最も長く良く生きる方法だ」

生物本能とも言える範囲の話だった。

だが、行動原理に反する事はできない、という話の直後なら、それはわかる気がした。

「継承問題を引き起こさずに、アッサリと王位継承を放棄してれば、オレは長く生きられただろう。」

しかし、あの愚兄の下では国が乱れ、有能な人間も使いこなせず、結局オレはその煽りを食ってしまう筈だ。

確実にそうなるだろうという根拠を、オレは持っている。

愚兄の治世を許せないなら、オレの治世を求めるしか無い。そうして、オレは今戦っている」

「そう」

「下らないから、あまり人に喋りたくない。」

ここまで世俗的だと、悟ってる風にしか見えないからな」

「私は、それでも良いと思う」

最後にそう言うと、セスミレイユはアクセルから離れた。
まだ物欲しそうな目をしていたが、自分を納得させたらしく、浅く
頷いて、アクセルに笑いかけた。

「じゃあアクセル様。お休みなさい。

できれば迎えに来てくれるとありがたいのだけど……。
それができないのなら、私が呼んでみるから」

「わかった。レディーを待たせない様に、迎えに行こう」

さりげない会話で行われた、最後の別れ。
ただし、アクセルはこれがとんでもない意味を持つ会話だった事を、
理解していた。

「最終決戦に向けて」

セスミレイユは、御殿騎士団86名に守られて、神聖オルバドス帝国へと向かった。

これに対する声明は既に発表しており、この御殿騎士団を襲撃した人間は、即ちリクセニアとオルバドス双方に対する宣戦布告と見なす、としている。

両国共に聖殿教会の勢力圏であるし、そんな場所で御殿騎士団を壊滅させる程の規模を持つ私兵がいる訳も無く。

半月後に皇都に到着した、という報せがもたらされる事になる。

とは言え、その間にリクセニアは一大決戦を迎える事になっていた。偽王軍総勢1万。付け加え、カートス軍が1千。

対するアクセル軍は無事、第3旅団と合流する事ができ、ゼフランテの地に総勢8千を集結させた。

偽王カートス連合軍は1万1千は、既にハイオウムを進発して、北西ルートを通って8日後にゼフランテの北部湿地帯に到着する見込みである。

「ここに来て、失った兵の内2千を回復してきたか」

制圧したロード・バルテミオ城の会議室に、一同は会していた。

ウィルムント、オギュスト、アルセイア、ライレント、グラハスを初めとして、総勢13人の諸侯を集めての軍議だ。

戦術に携わる人間をできるだけ集め、この最も重要となる軍議を開いていた。

ウイスケルは怪我でルフトヘイクまで下がっており、そのルフトヘイクにはグリーズブとダングォン侯を置いている。

もしもこの決戦で敗北した場合にも、ルフトヘイクで立て直せる様に用意しておく為だ。

「アウステン」ガリアの傭兵旅団を幾つか雇った様ですな。後は徴兵でしょう。装備は粗末で、木製の盾と木で削った槍を持たせている人間もいるらしいですが」

「装備の未熟な人間を相手にする事は無いだろう。そういう人間は、討ち取るべきではない」

アウステン「ガリアは都市国家が乱立している土地なので、戦乱が絶えない。

それを生業とする傭兵旅団もまた、数多いのだ。これで1千は稼いだのだろう。

武装を調達する必要も無く、総合的に見ればそれ程のコストは掛からないのだ。

こういった兵を雇ってきたという事は、やはり偽王軍は決戦を強いるつもりなのだ。

後が無い事を悟り、何とかして今回の戦いを勝利する事で、先につなげようとしている。

「アウステン」ガリアから、幾らか武器を買い取った様です。

クロスボウ、という報告が入っていますから、今回は射撃戦を最少に留めた方が良いかと」

ライレントからの報告。

クロスボウはアウステン「ガリアでよく使われる、強力な弓だ。弩と言う。

連射性能が弓よりも劣り、また山間部の多いリクセニアでの戦では

射線が真っ直ぐなクロスボウは不向きなので、制式に採用されていない。

しかし総合的な火力では長弓を圧倒的に凌ぐだろう。

確かにこれと撃ち合うのは、幾ら手数で勝ると言っても得策ではない。

さつさと混戦に持ち込むべきである、というのはアクセルも同感だった。

更にオギユストが対策を講じる。

「クロスボウの脅威を防ぐ為に、数台でも急いで攻城兵器を山肌に設置すべきではないですか？

数＋威力で結果的にこちらが有利になります」

「折角運び込んだ攻城兵器だし、使う事には同感だな。

しかし誰が指揮をする？ この中で攻城兵器に心得があるのは、ウィルムント大將軍だけだろう。

乱戦に陥るであろう決戦において、ウィルムント大將軍を欠く事はできないぞ」

オギユストの提案には、少しばかりの穴があった。

アクセル軍は皆、若いのだ。であるから野戦が主で、攻城兵器の扱いができる人間が少ない。

ウィルムントがずば抜けている他は、ウイスケルがようやく扱えて、他はてんでからきしというのが現状だ。

アクセルとて使えるモノではない。

「オレが担当しましょう」

だが、そこで声を上げたのはグラハスだった。

先日合流したばかりだが、ウイスケルを治療して、エシユタウ城を抜く戦果を挙げている男だ。

列席する事を疑問に思う者も誰もいない。が、軍の指揮となると、話は別だった。

「攻城兵器部隊は、敵軍に攻め寄せられれば迅速に撤退しなければならぬ。」

半身不随の貴様に、それができるのか。グラハス」

この時ばかりは、厳しい口調でウィルムントが問いつめる。

「戦場に出られる妹が2人おりますので、その2人に頼もうと思います。」

撤退が無理であるとオレが判断したなら、妹2人は逃し、オレは自決しよう」

「戦場指揮官が易々と死ぬ事を許されると思うな」

「常日頃から妹達にはオレの代わりをできる様、言いつけてあります。」

オレが死んでも、指揮には何の問題も無いでしょう」

「貴様ア！」

ガアンッ

ウィルムントが声を荒げると同時。

アクセルが卓を思い切り殴りつけた。

それを聞いて、ウィルムントはアクセルに視線を向ける。

「親子喧嘩や主義思想の違いなら表に出て殴り合って来い。」

軍議の場でやるのは、どうすれば戦に勝てるのか、だ。
グラハスの意見は的はずれなモノではない」

「は、はっ……」

一喝すると、ウィルムントは大人しく引き下がった。
それで軍議が再びできる様になったので、アクセルが口を開く。

「グラハス。妹がいつでも代わりができる様に、と言っていたな。
その妹に攻城兵器の扱いを仕込む事はできるか？
貴公が離れた安全な所から妹達に命令を伝え、妹達が部隊を率いるのだ」

「8日で、ですか」

「できないか」

「扱いを完全に教えるのであれば、不可能でしょうが。
指揮ぐらいならば仕込む事ができると思います。
ただ、かかり切りになりたいので、設置場所は大將軍閣下にお任せする事になるかと」

「結構だ。やってくれるな、ウィルムント？」

「承知しました」

問題が1つ解決する。

これで、湿地帯の敵に対して高い威力を誇る攻城兵器を使える様になった。

クロスボウとは比にならない戦果を、挙げる事ができるだろう。

「布陣は、どうしますか？」

アルセイア。

これが、最大の問題だとアクセルは思っていた。

湿地帯という場所は、騎馬隊の扱いが非常に難しい。

かと言ってこちらも射撃部隊と同じく最少に抑えてしまえば、平原に侵入された際に圧倒される可能性がある。

では平原に誘い込んで騎馬隊で叩くか。そうなれば、湿地帯という地形を上手く活かせない事になる。

遊ばせておくか、積極的に起用するか。

このどちらかを選ぶのは、アクセルには難しい事だった。

「敵の騎馬隊はどうなっている？」

「それなりの数は揃えている様ですな。

1万1千の内、2千が騎馬隊です」

「2千が湿地帯を突っ切れるか」

「そこは流石に何らかの策を講じるのではないでしょうが。

敵の將軍のプロストは、無能な人間ではありません」

南東からの迂回路が有力だったが、流石にこれにはアクセルも対処している。

ルフトヘイクにダングオン侯を残したのは、この警戒に当たらせる為だ。

そして、木の板を渡す等といった小細工には、攻城兵器が対応して

くれるだろう。

であるならば、騎馬隊を最小限にしておく事もありだった。

「騎馬隊を最小限にして、歩兵戦力に回してはどうかと思うのだが。これについては、少し意見を聞きたい。まず、反対意見から頼めるか」

グラハスが手を挙げた。

セスミレイユがいなくなり、改善されたとは言っても少々心配だった汚れ役だが、どうやらグラハスが言わずとも引き受けてくれる様だった。

「騎馬隊は戦の流れを変える存在です。最小限と言っても、1千は確保しておき、左右両翼に配置すべきであると思います」

「7千で、敵軍の9千に当たれるのか？」

「上手く湿地帯におびき寄せれば、できるかと。無理に敵軍を湿地帯に追い込む戦術を採れば、逆に尻込みしてしまい、上手く活かせないのではないでしょうか」

「同感ですな。無理に湿地帯という地形を活かすのは、殺しかねません」

オギュストが賛同する。オギュストならば、湿地帯という地形でも問題無く奮戦できるだろうが。

まあしかし、歩兵部隊の1つはオギュストに指揮してもらわなければならない。

であるなら、アクセルは布陣を考えた。

「オギユスト將軍に歩兵1個旅団。

ウィルムント大將軍、アルセイアに、歩兵騎兵弓兵混合連隊を1連隊と1大隊ずつ。

歩兵1個旅団を最前衛として、その後ろに混合部隊を左右に配置する形だ」

アクセルの提案に、皆が頷いた。

それを見て、満足げにアクセルも頷き、それから計略の話に入った。

櫓を解体して、解体した丸太を湿地帯の敵兵に叩き付ける。

もし平原に侵入を許し押し返せない様なら、一度後退し、混合連隊と入れ替わる事。

ただ両混合連隊の隊長に判断は委ねる。連携の方が良いなら、連携でも構わない。

今回編入されなかった残存兵力は、攻城兵器部隊の援護に回す事。それから、湿地帯中央部に糞尿を撒き散らす事が、どうにか決まった。

どうにかと言うのは、ライレントとアルセイアから手厳しい反対を喰らった為だ。

ライレントからは、北部に繋がる場所なので、湿地帯という地形を考慮してもそんな作戦は承伏できない、というモノだ。

一方のアルセイアからは、戦闘を終えた状態での士気で追撃する事が難しくなる、という事だった。

しかし実際にやれば、効果は絶大であるとアクセルは考えていた。少なくともカートスと傭兵達の間で、僅かな亀裂が生じる筈だ。

わざわざ援軍として来てやったのに、糞尿の中を進ませるつもりか、

と。

国軍に押され糞尿の中を進まされるとなれば、傭兵達の矜持を傷付けるのは容易い。

そして、その傭兵達を気に掛けて国軍を進ませれば、国軍の士気が落ちるのだ。

何とかねじ込む事ができ、糞尿が撒かれるのは6日後になった。これで戦は大分楽になる筈だ、とアクセルは思っていた。

「偽王、そして炎の使者」

ハイオウムを進発する前夜、リンデンステッド2世はクレテアと結婚した。

クレテアを正室とし、王妃としたのだ。

ただそこに儀式的なモノは無く、当人達とブロストとその妻シルリアとの4人で小さな会食をして、それが結婚式代わりだった。

女性2人からはあまり受けの良い結婚式ではなかったが、リンデンステッド2世とブロストが、どうしてもと頼み込んで開いた結婚式だ。

決死の覚悟で、今度の決戦にブロストは臨まなければならない。

その為にはリンデンステッド2世とクレテアの、幸せになる瞬間を見なければ、とリンデンステッド2世に吹き込んだのである。

真に受けたリンデンステッド2世が援護に回って、結婚式は開かれた。

「良い結婚式だった、そう思うよ。」

アクセルに知られたら、少し怒られるかも知れないけど」

「今もかんかんさ、向こうの王子さんは。」

オレ達の喉に槍やら剣やらの切っ先を飲み込ませたくて、うずうずしてやる」

そして今。2人は進軍途中にあった。

既にアウステン「ガリアから雇い入れた傭兵や、カートス軍との合流は済ませている。

戦場に向けて行軍し、到着すれば布陣を整えるだけだった。

「ボクに毒の1つでも盛ってくれる賢しさがあれば良かったのだけ
ど」

「小賢しさ、だぜそれは。」

あの王子さんはそんな事したら、武力で解決しようとしたお前と
一緒だと思うだろうよ。

暗殺を選ばない賢しさが、あの王子さんにはある」

「そうだね。ボクも同感だよ。」

エイルバーも、不思議と暗殺には否定的だったな」

「王族血統者を毒殺する勇気が無いだけだろ、アイツは」

そのエイルバーは、リンデンステッド2世の留守を守る役目に在っ
た。

代わりに出撃すると言っていたが、カートスの中将がそれを否定す
ると、大人しく従った様だった。

流石にこれだけの決戦で、大将が出ないのは筋違いなのだから当然
だ。

アクセルに至っては、本軍の動く戦いには全て参加している。

士気の為にも、リンデンステッド2世の参加は必須条件だった。

連合軍である今回の軍は、士気が瓦解すれば、そこで終わりなのだ。

「將軍閣下、ご報告！」

報告が入る。

リンデンステッド2世は進軍中、ブロストを側に置きたがった。
こうして入る報告を逐一聞けるからだ。

「敵軍が湿地帯中央部に糞尿を大量に撒いています。
こちらの士気を下げる為の、方策かと」

「えげつねえ事じゃがらあ、あの王子さん」

チツ、というブロストの舌打ちが、ハッキリとリンデンステッド2世の耳にも聞こえた。
慌てて口をつぐんだ辺り、どうやらかんしゃくを起こしたらしかった。

「良いか、この事は隠しておけ。」

雨が降ったらしくて足下がぬかるむ、って他には報告するんだ」

「よろしいのですか」

「行け」

伝令が頭を下げ、他に報告しに行く。
それを見送り、ブロストは額を叩いた。

「最ッ悪だ、あの王子さん。ここまでえげつねえ事じゃがるか」

「たかが糞尿じゃないか。慣れたモノだろう、軍人には」

「慣れちゃいるが、しかし士気には問題大ありだぜ。」

こっちの本軍は殆どが徴兵したばっかなんだ、そうだと知ったら士気が急に落ちる」

「それで報告を偽る様に言ったのかい？」

無駄だと思っけどな。それこそ賢しいアクセルは、埋伏ぐらいし

ていると思うけど」

「だとしても、やらねえよりやマシさ」

吐き捨て、プロストは隊列を離れた。

それを見送りながら、リンデンステッド2世はある決意をするのだった。

「お久しぶりです、殿下」

「お久しぶりです」

決戦翌日を控えた昼頃。

慌ただしくなった本陣に現れたのは、見た事のある2人組だった。忘れもしない老紳士とメイドの2人、ジョーズベイツとレアンヌの2人組である。

このタイミングで現れた2人に、思わずアクセルは顎が外れた。

「空気読まないのか、クリングス人は？」

今がどんな状況かわかっていて、わざわざ来たのか」

「無論、空気を読む事に掛けては一流ですが、クリングスは。

何せ空気を読んだお陰で、数年ぶりに平和を手にしました。

通商条約の方も進んでおりますから、あの日殿下と旅をしていて良かったと、心から思っております」

軽い頭痛を覚えながらも、アクセルは2人を一応の来賓として扱った。

しかし決戦が翌日に迫っているので、アクセルは甲冑姿であるし、側のリシスを離れさせる事はできなかった。

「今日お会いしたのは、他でもありません。

廉火術の事についてであります」

「廉火術か」

ヴァーントの山間部で、岩を吹き飛ばした時のモノだ。

あれ以来、アクセルはその存在を忘れていたが、間接的にはいえ浄火教の秘術を聖殿教会教徒のアクセルが使ったのだ。

もしセスミレイユ辺りに知れば、厄介な事になっていただろう。

そう考えると、この時期にやってきたというのは、空気を読んだのかも知れない。

「我々の廉火術は、代々使用者が見習いに託していく形式なのです。つまり、廉火術を扱った事の無い人間に、使用できる人間が間接的に使わせ、伝授するのです」

「ちょっと待ってくれ。

という事は、もしかしてだ。

私が廉火術を使う事ができる、という話をしに来たのか？」

「いかにも」

「宗教の勧誘なら間に合ってるから、帰ってもらえるとありがたいのだが」

「何もその様な穏健な話をしに、わざわざ足労したわけではありません

ん。

その程度の事ならば、書状で済ませました」

厳しく、アクセルがジョーズベイツを睨み付けた。
ジョーズベイツもまた、厳しい表情に変わる。

「廉火術は、非常に扱いの難しい術なのです。
感情だけで、発動する時も多々あります。

この戦に勝利した暁には、私の下で正式な修行をしてもらいたい
のです」

「この戦に勝利した後に、私はハイオウムを攻めなければならない。
ハイオウムを取れば、国王に即位し、外交日程をこなさなければ
ならない。

無理、と言ってくれるなよ。今日の国際情勢で、クリングスの人
間を重視する訳にはいかないんだ」

「承知しております。

ですから、私はこれからしばらく先まで、殿下の側に置いてもら
いたいと思い、参じたのです」

「何だと？」

「つまり、家庭教師の様なモノですな。

廉火術限定の」

「軍はどうした、軍は。

6人いる元帥の1人なのだろう、君は」

「他に5人おりますから、幾らか任せてまいりました。

そろそろ引退しようと思っていた身ですから、この様な形で隠居できるのであれば、悪くありません」

アクセルは再び頭痛を覚えて、椅子に背を任せた。

本来ならば、戦闘を理由に即刻つまみ出すところだった。

しかし、国際情勢を考えるとここで追い返すのも気が引ける。

オルバドスとクリングスの間で通商条約が締結されれば、リクセニアはオルバドスと協調路線を取った方が良い。

大陸の2大軍事強国であるこの2国の動きは、即ち大陸の情勢でもあるのだ。

酷い話である。正に脅しだった。あの時はおまけ程度にしか感じなかったアクセルだが、ジョーズベイツも中々強かな男である今回思わされた。

「わかった、わかった。

しかし今は戦時中なんだ。

クリングス元帥だからと言って、首を突っ込んでくれるなよ。したかったら軍事同盟の書状を持って来てからだ」

「流石にそちらを用意するのは時間が掛かりますな。

承知しました。今回は、静かにしましょう。

今回だけですぞ」

釘を刺してくるジョーズベイツに笑いかけながら、アクセルは明日の事を考えていた。

「兄と弟、王太子と第2王子」

大陸歴1545年8月18日

ゼフランテ北部の湿地帯を挟み、偽王カールトス連合軍1万1千、アクセル軍8千余りは対峙した。

両軍合わせて2万近いが、湿地帯は広く、例え両軍が全力で衝突したとしても、覆う事はできないだろう。

偽王カールトス連合軍の編制。

歩兵6千。騎馬隊2千。弓兵と輜重が1千ずつだ。

カールトス軍は弓兵、騎兵、歩兵の混合編制で、歩兵5百、騎馬隊2百、弓兵と輜重が150ずつ。

カールトス軍の方はどうやら指揮系統が別の様で、この1千は丸々遊撃部隊として機能する様だった。

対するアクセル軍の編制。

歩兵7千の中に弓兵まで含まれる。騎馬隊1千。残りが攻城兵器部隊や近衛隊だった。

歩兵の内3千が前衛で、残りの4千が騎馬隊1千と混合編制を組んでいる。

どちらも申し分のない布陣と言えるだろう。

「敵軍5百以上が射程圏内に入った時、攻城兵器を動かします。よろしいですね、殿下」

「ああ」

本陣で輿に乗ったグラハスと、アクセルは最後の話をしていた。

既にアクセルは武装し、騎乗している。今日は中間種の馬を使っていた。

グラハスは本陣に残り、ここから狼煙を使って攻城兵器部隊と通信を取り合う。

戦場に出たシイキイとイアンの2人の為の事だ。本陣では、傍らにセスティアを控えさせていた。

「一応は決戦ですから、総大将同士の会談が設けられてもおかしくないのですが。

しかしそうになると、折角用意した糞尿の湿地帯が半ば意味を失います。

総大将が自ら突き進むのですから、当初の効果は期待できないかと」

「構わない。そうなれば、私が偽王を引きつける。

総大将が前線にいる状態で戦闘という事になれば、クロスボウは使えまい。

十分な見返りだ」

「殿下と違い、偽王は近衛騎士仕込みの剣技を備えています」

それが問題である、とアクセルも思っていた。

アクセルがリンデンステッド2世に劣っている分野があるとすれば、剣術の分野だった。

幼い頃から王太子として王宮に住まい、剣術指南役を付けられて、鍛錬した剣術だ。

護身術程度だろうが、アクセルの護身術の対象が賊だったのに対して、リンデンステッド2世の対象は兵士だ。

練度が違い過ぎる相手に護身できる剣術を備えている。大きな違いだった。

それでも総合的な身体能力ではアクセルが勝り、最近ではリシスに稽古を付けてもらっていたから、大分と剣技の腕は上がっている。イーブン、と見て良いと思っていた。

「戦場を見ると、何故自分の体が動かないのか。考え、やりきれなくなります」

アクセルが黙っていたので、グラハスが語り始めた。

グラハスの視線の先には、慌ただしく行き交う近衛隊がいる。既に本軍は布陣を終えているが、アクセルがまだこの本陣にいるので、近衛隊は残っていた。

「元々大した傷では無かったのです。

しかし、傷口が化膿して、それで半身不随になりました。

ちゃんとした治療を受けた時には、死にかけていましたが」

「運が悪かったな」

「そうかも知れませんが、違うのだとオレは思っています。毒を盛られた、と」

「ッ」

穏やかでない言葉を聞いて、アクセルはグラハスを見やった。

憎しみの籠もった目で、城門を見据えている。

実際彼が見ているのは、城門の先、湿地帯の向こうに広がる敵陣だろっ。

「先日、毒を盛られましたね。殿下」

言われて、アクセルはチラリと城の方を見やった。
ジョーズベイツが来た前日に、茶に毒を盛られたのである。

この時もトーティが毒見をして、すぐに異質を察し吐いたが、倒れた。

吐き出したお陰で毒を多く飲んではおらず、またセスミレイユの従者をしていた神官が残してくれたオルバドス製の解毒薬があり、幸いにも事無きを得る事ができた。

後遺症も無く、今は安静の為トーティを眠らせているが、少しすれば様態は回復するだろうという話だ。

しかし、初めての毒殺というのは、衝撃だった。

この時期に来て、リンデンステッド2世が毒殺を仕掛けてきたのか、
そう思い、戦慄せんりつした。

「用いた解毒薬からして、オレに盛られた毒薬と同じである、と思っています。」

毒殺というのは面白い程土地柄が出るモノで、優秀な暗殺者はより優秀な毒を使いたがるんですよ。

保存状態や調理方法で効果が変質しない毒。そして容易には解毒が困難な、例えば解毒薬が国外にしか無い、とか」

チラリ、とグラスがセスティアに視線を走らせた。

セスティアは才女であり、多くの知識を持っていて、今回用いられた毒を解析したのも彼女だった。

「今回用いられた毒は、豪雪地帯に寄生する菌類、つまり毒キノコだったと判明しています。」

「この毒キノコが自生しているのは、シエルハットだけです」

「シエルハット、ノクラインか!？」

「ノクラインはかつて、オレと同じ部隊にいた事があります。中隊長だったオレの下で小隊長をしていて、負傷したオレを処置した人間ですよ。」

「これまで確証が無かったんですが、オレは今回の事で確信しました」

「いやまさか、とアクセルは考える。」

「シエルハットにのみ自生しているからと言って、即ち領主のノクラインの仕業である、という論理は飛躍し過ぎなのではないか、と。」

「だが、もしもグラハスの言う通りならば、あまりにも出来過ぎた話だ。」

「必ずどこかでノクライン本人が関わっている筈だ。そしてグラハス、自分と2度も暗殺を試みている。」

「特に自分だ。決戦が近く厳戒態勢を布いている現在の本陣で、アクセルに献上される茶に毒を混入させている。」

「1人2人が結託してどうこうなる問題では無い。」

「どうやら、事後処理がやり易くなったらしいな」

「大義はできました。付け加え、その手段も整っております。全力でこの戦いに臨んで下さい、殿下。」

「さすれば、国土の平定は1ヶ月と掛からないでしょう」

「うむ」

話を終えると、布陣を終えている本軍の方から、ざわめきが上がった。

そのざわめきは、恐らくリンデンステッド2世が1人で湿地帯を進んでいるから起きたモノだろう、とアクセルは思った。グラスも同感のようで、見ると頷きを返してきた。

「しかし、惜しいな。

半身不随という身でなければ、宰相に据えなければならない才だ。貴公は」

「欲しくばいつでもお呼び下さい。

オレの体の代わりに、妹達を働かせる事になります」

「良い義妹を持ったモノだ」

「オレの誇りであり、かけがえの無い家族ですから」

アクセルは大きく頷いた後、馬を走らせた。近衛隊が後に続く。リリスが横を併走する。

「最後の戦だ、近衛騎士達よ！

私に付いてきて、はぐれるな！ 良いなア！？」

「はっ！」

リリスの一際大きな声が聞こえたのを確かめ、アクセルは走る。兄がいる、その場所へ。

アクセル軍からは、ざわめき。連合軍からは、どよめき。

糞尿が撒かれた湿地帯を見て、諸侯はどの軍から進軍するかでもめた。

だが決戦を迎えるのだから、総大将である自分が先んじて行き、和平交渉が成らないかを話し合う、とリンデンステッド2世が言うと、軍議は収まった。

そして、今リンデンステッド2世は湿地帯を進んでいる。

板を渡して、ロバを使っていた。まだ戦闘行動には入っていないので、これを外される事は無かった。

向こうでは馬に乗ったアクセルが駆けてきた。一足先に、湿地帯の前で立ち止まる。

どうやら、平原までリンデンステッド2世を迎えるつもりは無い様だった。

「やあ、久しぶりだね、アクセル」

アクセルはフルフェイスの兜を被っている。

リンデンステッド2世の方は、頭部を覆うだけの鉄兜だ。

自分から相手を判別する事はできないが、アクセルの方は相手が兄である事がわかっていいるだろう。

まだ歩いている所から話しかけたのだが、アクセルはリンデンステッド2世が湿地帯の端に到着し、ロバから降りるまで、答えるのを待った。

「お久しぶりです、兄上。

よくもまあ、ここまでの事をなされましたな」

「いや、ボクよりも君の方がずっと上手くやったよ。

まさかあの状況から、ここまで盛り返してくると思わなかった」

「兄上が父上の遺言を反故にする様な動きを見せたからでしょう。父上の遺言を遂行し、王位継承権を破棄していれば、兄上もクレテア様も悲しまずに済んだモノを」

「ボクを殺すつもりかい？」

「許す訳にはいきません」。

兄上は既に、数千の国民を殺したのですから」

体格の立派なアクセルが、將軍の様な鎧を着ている。

その精悍な姿は、前にしているだけで気圧されそうな程だった。

これが王者の風格なのかも知れない、とリンデンステッド2世は思う。

だが、王者の風格は何もアクセルだけのモノではない、とも思っている。

背筋を正し、リンデンステッド2世はアクセルに向き直る。

「王弟アクセル。今ならまだ間に合う」。

君がボクに降伏してくれるのなら、ボクは君を殺す事はできない。各国首脳は君を支持しているからね。それに聖殿教会の教皇猊下を保護した実績もある。

これを理由に、君を処刑する事はできない。公職に復帰する事も難しくないだろう」

「兄上に降伏しなければいけない大義とは？」

更に顔つきを整えた。

ハッキリと、言い切る事ができる様に、呼吸も整える。

それからゆつくりと、リンデンステッド2世は説明する。

「カートス公国、ジスティン王国、神聖オルバドス帝国。
我がリクセニア王国と国境の面する国は、いずれも長男後継を掲げている。」

我が国もこの国際情勢に協調すべきなんじゃないか」

「それはその国毎の問題でしょう。
長男を後継にしなければ、生じる問題が多々ある場合があるので
す。」

しかし、我々リクセニア王国は違うでしょう。
先王陛下は四男でした」

「我が国は今、積極的に国際情勢に介入しようという時にある。
そんな国は国際的に見た場合、スタンダードな方がやりやすいと
思うのだけれど」

「詭弁ですな。大方エイルバー辺りに吹き込まれたのでしょう。
自国がこうだから他国もこう、という話は、傲慢に過ぎません。
傲慢を押し通す為に合理を為すのですか？
それは一見すると合理の様に思えますが、実際には合理ではありません
まい」

リンデンステッド2世が口をつぐんだ。
それを見て、アクセルは自らの言葉を発した。

「大体、兄上は少し勘違いをしているのでは？
兄上は、自分が王太子だから長子である、と思っていた様ですが、
先王陛下から、確かにそうであると言う話を聞いたのですか？」

すると、リンデンステッド2世の顔色が変わった。
何を言っているんだ、と言いたげだ。口を僅かに開き、眉をひそめ、
体を僅かに引く。

「私は聞きましたよ、兄上。

最後に兄上とお会いした、先王陛下の即位20年を祝う式典が終
わった翌日の事です。

兄上が退席を命じられ、私だけが後に残った事があったでしょう
？」

「……」

確かにあった、とリンデンステッド2世は記憶していた。

特におかしな事だとは思わなかった。2人で募る話もあるだろう、
と思っていた。

何より、父の下を離れたアクセルが父に甘える、良い機会だと思っ
たのだ。

「その時に、聞かされました。

我が王家には特別なしきたりがあるのですよ。

5歳の満年齢を迎えるまで、後宮を出る事ができないというしき
りです。

覚えておいででしょう？」

「確かに、そうだけれど。

完全に行き来が無かった訳じゃないだろう？」

アクセルだって、後宮でリシスに会ったし、ボクだって、後宮に
いる時にプロストに会っている」

「その2人は、子供ですね？ では2人の父親とは？」

同時に、私がシュバツク。兄上がエイルバーと会ったのは？」

「確かに、5歳を過ぎていたけれど、それは」

「ハッキリとどちらが兄、と告げたのは誰ですか？」

先王陛下ですか。母上ですか。それとも、エイルバーですか」

「……」

リンデンステッド2世の顔が、紅潮する。

血の気が引かないだけマシだったが、しかもはや冷静さは保てていなかった。

顔色の見えないアクセルも、それは同じであった。

「王太子だの何だのと言って、アンタはそれに固執しただけだろうが？」

体面ばかりを気にして、本質を見抜くという事をアンタは怠った」

「違う」

「アンタの政治姿勢なんだろうが、それを選んだ時点でアンタの器は高が知れた。」

愚弟が相手ならそれで良かっただろう。だが相手が悪かった。

アンタが戦わなければならないのは、今日の前にいる、このオレなんだからなアー!!」

「違っツー!!」

互いが同時に、剣を抜いていた。

鞘走らせ、リンデンステッド2世は構えようとするが、アクセルは

そのままリンドステッド2世の剣を弾いた。
リンドステッド2世が怯む。その間に、アクセルは退いて、構えを取る。

両軍から、喚声が上がった。

鉦がけたたましく叩かれ、進軍が始まる。
だがどの軍も冷静で、突撃はしてこない。

その中で全力疾走で平原から駆けてくるのは、アクセルの近衛隊だ。
近衛隊は巨大な鉄板を持ち、走ってくる。

アクセルとリンドステッド2世を囲むと、その鉄板を地面に突き
刺し、アクセル達に背を向ける形で踏ん張った。

戦場のど真ん中に取り残されたアクセルを助ける為の、苦肉の策だった。

「決戦、決闘、決着」

交渉の決裂、戦場中央での両総大将の決闘。ここから始まった決戦は、壮絶を極めた。

まず動いたのは攻城兵器部隊だった。

崖、それも敵軍からは死角になる様に仕掛けられた投石機は、最初の一撃で突出した部隊の両翼の陣形を粉碎した。

使われる岩は、人の大きさ程度のモノであり、軍その物を粉碎する大きさではないが、陣形を崩すには十分な代物だ。

進軍経路を確保しようと突出した尖兵を叩き潰す。

だが、流石に兵力の差は凄まじかった。

投石機で防げたのは第1陣の僅かなモノで、すぐに後続がやってきて投石が空けた穴を塞いで、進軍の為の道を整えて行く。

整えられた進軍路から、まずは歩兵隊が進んでくる。その歩兵が更に進軍路を用意して、段々と道を広げていくのだ。

着々と湿地帯の対岸、近衛隊が鉄壁の陣を布いている場所に近付いてくる。

あと数百mという位置にまで迫った。

「破槌部隊、前へエツ！！」

そこまで来ると、オギユストが動いた。

破城槌、櫓を解体して用意した丸太を、進んできた敵軍へぶつける部隊だった。

破城槌で使われていた丸太は重いので歩兵が6人がかりで持ち、櫓に使われていた丸太は軽いので、騎兵が2人で持ってぶち込んだ。

それらの攻撃を終えると、本格的に武装した歩兵が前に出てくる。役目を終えた破槌部隊は端へ避けて、射撃を敢行する。

敵軍からのクロスボウはまだ飛んでこない。進軍路の確保を優先した事と、前線にリンデンステッド2世が残った事がその理由だった。やがて、湿地帯を境目に乱戦が始まった。

「ハアアッ！」

ギンッ！

一方、近衛隊の鉄壁の陣の中では、総大将同士の剣闘が行われていた。

振り下ろしてくるリンデンステッド2世の刃を、アクセルは薙ぎ払う事で、弾く。

アクセルとの体格差を埋める為、リンデンステッド2世は振り下ろしの攻撃を好んで使った。

対するアクセルは、薙ぎからの切り上げ、刺突等で対処している。

最初は近衛隊もアクセル達を気に掛けていたが、やがてそんな余裕は無くなった。

両軍がぶつかり合い、鉄壁の陣に圧が掛かってきたのだ。

盾は、地面に杭の様な先端を打ち込み、表は木で、その下に5mmもの鉄板を仕込んだモノだ。

クロスボウとも言えども貫くのがやっという代物で、20kg近い重量があるが、その重量が鉄壁の陣を可能にしていた。

そうでなければ、すぐに圧力に飲み込まれていただろう。

「押せ押せエ！ 何してるッ、押し込めば相手はバランスを崩すぞ！！！」

オギユストの怒号が飛ぶ。

地形の差がありながら、敵が押してきているのだ。

歩兵の最前衛は槍を持たせている。パイクという5mもある長槍だ。列毎に若干の間を空けさせ、2列目までがこのパイクを使って、敵に突撃を仕掛ける。

元々は対騎兵用の武器だが、湿地帯という場所に敵を押し込むという意味では、有用な武器だと思っていた。

しかし、傭兵達は戦い方が違う。

兵士がパイクで刺されたと見るや、その背中を押して貫かせ、パイクの動きを封じて来るのだ。

流石に戦い方が違う。オギュストはすぐにパイク部隊と、密着戦を担当する斧や戟といった重量級武器を使う部隊とを入れ替えさせた。地力のある重量級部隊に代わった事で、一気に陣形が崩れる事は無くなったが、代わりに膠着状態が生まれる。

膠着状態に陥れば、押されるのは兵力差で劣るアクセル軍だった。

「限界だな」

城壁に上り、情勢を見守っていたグラハスが呟く。

既に戦場は平地帯へと変わりつつあり、鉄壁の陣の周りをほぼ半々で押し合う状態になっていた。

「攻城兵器部隊に撤退の狼煙を上げろ。」

シイキイが常に狼煙の確認をしている筈だ」

「はっ！」

伝令に命令を出し、狼煙を上げさせる。

山岳部で行われていた投石が、ピタリと止まった。少して、攻城兵器部隊の兵士達が山を下ってくる。

しかし、これで本格的に歩兵同士の戦いとなった。クロスボウは、確かにアクセルの言う通りに無力化された。これは大きいが、兵力で戦うとなるとやはりアクセル軍が不利なのだ。

上手く、オギュストが動く事を祈るしか無かった。

ドンドンドンッ

太鼓が打たれる。

ウィルムントとアルセイアの指揮する、混合部隊が動く合図である。

混合部隊が、緩やかに動き出した。包み込む様に右翼、左翼に回り込んで、そこから、一気に騎馬隊が貫いた。

瞬く間だった。それぞれの騎馬隊が反対方向に駆け抜け、2つの騎馬隊を通った跡は巨大な陣形の穴となる。

この穴に、オギュストの指揮する歩兵部隊が敵を押し込んだ。押し込まれた敵軍を、混合部隊の残った歩兵戦力が加勢し、更に湿地帯へと追いやる。

「ファリッツ伯クリストフ、討ち取ったア！！」

この頃になると、討ち取られ、掲げられる敵将の首の数が多くなっていた。

両軍合わせて6の首が上がっている。掲げられる首は、中隊長以上の貴族の首だ。パイクの切っ先に掲げられる。

しかし、これは大した問題ではない。中隊長がいなくなっても、こ

これまでの乱戦になれば、更に下の小隊、分隊、班単位での戦闘が勝敗を決するからだ。

そして、班は班長が討ち取られても、すぐに瓦解する様な事はない。であるから、分隊、小隊もすぐさま瓦解するという事は無かった。

決戦が始まってから、2時間が過ぎようとしていた。

連合軍の歩兵隊が湿地帯を渡り切れていないので、騎馬隊の出番もまだ来ない。

「騎馬隊分かれエ！！ 行くぞオ、車懸かり（くるまがり）！！」

ウィルムントの担当する左翼が、俄に押され始めていた。

そこでウィルムントは一旦歩兵を退かせ、車懸かりの陣形を喰らわせた。

騎馬隊を2百ずつ5つに分け、先頭が斜めから突っ込み横へ抜け、少し間を置いて後続がそれに続く。回る車輪の様にこれが続くのだ。見る見る内に、歩兵を削っていく。やがて押していた兵はいなくなり、そこへオギュストが攻勢を掛ける。

若輩のアルセイアでは、到底真似できない芸当であった。

敵も必死だった。

総大将が鉄壁の陣に囲われているので、下手に退く事ができないのだ。

しかしその必死な敵も、混合部隊と歩兵部隊の攻撃で、相当に数を減らしている。

戦場からではわからないだろうが、城壁から見守っているグラハスからは、アクセル軍と連合軍との数差が無くなっている様に見えた。

特に、兵同士が戦っている部分では既にアクセル軍が優勢だろう。

2千もの騎馬隊が、完全に遊んでいるからだ。

流石にこれを重く見た敵将が、馬から下ろして歩兵隊として編制し直し、1千が前線に加わっていく。

だが、今加わったところでこの部隊は使い物にならないだろう。糞尿を取り除いた訳でもなし、熱が冷めた今となつては、その泥に足を取られる事で士気が下がるだけだった。

黙っていて、このままなら勝てる。城から見ているジョーズベイツは思った。

であるから、最もこの戦いで重要であろう、鉄壁の陣を見やった。

「ハア、ハア……」

両者共に息が上がっている。

当然と言えば当然の話で、2時間戦いっぱなしなのだ、この2人は戦場にいる全兵士の中で、最も長く戦っている。

この時点で、アクセルが優勢だった。

リンデンステッド2世の兜を飛ばしている。兜はすぐに拾われて、陣の外に捨てられていた。

対して、アクセルの鎧は若干へこんでいるが、まだ突き破られる程ではない。

剣は2人とも、最初に使っていたモノが折れていた。

次に取り出したのは、アクセルがエストックで、リンデンステッド2世がサーベルだ。

鎧を纏った状態ではエストックが如何にも有利だ。使いこなせば、鎧の鉄板をも貫く威力の剣なのである。

それに比べ、サーベルはアクセルの纏っている鎧に対して、余りに無力だった。

「焦るな、焦るな……」

アクセルは己に言い聞かせる。目の前に火の粉がちらついていた。廉火術だろう。

感情的になっっている証左だ。冷静になつて、戦況を見極めて動かなければならない。

サーベルで致命傷は負わせられない。もし斬りかかってきたとしても、ガントレットでも防御できるのだ。

ここまで来れば、エストックよりもむしろ体術で組み伏せる方が重要だ。

言い聞かせると、ちらついていた火の粉は消え失せていた。

アクセルはリンデンステッド2世との距離を詰める。

すり足。リンデンステッド2世が同じだけ、後ろに下がった。

相手が武器の差を痛感している証だ。が、その後退は即ち鉄壁の陣という近衛隊に背中を預ける事を意味していた。

見た目だけ見れば決闘だが、始まりは単なるリンデンステッド2世の暴走で、この鉄壁の陣はアクセルを守る為のモノでしかない。

即ち、迫ればある程度の邪魔をする事は許される状況だったのだ。

「は、ハアッ！」

それが、リンデンステッド2世にもわかっていた。

サーベルで斬りかかってくる。

「がっ！」

アクセルは、サーベルの刃をガントレットと兜とで受け止めた。そうする事で、サーベルの威力を少しでも和らげたのだ。

すぐに、カウンター。エストックでの刺突。
喉元を狙った刺突だったが、間一髪躲される。
だが鎧を纏つての回避だ。明らかな隙ができる。
この隙を逃さず、アクセルはサーベルを払いのけて、蹴りでリンデ
ンステッド2世の足下を薙ぎ払った。

リンデンステッド2世が、倒れ込んだ。
逃がさない。勝機を。

アクセルは追撃をかけた。倒れ込み、胸を上にしたと同時に、その胸
にエストックを突き立てた。

「あ、が……」

リンデンステッド2世から、呻き声が漏れる。
胸に伸ばそうとする手を、アクセルが蹴飛ばし、エストックを更に
突き立てる。

「終わりだ、クラウド。」

これで、お前は負けたんだ」

「ぐ……」

言いながら、アクセルは横を見る。
近衛隊の人間と目が合った。
抜き身の剣が差し出される。敵将の首を取る為の剣だ。

受け取り、アクセルは振り上げながら、リンデンステッド2世を見
下ろした。

「何か言いたい事はあるか、クラウド」

胸にエストックを突き立てているだけだ。

まだ喋る事はできる筈だった。

アクセルが言くと、リンデンステッド2世は、口をパクつかせ、僅かな声を上げる。

「妻が、いる。クレ、テ、アだ。

彼女は、助けて、くれ」

「 良いだろう」

僅かに間を置いて、アクセルは答えた。

その答えを受け取ると、リンデンステッド2世は僅かに微笑んだ。剣を、振り下ろした。

ザスッ！

首に刃が食い込む。

血が溢れて、飛び散った。

アクセルは顔を踏みにじる事で固定し、刃を進め、首を刈り取る。

あまり見ない様にしながら、刈り取った首を剣先に突き立てた。

そして、それを掲げる。

「偽王リンデンステッド2世の首ッ！

正統王位継承者アクセル・ウィンツ・ラザフォードが討ち取った
アッ！！」

第4章└終章 年表（前書き）

とうとう王位継承戦争が終わりました。

しかし戦後処理というのは地味なモノですので、省きました。

アクセルの性格からして、あつと驚く様な事はしないでしょから。

第4章 終章 年表

大陸歴1545年8月18日

ゼフランテ北部の湿地帯で第2太子アクセル軍8千、偽王カールス連合軍1万1千が対峙し、衝突する。

両軍の総大将が和平交渉の為に突出するが、偽王リンデンステッド2世が突如斬りかかった事で、交渉は決裂。戦いが始まり、朝から昼過ぎまで続く決戦となった。

最後はアクセルがリンデンステッド2世の首を取る事で、戦いは終決。

偽王カールス連合軍は全将降伏という扱いだった。

偽王軍諸侯7名がこの戦いで戦死し、カールス軍の指揮官であったボロソウ・ヴォウ・ホルファーク中将も戦死。

同年同月25日

第2旅団、第3旅団をゼフランテに駐留させたまま、アクセル軍第1旅団がハイオウムへ向け進発。

偽王リンデンステッド2世が戦死したが、宰相エイルバーは徹底抗戦を示唆する。

しかし、最終的には軍の抵抗に遭って、宰相エイルバーは討ち取られ、即日開城された。

同年同月29日

聖殿教会教皇セスミレイユ1世が神聖オルバドス帝国皇都に到着。華やかなパレードで出迎えられ、停止している皇帝権力の一部を譲り受けた。

また、若年を理由に摂政としてクエッツェンカールト元帥を指名し、クエッツェンカールトはこれを受ける。

同年9月1日

アクセルがハイオウムに入城する。
軟禁されていたバイユバーク公ヴィーイーノを解放し、後宮を抑え、正室クレテア、プロスト將軍夫人シルリアを捕縛。
後日、正室クレテアは処刑、將軍夫人シルリアは自殺する。

同年同月3日

偽王軍の主立った諸侯が処刑される。
主として、ボルクツド侯プロスト將軍、ノルクオーク侯ガイン、シエルハット伯ノクライン等。

同年同月5日

アクセルが遺言を実行し、リクセニア王国フォード王朝第5代国王アクセル・ウインツ・グランフォードⅡウエンツェハラウト2世として即位する。
尚、リンデンステッド2世は戴冠式を行っていなかった為、戦時中から偽王として処理されており、今回の即位を以て正式に偽王として処理される事となった。

同年同月8日

国王ウエンツェハラウト2世が全土の平定を宣言。
これにより、6月より勃発していたリクセニア王位継承戦争が正式に終決する。
閣僚を招集したが、ウィルムント大將軍は隠居を宣言した為、大將軍の地位はノストラント侯オギュストが就任。
宰相にはルフトヘイク公シュバツク。他、財務大臣にライレント・ジークバウⅡベシュレスタ公爵、外務大臣にオリユバーク・セレブレア等。

近衛隊長はリシス・エレア・キュレインから、ベネディット侯アルセイアへ交代。リシスは副隊長へ降格。

同年同月12日

国王ウエンツェハラウト2世の戴冠式が開催される。

来賓は神聖オルバドス帝国、ジスティン王国、クリングス大公国、ゼクスヘル共和国、アウステンIIガリア半島諸国、カートス公国等。公王バルトロメウ・エルトイーユは教皇セスミレイユ1世に講和交渉を依頼し、ウエンツェハラウト2世がこれを受け入れたので、3年に及ぶ不戦条約を締結した。

リクセニア戦記 終章Ⅱ老紳士と老大公Ⅱ

大陸歴1546年8月29日 リクセニア王国首都ハイオウム

ウエンツェハラウト2世が即位してから1年が経った。

戦争で乱れた国内もようやく落ち着きを見せ始めている。

領土の再編、軍の再編、王位継承条項の創立等々、この1年でウエンツェハラウト2世は様々な改革を行った。

「ちょっと前は私、ジュリアーズ3世、ウエンツェハラウト1世がいて、貴方なんて若い若いって思っていたけれど。

気が付いたらウエンツェハラウト2世がいて、セスミレイユ1世がいて、エルトイーユがいて。

もう若いなんて言ってられないわねえ、私が老いたって言われる側だわ」

クリングス大公国大公爵、アナターシャ・クラウン・ヴィリーギオが言う。

リクセニアとの軍事同盟締結の為に訪れた彼女は、既に63となる身だった。

戦時中からリクセニア国内に留まっている、ジョーズベイツ元帥と久々の会談。

ジョーズベイツは今年で56になっていた。

「いやいや、アナターシャ閣下はまだまだお若い。

歳がどうこうと言うのでなく、精力的に政治を取り仕切っておられるからです。

ここにいて政治ができなくなると、本当に老いた、と思わされま

す」

「ウエンツェハラウト2世陛下はどのような方なのですか？」

「峻烈にして柔軟なお方ですよ。」

今回の騒動を引き起こした貴族達を一気に斬り捨て、しかし逆に自分の地盤を固めてしまわれた」

実際、今リクセニアの爵位を持つ貴族の数は、戦前の半分近くにまで減っている。

逆に騎士称号を持つ軍人が増えていた。騎士称号を与えて、中隊長の数を合わせているのだ。

騎士称号は世襲できるモノではないから、本来はあまり好まれるモノでないのだが、今は軍事の仕事が豊富だった。

であるから、この騎士称号の授与は軍人の間では好まれているという話だった。

だが、1番の支持層は農民だった。

ウエンツェハラウト2世は内乱の時、積極的に農民を保護しており、また内乱の後も1年間の減税を施しているので受けが良いのだ。

元々先王の頃からあった農民の支持を、一気に固めた感じだった。

若い、17歳の王の手腕とは俄には思いがたい程だった。

「ところで、セスミレイユ猊下はどうなのですか？」

アナターシャ閣下は、ここ1年猊下と大分お会いしていた様ですが」

「あまり思い出したくないわねえ」

アナターシャは胸をすくめた。

通商条約を締結する事に成功はしていたし、援助も引き出せた。と言っても帝国としてではなく、聖殿教会としてだが。

あまりにもすんなりといったその交渉が、アナターシャには気に入らなかったのだ。

あどけない少女。その彼女が賢明に教皇としての役目を果たそうとしている。そう受け取れる事業を、条件にされた気がしたのだ。

それはつまり、彼女の地盤固めにまんまと利用され、通称条約と援助は褒美に過ぎないという事だった。

「女としての本能が告げるのよ。」

あの子は、強かで、腹黒くて、野心いっぱい、それで恋をしてるって」

「3つ目まではともかく、最後のは何ですか」

「本能が告げるのよ。」

強かな彼女があんなに健気にやってるんだもの、絶対恋をしてるわ」

「ハッハッハッ」

ジョーズベイツが苦笑し、彼女もニコリと笑う。

だがすぐに、アナターシャは真顔になり、ジョーズベイツを睨み付けた。

「知ってるかしら、ジョーズベイツ元帥？」

オルバドス国内ではクエツツエンカート元帥より、ウェンツェハラウト2世陛下の方が人気があるのよ」

「それが、どうかされましたか。」

私が1年前手を結んだのは3国、特にウエンツェハラウト2世陛下とセスミレイユ猊下の名声の為です。

クエッツエンカート元帥は、その我々のお零れに預かっただけでしよう」

「私が最もまずいと思うのわね、ジョーズベイツ元帥。ウエンツェハラウト2世が、神聖オルバドス帝国の皇帝に即位する事よ」

「ハッハッハッ」

また、ジョーズベイツは笑った。

今度はアナターシャは笑わない。

真顔のまま、ジョーズベイツを睨み付けている。

「その点に関しては、アナターシャ閣下。

貴方の見解が間違っておられる、と断言させて頂きたい。

私は逆に、そうなる事が最も我々の国益に適う、と見ていますので」

「何故」

アナターシャが身を乗り出して、ジョーズベイツに詰め寄った。上目遣いに、ジョーズベイツはアナターシャを見据える。

「セスミレイユ猊下は、教えを広める事に関しては積極的でないのですよ。驚く程にね。」

つまり、我々が国教である浄火教を戴く限り、暗黙の不戦条約に

なります」

「私は10年20年の話をしていないわ、ジョーズベイツ元帥」

「40年先でウエンツェハラウト2世は57歳ですぞ、閣下。

まだまだ貴方が若いと言われるお年頃なのでは？」

言われて、アナターシャは乗り出していた体勢を元に戻した。
ため息をつく彼女を見て、ジョーズベイツは言葉を続ける。

「ウエンツェハラウト2世陛下は、内乱を経て大きく成長されたと思っております。」

陛下は用心深いお方ですから、適材適所の人心掌握術を見せております。

今後10年20年、彼を暗殺しようとする人間は国内には出ないでしょうな。

今回の内乱で、全部摘み取ってしまったのですから」

「だから、老い先短い私には10年20年を気にしなさい、と？」

「下手に老人が出しゃばると、リクセニアの内乱とジュリアーズ3世の二の舞になりますぞ」

「それもそうかしらね」

アナターシャが席を立つ。

「私の孫娘は元気にしてるかしら？」

レアン又は軍人氣質が強いから、穏健派の貴方に預けてみたのだけれど」

「元気ですぞ。最近、財務大臣のベシユレスタ公と特に仲がよろしい。」

爺の目が正しければ、あれは恋仲ですな」

「国際結婚なんて、あまり面白くないのだけれど。
老人が出しゃばっちゃいけないわよね」

少しばかりの苦笑を残して、アナターシャは会議室へと向かった。

終章 Ⅱ 元帥と教皇Ⅱ

クエッツエンカートは軍事一筋の人間ではなかった。

自分の受け持つ基地がある街の領主から、度々経済政策やインフラ整備等を相談され、それは陣営の設営という分野で活かされていた。また、この頃に培った人脈は生き続けており、何度かクリングス方面へ送られそうになったのをなだめたのも、この頃の人材が役立ったからだ。

元帥として皇帝の下に在り続け、遠い場所からクリングスの戦線を維持していた。

そして1年前から、クエッツエンカートは軍人という道を逸した。皇帝を引きずり下ろす機会が、とうとう巡ってきたのだ。

クエッツエンカートは聖殿教会を密かに信奉していたが、それを公言する事すらできない世にした皇帝を、常々恨んでいたのだ。

クーデターを持ちかけられた時は2つ返事で了承し、以後の皇帝の処遇も殆ど自分の思う通りに進んだと思っている。

だからこそ、今は摂政として教皇セスミレイユ1世に仕えていた。聖殿教会の信徒として、これほど嬉しい事は無かった。

「ね、お願いします。クエッツエンカート様」

その教皇に、今正面からお願いをされている。命令ではなく、あくまでお願いなのだ。

「いやしかしですな。はあ。」

確かに皇帝家の人間には、手を焼いています」

「私もそれが気になっています。

リクセニアで、もう内戦はしてはいけないと思いましたから。我が国でその愚を犯す事は、絶対に避けなければいけません」

「ただだからと言って、その、ええ。

確かに、確かにですよ。私も、ウェンツェハラウト2世陛下が悪いと言ってるのでなくて。

むしろその能力は高く評価します、ええ、しますとも。

しますがね。しますが、なんと云うんですか、はあ……」

かつてない混乱を、覚えていた。

今正に歴史が変わる瞬間に立ち会っている、という自覚だった。

自らの手で変える分には、特に思う所は無い。

どうやったって、自分の手で変えるしか無いのだ、と開き直る事ができるからだ。

しかし、いざ自分の手を離れられると、困ったモノだった。

どうしたら相手を自分の思う様に動かせるか、皆目見当が付かないのだ。

「投書の数々をお読み下さりました？」

私は、あの意見を信徒の総意であると受け取りました」

「読みました、はい、確かに読ませて頂きました。

いえ、それどころか聞いていますよ。娘が司祭ですので。

ミサに来た皆がどうの、枢機卿がどうの、パン屋のおじさんなどうの。

議員達からも度々言われてましてな。はい」

「どうしても、いけませんか？」

セスミレイユが首を傾げた。

娘が幼い頃、すり寄ってきた頃の事を思い出した。そうなると理性が飛びそうになる。だが、クエッツエンカートは精々繋ぎ止める。

「いけないとは、一言も私は申しておりません。いや、ハッキリ申し上げるべき時に来ているのでしょうか」

繋ぎ止めた理性が、明瞭になってきていた。

クエッツエンカートは席を立ち、身を乗り出す。

180を超える山の様な体格、と周囲から揶揄されるクエッツエンカートが乗り出しても、セスミレイユは微動だにしない。

ただ強かな光を秘めた瞳を、クエッツエンカートに寄せるだけだった。

「1年。1年は私は絶対にこれを了承しません。

武力を介してでも、ウエンツェハラウト2世の皇帝即位の話を、却下します」

「何故1年なのですか？」

「この1年をウエンツェハラウト2世陛下の外交に当てる為です。どうかして、我々の国の政治家と引き合わせましょう。

そして1年を経て、ウエンツェハラウト2世陛下が我が国の政治家達の支持を取り付ける様なら。

その時は、私はセスミレイユ猊下とウエンツェハラウト2世陛下を断固として支持しましょう」

「そうですか」

セスミレイユの瞳の煌めきが、僅かに揺れた。
やがて揺れは強まり、揺れに揺れた後、静かになる。
その間、どちらも微動だにする事は無かった。

「わかりました、1年間我慢します」

セスミレイユの言葉を聞くと、クエッツエンカートはドサリと巨体を椅子に投げ出した。

ようやく国の大事が解決した、という心地だった。

ここ最近、急速にウエンツェハラウト2世の人気は高まっていて、国内でも度々名を聞く様になっていた。

特に、皇帝の話をすると、必ず出てくる名になっている。

何の工作も無しに出る様な名前ではない。恐らく裏で工作している人物がいる。

その主要人物を説得する事ができた。

ようやく、クエッツエンカートは摂政としての職務に忙殺される日々に戻れそうな気がした。

終章 Ⅱ 元帥と教皇Ⅱ（後書き）

クエッツエンカートは愛嬌のあるおじいさんですね。

冷徹な軍人になりきれず、信徒になって、政治家に転身した男です。色々と複雑な人間なんでしょう。

終章終話 Ⅱ 道行けど道行けⅡ

ウェンツェハラウト2世の周りには、人が絶えなかった。

勤勉なライレントがよくやってきて、財務の話をして、帰っていく。神経質なオリュバークは、逐一外交状況を報告してくるし、ある程度は裁量に任せると言っても必ず報告を欠かさない男だった。

その2人が帰ると、思い出した様にシュバックがやってくる。

宰相だが、むしろ側にいる様なタイプではなく、つぶさに政情を探って自らの手で調停できる所はして、できない所をウェンツェハラウト2世に託すという感じだった。

シュバックもいなくなれば、後には近衛隊長のアルセイアが残っていた。

宮殿まで下がると今度はトーティがいて、眠る時にようやく誰も居なくなる。

「寂しそうですね、陛下」

そんな中に含まれていない筈の、グラハスがやってきた。

元は子爵だったが、領地の再編に伴い侯爵となっていた。

地方長官としての仕事は淡々とこなしており、留守を妹のセスティアに任せられる様になったので、シキキと時々ハイオウムにやってくるのだ。

イアンは今、ウイスケルの下でしごかれていたらしい。

私兵の指揮官に過ぎなかったが、騎士称号を授与され、中隊長をしているのだそうだ。

「そう言えばお前は、冗談が嫌いだったか。」

となると、大真面目にその事を言っているのか、グラハス」

「その通りですよ。真剣な話です。

陛下も１７になりましたから、そろそろ正室を迎える頃か、と」

側に義妹のシイキイを従えているグラスは、既に２２だが、未だ独り身である。

端から見ていると、シイキイと良い仲の様に思える。

その自分を差し置いて、正室や側室といった後宮の話をされるのは、何だかむずかゆかった。

「生憎だが、正室を迎えるつもりは、まだ無い。

とっておきの特等席だな。ここばかりは他の女にくれてやる事もできないんだ」

「雪の園の姫ですか」

「そうだ」

ハッキリとした物言いをするグラスが、意外な言い回しをした。どうやら笑っている類の話ではない、と思っている様だった。

「オレは雪の園の姫にお会いした事は無いのですが、どの様な方だったのですか？」

「聞きたいか？ 隣に良い年頃の娘を置いていて、他の女の話をしたいのか」

茶化すと、シイキイは顔を真っ赤にする。

慌てて何かを言おうとして、しかしウェンツェハラウト２世の前だからと、口をつぐんで。

グラスが目で制すると、ようやく静かになった。

「男は意中の女の話程したがらず、そうでない女の話程聞きたがる生き物ですよ」

「成る程」

ニイ、とウェンツェハラウト2世は口端をつり上げた。

怪訝そうにグラスが見返したが、気付いていないならば、言つてやるつもりは無かった。

セスティアに危険な使者をさせて、イアンに埋伏をさせて、しかしシイキイについては、目立った話をグラスの口から聞いた事が無かった、という事を。

「雪の園の姫は、聡明だ。だがだからこそ、光と闇の部分が明瞭だ。氷の様に透き通っている。だから当人にも、自らの光と闇が見える。」

氷だから、好き勝手に見える角度を変えられる。

そうしている様は美しく、またその美しさが人の心を癒すモノであると、私は知っている」

「成る程」

「わかってないでしょう、兄様」

そっぽを向いて頷いたグラスに、シイキイが突っ込んだ。

ウェンツェハラウト2世は苦笑する。

頭は良い様だが、女の良さを詩的に表現されても、ピンと来ないらしい。

「近衛隊長をしていた、リシス嬢はどうしているのですか？」

グラハスは冷静さを崩さなかったが、あからさまな話題の切り替えをしてくる。

もう少しいいじめてやろうかどうか、悩んだが、やめておく事にした。そういう役目はシィキィに譲ってやろう、と思ったのだ。

「近衛隊の副隊長をしているが、それがどうかしたのか？」

「幼馴染みなのでしょう？」

何か思う所は無いのですか、側室にしてやろう、とか」

「シィキィ。連れ出して教育してやってくれないか」

「承知しました」

グラハスが連れて行かれる。

まだ出て行くつもりは無い、とのたまっていたが、入れ替わりにライレントが入ってきて、扉の向こうに消えると、バシッと耳に痛い音が響いた。

「あれ程無粋な男は初めて見たな、ライレント。

お前の実弟とはとても思えん」

「若い頃を軍人として過ごしたモノですから。

女の味を知る前に厭世的えんせいてきになってしまって、軽んじている所があるんですよ。

それ程外す男ではないのですが」

その言い含みに、ウエンツェハラウト2世はライレントもか、と半ば呆れた。

ライレントが持ってきた資料に、目を通す。

初め数ヶ月は、ライレントが悲鳴を上げる様な数字ばかりが並んでいたが、最近は落ち着いてきていた。

領地の再編が上手く行き、税収も1年を過ぎてようやく元に戻ったからだった。

それに、必要なインフラ整備というのは限られていた。賢君と呼ばれた先王が、ちゃんと仕事をしていた証左だ。

であるから、とりあえずは金を投じてどうこうなる事ではない問題から、ウエンツェハラウト2世は着手していた。

所謂平定作業で、自分に否定的な考え方を持つ貴族を次々と粛清していた。

大した作業ではない。多くの貴族はいなくなった事を領民が喜んで、不平不満を言う輩も鞭と餌とを同じだけ与えてやるとすぐに黙り込んだ。

これからは、調査と聞き取りの段階に入るだろう、と思っていた。そうなると王にできる事は急に少なくなる。現場の声が第一で、どこに金を出すか、これを命じるしかする事が無くなるからだ。

しばらくは暇になる筈、そう思い、ウエンツェハラウト2世は資料を見て、驚いた。

「何だ、この献金の額は？」

「鍛冶職人達からです。」

どうにも、各地で技術差があり過ぎるだとかで、その交流の場を設けたいと。

引いてはギルド創設が有力なので、お願いしたいのだとか」

ギルド。その単語を聞いて、ウェンツェハラウト2世は全てを理解した。

リクセニア王国国内の商業活動は、それ程活発ではない。

諸侯が勝手に自分の街に有用な職人を保護して、それまでだったのだ。

当然、ギルドの様な独占商業を保護する様な組織も存在していない。

しかし、隣のオルバドスでは事情が違う。

リクセニアやゼクスヘル、他にもアウステン、ガリア諸国、ジステインにも交易経路を持つ為、自分達の商業組織を保護する為ギルドを形成している。

このギルドをリクセニアにも作る様、言っている。

つまりは、もっともっとオルバドスとリクセニアの交易は豊かにする、という事で。

問題も山ほど起こしたいし、国の作りを近くしたい、とも言われている訳で。

「どうやら、雪の園の姫がオレに会いたがっている様だな」

「は？」

弟の言い回しは、兄には通じなかったらしく、ライレントが間拔けな声を出す。

何でもない、と言いながらも、ウェンツェハラウト2世は笑いを隠さなかった。

「ライレント、オリユバーグも呼んで会議を開くぞ。
ギルドを作るとなれば、オルバドスから意見を仰ぐ事になりそう
だ。」

とりあえず外遊という形で意見を先延ばしにしておいて、その間
に私自身が様子を見てくる。

良いな」

言いつけると、ウエンツェハラウト2世は口元を歪ませた。

呼ぶも参じるも、2人の間ではこういう事になるのか。

それもまた、2人だけが歩く道としては丁度良いのかも知れない。
道険し道。他者が追隨できない道。そこを歩く事ができる人間が、
寄り添い歩く。

悪くない、悪くない。そういう人間を、自分も欲しているのだ。

終章終話 Ⅱ 道行けど道行けⅡ（後書き）

これで終わりです。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

いやしかし、書いていた本人としてもこの終わり方はどうなんだろう……。

第2部があるかも知れませんが、UPはしてませんが、一応外伝的な短編集を書いています。

本編を補う様な外伝なので、「？」と感じた部分を言ってお下されば、短いながらも物語として起こせるかも知れません。

外伝 Ⅱ 輝いた夢の跡Ⅱ

開城されたリクセンドムは、しばらく慌ただしさだけで包まれた。勝手に運び込まれた資財を取り払い、エイルバーの下で投獄されていた人間を選別して、政府機関を整える。こういった作業は地味であり、また努力を必要とするモノで、どうしても時間が掛かる事だった。

アクセルには、その間にやる事があった。ゼフランテの決戦で捕らえた諸侯の処遇と、そしてリンデンステッド2世に与していた人間達の処遇だ。大変難しい仕事であったが、リクセンドムに入ってまずすべき仕事は、後宮の処理だろうと考えていた。後宮には、リンデンステッド2世の妻と、総司令官であったプロストの妻がいるからだった。

「初めまして、かな。

クレテア殿、シルリア殿」

9月の3日。後宮で、アクセルは2人と対面した。

2人は身体を拘束される事無く、そのままの姿で座っている。

アクセルの側にはリシスとアルセイアが控えており、絶えず2人を睨み付けている状態であった。

妹のクレテアは赤茶けた髪の淑女だ。大きめの瞳とつばらな唇、儂げで可憐な印象を抱かせる。

姉のシルリアも同じ赤茶けた髪の持ち主だが、丁寧に整えられた妹の髪とは違い、単に結っているだけである。

また眼力も強く、力強い印象を受けた。

彼女が睨み付け、またリシスとアルセイアがそれに睨みで応える形だから、場は何とも言えない張りつめた空気を漂わせていた。

「クレテア殿は兄と結婚をしたそうだから、一応は義弟という事になるのか。

そうなれば、シルリア殿にとっても私は義弟か。
ならば姉上とお呼びした方が良いのかな？」

「貴方の様な人間に、姉と呼ばれる筋合いはありません」

挑発じみたアクセルの言葉に、シルリアが力強く反発する。
アクセルの脇でアルセイアがいきり立った様だが、アクセルはそれを手で制した。

それでシルリアは調子に乗ったのか、自ら話を始める。

「ゼフランテで主人は拘留されていると聞きます。
主人をどうするおつもりなのですか」

「偽王軍の軍事的支柱だった男だ。
切らねばなるまい」

シルリアの言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、アクセルは即答した。

それを受け、シルリアは表情を陰しくする。

「話し合いで決着すれば、良かった。
しかし兄上はそれをなさらず、私を武力で排除する道を選んだ。
その兄上に賛同し、力を貸す事を選んだのがボルクッド侯だ」

「ブリンドビル公にそそのかされただけでは」

「それもあるだろう。だが決断したのは兄上だ。兄上に協力しようと思ったのも、ボルクツド侯だ。今となつてはこの2つを曲げる事はできまい」

シルリアは唇を噛み締め、拳を強く握る。それを見て、クレテアが初めて口を開いた。

「あの、お聞きしたい事があります、殿下。クラウズの、夫の死に様は、どの様なモノでしたか」

クレテアの言葉に、アクセルは目をつむった。そうすれば、まだまぶたに焼き付いた情景が浮かんでくるのだ。果敢な剣術で立ち向かってきた兄の姿と、アクセル自らが掲げる兄の首が。

「勇敢な死に様だった。最後まで私に立ち向かい、そして最期まで、奥方を気に掛けていた。」

最期の言葉は、妻を助けて欲しい、という言葉だった。その兄上の意思を汲んで、私はそれを了承した」

僅かに、アクセルは顎を撫でた。クレテアがアクセルの言葉を聞いて、顔を俯けて涙をこぼし始めたからだった。

女の涙というモノを見るのは、アクセルにとってあまり経験のない事だった。

リシスが泣いている姿を見たのが初めてだったが、悲しくてどうこうというのではなくて、単に苦しくて泣いていただけだ。

悲しくて涙を流す人間は、アクセルはこれまで見た事が無かった。少しばかりの居心地の悪さを覚えたが、今ここに座っている身として、その様な事は許されなかった。

「しかし、私は約束を完遂するつもりは無い。

奥方が腹に子を宿した場合、父がどんな立場の人間であろうとも、継承権を主張する可能性がある。

そうなればどうなる？ 再び内戦となり、国力は低下する」

言い聞かせながら、アクセルは言い切った。

その言葉にピンと張りつめていた空気が、音を立てて崩れた。シルリアが立ち上がり、身を乗り出してくる。

「クレテアを、殺すって言うのか！」

リシスがシルリアの肩を抱いて、それを制する。だが構わず、シルリアはアクセルに怒鳴り掛かる。

「アンタは最低だ！ 約束を、人と死に際に交わした約束を反故にするつもりか！」

「約束ではない。口から出任せだったのだ。

兄上がせめて最期は安らかに逝ける様、そう思い口にしたただけだ。偽善を演じたんだよ、愚かな兄が最期に悲しみを抱かぬ様に」

「だったら、無駄で浅はかな考えだ、それは！

陛下がアンタの嘘を、見抜けない筈が無いんだ！」

ダンッ

足掻きが強くなり、耐えられなくなったりシスはシルリアを机に組み伏せた。

性格も相まって多少は体を鍛えていた様だが、流石に組み伏せられると、もうシルリアは身動きができなかった。憎々しげに、アクセルを睨む。

「　　いいえ」

俄に慌ただしくなった場に、シルリアのか細い声が響いた。

「夫はきつと、殿下を信じていたと思います。

愚直な方で、フレシア様からの手紙が届くと、いつも立派な弟だと自慢していらっしやいましたから」

アクセルはまた、顎に手を伸ばした。

兄、クラウズのそういう所は、アクセルも唯一嫌いになれなかった所だった。

愚直だ愚直だと口には出していたが、しかし内心では、そういう兄の態度に安堵を覚えていた。

だからこそ、兄を兄だと思わなかった事は、これまで1度として無かったのだ。

偽王を名乗ってからも、ずっと。

「武力を盾にしたのだって、賢明な殿下はきつと内乱になるのを避けるから……」。

そう思っ、夫は強硬な態度を取ったんです。最後は話し合いに応じってくれる筈、と。

愚直な方ですから、殿下がその後どんな態度を取っても、言い続けてたんですよ。

ですからきつと最期も、殿下のお言葉を、正直に受け取ったんだ
と思います……」

堪えきれなくなったクレテアが、嗚咽を上げて泣きじゃくり始める。
その声は静を乱すモノだったが、しかし何故か、先程よりも場は静
まりかえっていた。

彼女の声だけが響き渡り、その他は静寂を保っていた。

耳に痛い静寂だった。

アクセルはこういった静寂は慣れたモノだったが、しかし今日ばかりは、堪えきれなかった。

ドカツ

アクセルは机に拳を叩き付け、クレテアが肩を震わせる。
慌てて上げた彼女の顔を見ない様にしながら、アクセルは立ち上がり、背を向ける。

「アルセイア、偽王妃クレテアを牢屋に連行しろ。
明後日、牢屋で処刑を執行する様に」

「はっ」

牢屋での処刑執行。それは即ち服毒であった。

後ろで何人かの息を呑んだ音、声にならぬ声が聞こえる。

続いて、アルセイアがクレテアを拘束する為動きだし、鎧をガチャ
つかせた音。

ブチッ

最後に、ゴムの様なモノが切れる音がした。声にならない悲鳴が、場に痛い程響いた。続いてゴボツという何かが溢れる音。

「処置はしてやるな、リシス。

今頃は、ゼフランテの方で夫が処刑される頃合いだ。一緒に逝かせてやれ」

アルセイアが、クレテアを連れて城の方へと向かっていく。

アクセルはそれを見ない様、目をそらした。机、それから地面へ。冷たくなっていくシルリアの顔が、見えそうになる。それを遮って、リシスが立ちはだかった。

「アンタは、アクセルはこれで良かったの？」

久しく聞いていなかった、友人としての言葉。

それを聞いて、アクセルは空を見上げた。

青く透き通った空だ。これで曇っていたら、また思う所も違つのだろうか。

「皆で笑い合つて、この机を囲みながら、茶を飲む。

そんな夢を、見ていたい時もある」

呟く様に、アクセルは答えた。

まぶたを下ろさずとも、そんな情景を想像できた。

アクセルが苦笑し、クラウドとプロストは可笑しそうに笑う。

リシスとシルリアが意気投合していて、クレテアがそれを幸せそうに微笑んで見ているのだ。

王位継承という争いが起きなければ、それが夢で終わる事は無かつ

ただろう。

「夢には必ず終わりが来る、って言うけれど。現実だって必ず死つていう終わりが来るじゃない。それなら夢が少しでも長く続く為に、努力すべきだったんじゃないかな？」

「夢は、他人には見る事ができない。
1人1人、違うモノだ」

想像した情景は、アクセルが抱いた夢だった。だがリススが想像した情景は違う。それと同じ様に、クラウドが抱いた夢も違った筈だ。
夢は人によって違う。だからこそ現実というモノが必要なのだ。

「現実というのは、誰かには甘く、誰かには厳しい。
それは客観的に見れば整合性があつて、1つのモノになる。
夢には無くて、現実にあるモノだ。
だからこそオレは現実を選んだ」

現実には支障を来すのが夢で、夢を打ち砕くのが現実なら、現実にする。

夢よりも現実が頑強な存在であり、夢では立ち向かえない存在ならば。

アクセルは夢を見る事は無い。それがアクセルの選んだ道だった。
リススに背を向け、アクセルは歩き出す。

「夢は当人には甘くとも、現実的な他者にとっては甘くなく、苦くもあり、辛くもある。」

兄上の夢が、そうであつた様に。それが現実ならば人は、須く現実の上に立たねばなるまい。

シルリアの死体は手厚く葬ってやれ、リシス」

外伝 Ⅱ 輝いた夢の跡Ⅱ（後書き）

入れるべきかどうか悩んでたんですが、メッセージで感想をいただいたので、一応。

本編には無かった、アクセルがクラウドと袂を分かった本当の理由、という所でしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4443f/>

リクセニア戦記

2010年10月10日13時48分発行